

# 『ベルツの日乗』について

## 「風貌・風体記事」の検討を通して

野口武司

一

エルヴィン・ベルツ (Erwin Baelz 一八四九—一九一三) の日乗は、明治九(一八七六)年一月より同三十八(一九〇五)年八月までの約二十九年半に亘る記事が『ベルツの日記』(トク・ベルツ編、菅沼竜太郎氏訳、岩波文庫本上・下二冊)として、これに続く同三十八年より大正二(一九一三)年五月までの約八年間に及ぶ記事を主として、これに明治十一(一八七八)年より同十四(一八八八)年までの足掛け四年間に亘る、エラなる女性との交渉に関わる事柄を綴った記事「エラ」と、明治十七(一八八四)年に、訪日後における最初のサバティカルを得て、アメリカ經由にて故郷の地、ドイツはシュトゥットガルトへ帰る途次のこと、中に就き、アメリカ国内で見聞した様々な事柄を記述した「アメリカ日記」とを加えたものが『ベルツ日本再訪』(若林操子氏監修、池上弘子氏翻訳、東海大学出版会)として各々公刊されている。

さて、これら前者(『ベルツの日記』)・後者(『ベルツ日本再訪』)のうち、前者については、上に尠しく触れておいたように、明治九年に所謂お雇い外国人教師として東京医学校(翌十年、東京大学医学部と改組改称された)に招聘されてより、同三十八年にドイツへ帰国するまでを記述の対象範囲としており、そこには、当該期間中に試みられた三度の賜暇帰国(第一回は上記の十七年、第二回は二十

十五年、第三回目は三十三)とフランス領インドシナ及び韓国などへの研究踏査旅行(三十五年十一月より約二ヶ月間のトンキン旅行)年で、各々約一年間宛。同三十六年四月より約三ヶ月間の韓国旅行。

のうち、研究踏査旅行の記事も含まれている。これに対して後者はといえ、祖国ドイツへ帰還した明治三十八年の記事は、独りザルツブルクでの九月一日条のそれのみというように極めて簡略なものである。併し乍ら、その翌三十九年から、心臓大動脈瘤という致死の病魔に冒されて、竟にその生涯を閉じる三ヶ月前の、大正二年五月までの足掛け八年間に亘る記事は、A五版・一〇ポイント活字組みで五九五頁に達し、一年当りの平均紙幅は約七四・三頁という具合で、かなり豊富にして詳細なものとなっている。その間、明治四十一年(一九〇八)年には、伊藤博文らの要請を容れて三月に再来日し、六月に離日して帰途に就いている。その間際の様々な情況・事蹟を伝える記事も亦、委曲を尽くしている。

こうした明治三十九(一九〇六)年以降の記事にあっても、それ以前の在日期间中における診察・診療などの医療駆使して物されており、特に同三十八年のドイツへの帰国後は、それ以前の在日期间中における診察・診療などの医療活動に替り、主として各種の学会・協会などでの講演・研究発表や論文執筆などの学術活動、さらには学会・協会の運営に関わる社会活動にも積極的、且つ精力的に取り組んでいることからみて、こうした方面の関係者から得られる情報もかなりの比重を占めていたと推察されるのである。

孰れにしても、『ベルツの日乗』は、その前者・後者を問わず、彼自身に関わることに、家族・親族に関わることに、そして汎く政治・経済・社会・文化一般などに関わる事柄を事細かに伝えている。取り分け、政治・経済・社会・文化などに関わる事柄についての記事は、独りドイツのみならず、汎く諸国の書物・新聞・雑誌などの他、諸国の外交官や大(公)使館職員、さらには政治経済界や教育文化界など、各界の第一線で活躍している多くの知己——上述した学会・協会などの学術・社会活動を通じて交流のあった人々をも含めて——との人的連繫を通して得られる膨大な情報を素材にして物されているだけに、その内容は、多種多様で広範に亘るとともに精緻さを有し、信憑性の確度も極めて高く、記

録資料として抜群の価値を有するものといってよい。只惜むらくは、明治九年より大正二年までの三十八年間のうち、明治十八（一八八五）年より同二十（一八八七）年までと、同三十（一八九七）年より同三十二（一九〇九）年までの各三年間、都合六年間の記事を闕逸していることである。他日、この闕逸部分の記事が発見されて公刊されることを切に冀望するものである。

ところで、嘗て稿者は、本誌第十五号において「ベルツの日記」について——その内容と性格——なる論攷を公にしたことがあるが、そこでは、同日記、即ち前述の前者に所見される多くの諸記事の中から、記主ベルツ自身が直接に面謁ないし面談した者、あるいはそう考えられる者、医師としての彼が診察・診療などの医療行為を施した者、或る事柄につき某かを発言・言説して自らの所信や見解を表明している者、などといった人々について記してある記事を摘出して、これに検討を加えることにより、同日記の内容と性格をより能く理解するための一助とすべく若干の鄙見を開陳しておいた。この旧稿執筆当時には、まだ、既述した同日乗の後者が上梓されていなかったため、そこでは当然のことながら、同日乗の前者の該当記事のみを討究の素材資料とせざるを得なかったのである。爾後、その後者が発刊されるに至ったので、ここに初めて、それら前者・後者の双方を併せた「ベルツの日記」全体を通しての考究が可能となった。そこで本稿では、当該日乗全体を通してみられる諸記事のうち、特に某人物の為人を示す記事の考察を通して、その日乗の内容と性格について一斑を闡明してみたいと思う。本稿では、上述来の事由により、日記全体を日乗、その前者・後者の孰れか一方を日記と各々呼称して書き分けているが、これは以下においても同様である。

## 二

凡そ某人物の為人を示す要素をば、思い付くままに事項別にして列挙すれば、左記のようになろう。

。閱歴・事歴・門地・立場などに関わる事柄

。事業・就業活動などに関わる事柄

。発明・発見・開発を含む調査・研究などに関わる事柄

。功勞・業績・褒賞などに関わる事柄

。権勢・威力・貨殖などに関わる事柄

●風貌・風体・容姿・体軀・言語・音声などに関わる事柄

。氣質・品性・品格などに関わる事柄

。知性・知覚・認識・知識・教養・理解などに関わる事柄

。感性・感覚・情感・情趣などに関わる事柄

。思想・思考・所感・所見・見解などに関わる事柄

。挙措・姿勢・生活態度・状況などに関わる事柄

。意志・意図・願望・主張などに関わる事柄

。興趣・関心・好奇・嗜好などに関わる事柄

。伎倆・特技・才能・手腕・力量などに関わる事柄

。体調・疾病・病状などに関わる事柄

もともとこうした分類事項は、各事項毎の各々に内蔵する意味内容の上において、相互に微妙な係わり合いをもつものが多いことを認めねばならない。ここでは、それら多くの諸事項のうち、●印付加のそれ、即ち某人物についての風貌・風体・容姿・体軀・言語・音声などに関わる事項のうち、特に風貌・風体それ自体に関わる事柄を示す記事（以下、これを「風貌・風体記事」と仮称する。）を組上に載せて、これに検討を加えてみたい。行論の便宜を考慮して、先ず煩を

厭わずに「風貌・風体記事」それ自体は固よりのこと、これに加えて件の記事に付随し、あるいは伴出して、当該人物についての某かの為人を示す記事をも、必要範囲において適宜抜載することからはじめよう（各事例についての抜載文中に付記した傍波線部分は、いわゆる「風貌・風体記事」を示す簡条であり、傍△・○両印部分の各々意味するところについては、後述する。また、各事例についての抜載文の末尾に記す数字は、その所在箇所年・月・日条を示す。）。

(1) アウグスト(ベルツ従兄弟) 夫人マリア、(2) 同義父、(3) 同義父夫人

○工場の表側に面した建物内のアウグストの住まいは、どこか昔の裕福な都市のそれを思わせる。近代的な内装や備品をすべてそなえた、なかなかの資産とあってよい。ここにも、たっぷりふくらんだ義父の財布が見え隠れする。木材の卸商人である義父は、人あたりがよく、なにごとにつけ理想に燃えるタイプだが、同時に現実的な人間でもあり、市の委員会など、ありとあらゆる会議のメンバーをつとめている。一八五九年、まだほんの少年だったこの男が二人の兄弟とともに義勇兵としてオーストリアと戦ったことは、その理想家肌の証である。兄弟の一人は戦死、もう一人は捕虜となり、彼自身も負傷した。今なお**嬰鑠**として**いる**。夫人はとて**も華奢で、身だしなみのよい老婦人**。アウグストの妻マリアは、この夫人から**上品な顔だちを受け継いでいる**。

(4) 青木周蔵子爵・駐徳国公使・外務次官・外相令嬢ハナ

○午後、青木子爵のもとへ——子爵の令嬢ハナさんとハッツフェルト伯爵の婚約に、祝意を表するためである。青木ハナ嬢は、感じのよい、すこぶる美しい娘さんで、完全にヨーロッパ式の教育をうけている。かの女は、**家庭では会話にドイツ語しか用いられていないにもかかわらず、遺憾ながら、あまりにも英語を偏愛しすぎている**。横浜のハーンの子供たちと全く同じように、かの女は自分にいったものだ。「ドイツ語よりも、英語をしゃべる方がずっと楽で、たやすい」と。

(5) 足立 寛博士(在浜松開業医) 夫人

○朝、ドクトル足立のもとへ。八十二歳の祖父から赤ん坊にいたるまでの全家族が、暗着姿で自分を迎えてくれた。全く、日本の

37・11・12条

41・1・16条

よい家庭の一挙一動くらい、見ていて感じのよいものはない。足立にはきれいな若い妻君が<sup>9</sup>あって、浜松で開業してまだ三ヵ月しか  
ならないが、もう立派にやっている。

25・8・28条

(6) アディケス フランクフルト市長

○それから、「レーマー」にて市の主催する盛大なレセプション。私は市長やお歴々といっしょに「上席」のテーブルに座った。市長  
のアディケスはとてもうまい式辞を述べた。上品で教養のある美男子だ。おそらく、現在ドイツで最も傑出した市長だろう。フラン  
クフルトの市域拡大と新市街の整備にみごとな手腕を発揮している。

41・8・4条

(7) アヌーチン

○ロシア人ながら原始ゲルマン人を彷彿とさせるブロードのアヌーチンは、シベリア総督の息子。英語はまるでだめだが、それに引  
きかえドイツ語はうまい。ドイツ人の仲間につきり溶け込んで、さっそくスカートを習う。

17・8・16条

(8) アプトン嬢

○アプトン嬢の方は、ニューイングランドの学校にでもいそうな、好感のもてる上品なタイプである。

41・3・4条

(9) 有栖川宮(威仁親王)、(10) 同妃(慰子)、(11) 同女王(実枝子)

○東宮のもとで午餐。側近の宮内官以外には、未来の参謀総長と目せられている田村將軍のみ。食後、有栖川宮が来られた。宮は大  
変ご機嫌がよい様子。だが、妃はご気分があまりよくない由。

34・9・16条

○宮は昨年、渡米してセントルイスの博覧会を訪問されることになっていたが、当時その健康に不安な点のあることを自分が報告し  
たために、渡米が取り止めになってしまったので、それからしばらくのあいだ、宮夫妻は自分をひどく恨んでおられた。しかし今で  
は、宮もすっかり気分を直された—というのは、ヨーロッパ旅行の方がはるかに興味があるし、それに健康も今ではじゅうぶんに回

復されたからである。妃は上機嫌で、自分が宮のためにいろいろと力を尽くしたことに對して感謝された。 38・3・25条

○正午、イギリス公使館で、再び有栖川宮に。妃は笑いながら握手をされて、「近ごろは毎日、お会いしますね」といわれた。一流の会合で、美しい上流婦人ばかり。日本の女性は、妃と御付きの女官の二人だけで、これまた有名な美人である。それにしても婦人連の平静で、いうまでもなく危なげない、上品な態度が目につく。 38・3・29条

○今朝ゼノアに入港したとき、有栖川宮夫妻の一行が乗っておられるロイド汽船のプロイセン号を見つけたので、訪ねて行った。宮夫妻は、こんなところで自分の姿をご覧になって、とても驚かれたが、お二人ともすこぶる元気な様子で、今度の旅行、ことにまたドイツ滞留には非常に満足しておられた。すぐさま、自分を船室に導かれて、いろいろと話をされた。特に妃は、すこぶる熱心にお話になった。ドイツ皇帝は、妃に立派な腕環をお贈りになった由。妃はまた「有難う」とか「さようなら」など二、三のドイツ語も覚えられたとか。気懸りなのは、宮が真夏の折から、このような平凡な船で帰国の途に就かれることで、たださえ胸の丈夫でない宮が、好ましくない暑さのため、健康を害せられるようなことのないよう、自分はただお祈りするばかりである。 38・7・19条

○患者の妹君で、今年一七歳になる有栖川宮家の皇女にも心ひかれた。ちなみに私は皇女が子供の時分から存じ上げている。彼女は日本の上流階級によく見かける可憐な女性の典型だ。魅力的で、子供のように無邪気で、人の心をとらえて離さぬ自然体。どこかの町娘としか思えないほどの、謙虚でひかえ目な態度。 41・3・9条

(12) アルコ伯爵 (在日德国大使館) (259)(190) ○ホテルの気おけない食事仲間たち。ペーターゼン少尉とエンジニアのトラウム。二人とも、とても上品なハンブルク人である。

さらに、大使館の若いアルコ伯爵。大使館付き参事官モンゲラス伯爵もよく顔を出す。 41・3・25条

(13) アルマン駐日法国公使

○フランス公使館の人々を観察するのは面白かった。カンボン一等書記官(ロンドン駐在大使の令息)は熱心に十字を切り、その場  
その場では、真に崇敬の念を面に表わして、他の男子たち——婦人連はみな、ひざまずいていた——よりも深く頭を垂れていたのに、  
公使はといえ、<sup>(13)</sup>宗教上の礼式を頭から軽蔑している風を、露骨に示していた。

37・12・19条

(14) アレキシエフ極東総督

○今やアレキシエフは、どんな気持ちでいることか——日本を侮<sup>(14)</sup>って豪語した報いはてきめんだ。

37・2・10条

○旅順司令長官スタルク提督罷免。後任者はロシア随一の海将マカロフである。部下の連中はかれを、ネルソン以後に比肩するもの  
なき海の天才と称している。かれは、ウラジオストックや旅順やバイカル湖で、ロシアのため幾多貴重な役目を果たした砕氷船の発  
明者である。今からおよそ六年前、かれは二年間にわたってロシア東洋艦隊を指揮していた。当時、自分はたびたび、しかも快くか  
れと往き来していた。かれは堂々たる偉丈夫で感じのよい顔立ちに、長いひげ、<sup>(17)</sup>大体においてアレキシエフと同一の型である——因に  
この型は、バルト海沿岸地方のドイツ人によく見るもので、わが国のティルピッツ提督もこの型に属する。<sup>(178)</sup>

37・2・19条

(15) アントン、カルル親王

○昼の一時、ホーエンツォルレルン家のカルル・アントン親王を迎えて、公使館で盛大な午餐会。親王は典型的なゲルマン貴族風の  
人である——背がすらりと高く、<sup>(18)</sup>淡い金髪、やや小さい青い眼、はっきりはしているが普通の目鼻立ち、<sup>(18)</sup>金色のひげ。態度は非の打ち  
どころなく、型どおりの愛想よい微笑をたたえている。

37・9・26条

○戦地から帰られたホーエンツォルレルン家のカルル・アントン親王のため、東京市が催した盛大な舞踊と芸者の宴に招かれた。親  
王のそばには小村外相が席を占め、そのわきが自分だった。だが遺憾ながら、親王はほとんど芸者にはかり関心を示され、小村外相  
や東京市参事会員連とは少しも口をきかれなかった。(中略)個人としては、自分は何も親王に関して苦情をいう筋はないのだ。親王



は、終始すこぶる愛想よく振る舞っておられた。だから自分は、親王のあの自然的な愛想のよさをもってすれば、小村外相に対しても適当な調子で応待されることは、容易であったはずだと思う。それなのに、なぜそうされなかった？。

(16) イスヴォルスキー駐日俄国公使夫人

○夜、アルコ伯のもとでイスヴォルスキー夫妻に会う。かれははっきりとした民族政治家で、広義のゲルマン民族のみに支配者たるの資格があり、洋々たる前途があると称している。トル伯爵家の出であるかれの夫人は、いかにも純ゲルマン型の元氣な人で、二人の子供はお母さんに生き写しだ。

36・2・1条

(17) 一条親王妃

○高木男爵(博士)の夜会に招待される。細川家の出である一条親王妃をテーブルにご案内し、すてきな会話を楽しんだ。彼女は一四歳のころ、葉山で私の隣に住んでいたが、その時分はおてんば娘だった。(ご主人が大使館付き武官をつとめた)三年間パリに滞在して、パリとヨーロッパそのものに心酔している。四人の子の母となった今でも、陽気でやんちゃな人柄は昔と変わらず、日本女性に課せられた狭苦しい社会的制約を、ことのほかわずらわしいと感じている。

41・5・18条

(18) 伊藤参議・伯爵・侯爵・公爵・首相(博文)

○一昨日、有栖川宮邸で東宮成婚に関して、またもや会議。その席上、伊藤の大胆な放言には自分も驚かされた。半ば有栖川宮の方を向いて、伊藤のいわく「皇太子に生まれるのは、全く不運なことだ。生まれるが早い<sup>ニキケツト</sup>か、到るところで礼式の鎖にしばられ、大きくなれば、側近者の吹く笛に踊らされねばならない」と。そういうながら伊藤は、操り人形を糸で踊らせるような身振りを見せて見せたのである。

33・5・9条

○夜、自分のため伊藤侯の送別会。あれほどいそがしい身の政治家が、自分のためわざわざ一夕をさいてくれたことは、非常な光栄

であり、また侯の友情を示すものと思う。うちくつろいで快談。侯は、ほがらかでくつろがない日頃の調子で、冒険的な生涯のさまざまなでき事を物語った。航海術を学ぶため、井上と一緒にイギリスの船にもぐりこんだことや、それからそこで単に平水夫として取り扱われたことを話してくれた。朝、二人がハンモックの中で寝ぼけていると、運転士か水夫がやって来て、綱の切れ端で手荒く背中をどやしつけるのである。「小僧、起きろ——小僧、起きろ——」と。そういつて侯は、当時の思い出にうち笑いながら、そのぶこつな男の動作をなんともいえぬおかしさでまねて見せるのであった。疑いもなく東アジアの歴史に、他のどんな人間よりも大きな影響を与える天職を授かった人物が、かつて——三十六年前——イギリスの荒くれ水夫にぶん殴られたとは、誰が想像しよう！

33・8・15条

○今朝、伊藤侯の招きに応じて大磯へ。午後おそくまで居った。侯は相変わらず丈夫そうだが、さすがに以前と比べてふけてきた。今度、侯は欧米へ出かけようというのだ。

34・9・8条

○『やまと新聞』が、ロシア人のニコラス僧正をロシアのスパイと称する記事を掲げ、その記事中に、スパイの疑いある他の外人をも列挙したが、それに自分の名前も載っていたのである。(中略)伊藤は、橋本からこの一件を聞いたとき、大笑いしたそうだ。そして、そんな馬鹿げたことを気にする必要はない、もっとも、希望なら、適当な機会に、自分の日本に対する功績を公表してもよいとのことだった。

37・3・6条

○伊藤侯は、平素に比べて無口だった。(中略)ところで、いつもながら驚くのは、六十三歳の高齢にもかかわらず、侯の容姿の若々しいことで、ことに、侯が酒神と女神の熱烈な信者であり、しかも朝から晩まで、葉巻を口から離さないことを知っている者にとつては、なおさらそうだ。おそらく大磯の良い空気が、侯の若々しさにあずかって力があるのだろう。

37・11・19条

○午後、伊藤侯爵のもと。侯は、いささか気分が勝れないのである。飲酒と喫煙を少し控えて以来、侯は確かに、一段と健康に見える。毎度のことながら驚かざるを得ないのは、侯があんな生活振りできて、かくしゃくたることだ。

38・1・25条

○帰宅—燕尾服を脱ぎ、フロックコートを着る—芝離宮へ。ここで、天皇の名代として、山階宮が別離の宴を催して下さった。宮内省役員一同、他に橋本、岡の両氏列席。伊藤侯は少し遅刻したが、上機嫌で現われて「遅れて済まなかったが、実は外相と大変重要な相談があったので」と、自分にわびた。外交上に重大事が起こっていることは明白だった。自分は内心で、講和問題だろうと思つた。とにかく、なにか慶ばしいことに違いないのは、侯の機嫌の良いことですぐわかった。山階宮もまた（宮は、ドイツ海軍のもつとで二カ年間生活されたので、非常にドイツ語がうまい）<sup>303</sup>すこぶるご機嫌がよく、大いに歓談された。 38・6・9条

○それにしても伊藤公は間違いなく老けた<sup>18</sup>と思う。特に言葉が聞き取りにくい。齒が一本もない人のように、発音が不明瞭だ。波乱万丈の生涯を送り、限られた人間にしか達成できぬような<sup>かくかく</sup>赫々たる成果を収めてきた伊藤公も、今年で六四歳。 41・3・26条

(19) 伊東提督 (祐亨) ↓ (188) 東郷提督・海軍大将 (平八郎)

○夜、ドイツ公使がドイツ皇太子成婚祝賀の盛大な晩餐会を催した。(中略)妻の向い側には、明治二十七年に黄海の海戦で大勝した、伊東提督が席を占めていた。妻は次のように述べたが、当たっている。「伊東さんは愛想のよい物腰とカワイイ表情の、優しい殿方ですが、それでいてこの人は、争ったり怒ったりしたときは、こわいだろうという感じをすぐうけます。」と。 38・6・5条

(20) 井上伯爵・侯爵・大蔵大輔・外務卿 (馨)

○今日、井上外務卿のもとへ往診を求められた。卿はかなり前から、すなわち数カ月前から、記憶力衰弱症にかかり、そのため、日頃は非常に元気な人だったが、まるで憂鬱症になってしまったのだ。井上卿は大いに才能があり、教養があつて、新日本の有為の人材の一人である。卿は、他の大部分の日本人に比べて、融通性にとみ、従つて外交官としてはいっそう適任である。卿は特異な経歴の持ち主である。長州人ながら、外人と多く交わり、英語を学ぶ目的を達した最初の日本人の一人である。かなり久しい間、イギリスで日本の代表者だった。(中略)卿は生氣に満ちた、理智的な面差しの小柄な人物で、ヨーロッパの文化や生活様式を完全に同化した日本人である。なお特筆すべきは、卿がその十七歳になる令嬢に、完全にヨーロッパ式の教育を受けさせていることである。

井上卿はその体に、十八年前にうけた三カ所の、実にすばらしく大きい傷跡がある。一つは背部に、その二は後頭部に、いま一つは顔面にある。よくも生きておられたものだと、驚嘆せざるを得ない。

14・5・19条

○井上伯は、七十歳の老齡だが、まだ白髪が一本もなく、多端な生涯を送って来たにもかかわらず、あのように若々しく見えるのは、いつもながら驚かされる。

37・12・8条

○午後は、井上勝之助が内田山にある父親の庭園で催すガーデンパーティーへ。井上老は相変わらず若い。今年七十四歳だが、白髪の一本もない。おまけに、まだ七歳の子供がいる。

41・5・8条

○井上侯爵が死んだ。(井上侯の逝去は一九一五年で、これは誤報)元老院の「長老」たちのうちで、天命にみまわれた最初の人となった。侯爵とは四カ月前に東京で長いこと話し込んだばかりだった。七四歳を迎え、昔に比べれば体がしぼんでいたが、まだ矍鑠としており、一本も白髪がなかった。

41・10・3条

(21) 井上勝之助駐徳国大使・外相夫人(末子)

○午後は井上大使夫人を訪ねた。四十路には届いているのに、まだ娘のようだ。活発な女性であるところは昔と変わっていない。

39・11・29条

○夜は井上日本大使のもとへ。私のために、当地に滞在している日本人医師を全員呼んでおいてくれた。夫人は四十代もかなりいっているだろうに、相変わらず娘のようにしか見えない。人を楽しませる話術に長けている。

39・12・8条

(22) 井上子爵・文相(毅)未亡人(鶴子)

○午後、上野精養軒で、十年前に死去した文相井上子爵のため伊藤侯爵が催した、盛大な追悼会があった。ここでも再び、唯一の西洋人だった。会衆は、日本の精神文化界の粹を集めていた。なにしろ故人が、偉大な学者・歴史研究家・文人で、日本の精神生活に多大の貢献をした人物であったからである。(中略) 来会者の数は約二百名で、他に四名の女性、すなわち日本で最も美しい婦人の一

人である井上子爵未亡人が三人の令嬢と共に列席していた。

(23) イリス、(24) 同夫人

○イリス夫妻は、日本における自分の最初の知己にあたる。夫妻は始終、愛想のよい、親切な人たちだった。イリスの商売は、非常な発展をとげた。イリス夫人は、相変わらず昔のまま、穏やかな、愛嬌のある真の淑女だ。

(25) イルゼ (ネット—令嬢)

○ネット—には、六歳のイルゼと五歳のエリカという二人のかわいい娘がいる。上の子は父親に、下の子は母親に瓜ふたつ。

39・5・15条

○ネット—の葬儀。(中略)列席者は次の通り。(中略)長女イルゼ(九歳)は父親似だが、とても神経質。たくましく健康そうなエリカ(七歳)。

42・2・7条

(26) イレーネ (ラインハルト令嬢)

○ラインハルト夫人のエミリーも変わりはない。二人の子供たちもすくすくと育っている。上の女子ヒルデは、同じ名前の伯母とびっくりするほどよく似ているが、伯母の小さかったころほど明朗快活ではない。下のイレーネはかわいらしい顔つきの、はつらつとした子だ。

43・6・20条

(27) 岩倉公爵・右大臣(具視)、(28) 同令息

○それは明治十六年の初めのことだったが、ある晩、ドイツ公使館で一人の貴公子然たる青年にあった。あとでわかったが、それは岩倉公の令息だった。(中略)わたしは公に、最後の時間が迫ったことを告げた。すると公は、井上参議を呼び寄せるように命じた。公は参議に声がかれているから、側近くひざまずくように促した。その間わたしは反対側に、公から数歩はなれてうづくまり、いつ

でも注射のできる用意をしていた。そして終始、寸刻を死と争いながら、公は信頼する参議にその遺言を一語一語、耳うちし、こうして、疑いもなく維新日本の最も重要な人物の一人であった岩倉公は死んだ。鋭くて線の強いその顔立ちにもはっきり現われていた通り、公の全身はただこれ鉄の意志であった。

(29) 岩崎男爵(久弥)

○トーマス・グローヴァーのもとで午餐。(中略)食卓の臨席は、銀行家で鉱山、ドック等の持ち主である若い岩崎男爵だった。男爵の父も、自分はよく知っており、大変尊敬していた。

37・10・29条

(30) ウォッシュバーン三兄弟

○みごとな森を通り、クラークスまで戻る。ここは現在、ワウオナ・ホテルあるいはビッグ・ツリー・ステーションと呼ばれている。反時代的ともいえる蛮勇を發揮して、この人里離れた荒野にホテルを建てた前のオーナー、H・クラークは亡くなり、今はウォッシュバーン三兄弟が経営している。いずれも背が高く、押し出しのいい、見栄えのする男たちだ。長い髪を生やし、鼻が突き出ている。この鼻はアメリカでよくお目にかかるところをみると、なにか気候と関係がありそうだ。三人はヨセミテ・アンド・ターンバイク・カンパニーのオーナーであり、マディーラとヨセミテの間に定期的に馬車を走らせ、郵便業務を行っている。

(31) ウタ(ベルツ令嬢)

○ウタは、生後四カ月にしては、上できの子で、焦茶色の大きい眼をしている。髪はわずかに濃いブロンド。

26・8・21条

○トクの流行性感冒がすんだかと思うと、今度は、一週間このかた、かわいい盛りのウタが同じ病気で、重い肺炎を併発し、絶えず生死の境をさまよっている。

26・12・24条

○ちょうどクリスマス・イーブの、クリスマス・ツリーに火をとます頃、ウタは半ば昏睡の状態からさめて、少し遊んだが、それこ

そ、われわれ両親にとって、何よりのクリスマス・プレゼントだった。しかし夜になって再び、抑えようのない、あのいやな乾いたせきがでてきた。その苦しそうな響きは、人の神経を全くいら立たせる。

26・12・25条

○今、ウタは、われわれすべての喜びを一身に集めて、元気で快活なかわいい子供だ！

28・12・24条

○一昨日の朝、食事の時、まだウタは、生まれつきの愛嬌を一杯にふりまいて、わたしの側にすわっていました。お昼に、わたしが大学から帰ると、ハナは、子供が風邪をひいたようだと申しました。夜になって、重い腹膜炎を起こしたのですが、この病気はたいていは命取りになるのが常です。そして、今から数時間前に、ウタの明るく澄んだ眼は閉じられてしまいました——永遠に。(中略)

このような花盛りの美しい子供を、急に失うということは、恐ろしい打撃です。何しろ、誰ともかけ離れて、ウタは、今までに見た子供の中でも、全く特別な存在でした。あの子は母親から、その気質の内面的な快活さと、同時にまた——子供ながらも、ある程度は認められるのですが——その堅固な性格と不屈の意志を受け継いでいました。特殊の魅力をもつ、あの子のもとも大きい利口な眼には、誰もが驚嘆していました。(中略) 明後日、わたしたちはかわいい子供を葬るのです。それは、それはたまらないことです！どんなに

あの子は、わたしを慕っていたことか。わたしが帰宅する時、馬車か人力車の響きを聞き、召使が日本の風習で「だんなさまのお帰り」と叫びますと、あの子はどんな遊びをしても、そのままにやめ、ちょうど手にしていたものがなんであろうと、すべてをほり投げ、ちょこちょこ小さな足で大急ぎに急ぎ、両手を拡げてわたしの方へかけよって、わたしの脚に抱きつき、わたしが抱いて高く挙げてやるまでは、小さな頭をわたしに擦りつけるのです。高く挙げてやると、あの子は特有の笑い声をあげるので、その声は今でもなお、耳に残っており、わたしにとっては何よりも甘美な音楽でした。(中略) 各方面から新しい弔慰が、次から次へと寄せられてきます。一英人は、自身とその家族のことを、手紙でこう述べています。「あなたのため、わたしたちが断腸の思いをしていることをご推察下さい。ウタちゃんは『東京中で一番かわいい子』でした。娘のヒデは、あの恐ろしい知らせがあったからというものは、泣き止みません。」

29・2・28条

○ハナは氣をとりなおしました。「もう、済んでしまった。あの子を、天国へお返ししたのだ。つらい——こと——だった。でも——もう——済んでしまった」と。この瞬間から、ハナはすっかり平静になり、子供に白絹の死装束を着せ、あのかわいいおしゃまさんが、いつもしてほしがっていたように髪を直してやり、子供の髪を一房切りとり、その代わりに自身のを一房添えて、なきがらを棺に納めました。

29・3・1条

(32) ウラッハ(フォン) カール公爵・交易地理協会会長夫人

○ウラッハ公爵夫妻のところで昼食をご馳走になる。(中略)私の知る限り、最も魅力的な女性の一人である夫人は、眼科医をしているバイエルンのテオドル公爵の娘である。父親から学問への強い関心を受け継ぐとともに、六人の子供のすばらしい母親でもある。

44・3・15条

(33) ウンガー、アルフレート園芸技師

○ウンガーは堂々たる体軀のヴェストファーレン人の典型だが、大方の同郷人よりも活発で血の氣が多い。

41・10・20条

(34) ヴァイペルト、ハナ

○亡くなった友人の娘、ハナ・ヴァイペルトを訪問。二〇歳になる快活なお嬢さんである。

43・7・19条

(35) ヴァナーTh・G、(36) 同夫人

○ヴァナー氏の都合がつかなかったので、夫人が馬車で駅まで出迎えてくれた。夫妻は私とエルヴィン、それにフラーズ教授夫妻を、人類学会の期間中、家に泊まるようにと招待してくれた。喜んで好意に甘えたが、ほんとうに手厚いもてなしを受けた。快適に滞在できるようにと、<sup>(35)</sup><sup>(36)</sup>なにくれとなく氣遣ってくれる魅力的な人たちである。

43・7・19条

(37) ヴァルダイアー



○ランケとヴァルダイアーは年齢のわりにまだまだ達者に見える。

41・8・4条

(38) ヴァルデンブルク博士(在ベルリン)

○ヴァルデンブルク博士(在ベルリン)は風変わりな性格の持ち主。端正な顔だちのシェファルディムだが、うるさいほど押しが強い反面、ひっこみ思案のところもある。ほんとうにおもしろい考えを持っているにもかかわらず、その性格が災いして、みんなから避けられたり、反感を持たれたりしており、気の毒な人物だ。

43・7・19条

(39) ヴァレー、ルートヴィヒ伯爵・駐日德国公使

○夜、ドイツ東亜協会で新任公使アルコ・ヴァレー伯と知り合いになる。伯はなみ外れて愛嬌のよい人である。

34・9・7条

(40) ヴイルトゥ博士(在ミュンヘン)

○エルヴィンと連れ立ってミュンヘン郊外のマリア・アインジールンにヴイルトゥ博士を訪ねた。髪は白くなっているが、相変わらず活力にあふれ、着想ゆたかな人物だ。

42・11・11条

(41) ヴイルヘルム二世(ヴュルテンベルク国王)、(42) 同王妃(シャルロッテ)

○ヴィルヘルム宮殿にて国王主催の晩餐会。陛下ご夫妻は冬の間、四度か五度、勅任官待遇の者を招いて晩餐会を催される。今日、私は二五名ほどの人々とともにお招きにあずかった。一つのテーブルでそれぞれ六、七人ずつもてなしを受ける。私は晩餐は王妃のテーブルに、食後のビールの夕べでは王のテーブルについた。陛下は抜群の社交じょうずで、つまらぬ階級章をつけたそこの役人よりもはるかに自然体でおられる。こちらは思わず話に引き込まれて、たちまちくつろいだ気分になる。王妃はふくよかな体つきで、お見受けしたところ儀礼的な作法にはこだわらぬ、のびのびとした性格。どこか男性的なところさえうかがわれる。

42・3・16条

○六日にヴィルヘルム宮殿で催された国王の宴はとてつくろいだものだった。王はまったく自然にふるまわれた。会食のあとのビールの席で、私は王の隣に座った。王はたいへんなもてなしじょうずである。居並ぶ二〇名の出席者それぞれと順番に、その人物に身近な話題で話をされるといふのは、並たいていのことではない。聞くところによれば、かつて王は、煉獄のあとにもすぐまた盛大な歓迎パーティーがある、と冗談を言っておられたとのこと。昔、こうした席ではあまり社交的でなかった王妃も、今ではそつのない対応をなさっている。

43・4・15条

(43) ヴィンチ伯爵・駐日意大利国公使

○夜、アルコ伯爵のもとで、新任イタリア公使ヴィンチ伯爵のため、盛大な宴会があった。公使はすこぶる上品な紳士で、美しい顔立ちに濃いひげを蓄えている。確かに、ドイツ滞在がお気に召したらしい。夢中で、ミュンヘン・ビールの話をしていた。

37・11・16条

(44) ヴェルナー——(ベルツ舎弟カール令息)

○ヴェルナー——は頭のよい美少年である。背が高く、髪はプロンド、見るからにゲルマン人の顔だちだ。

43・4・10条

○カールの息子ヴェルナー——は気持ち悪いほどの早さで成長して、一六歳と九カ月にして身長が一八四センチもある。そのヴェルナー——が、かわいそうに、肺の左上葉に結核性の浸潤が見つかった。これからダヴォスへ行かなければならない。それでも本人は、まるで結核とは思えぬほど、元氣いっぱいではちきれんばかりだ。うまくなおってくれるといいのだが。母方の伯父が若くして急性結核で死んでいることが気にかかる。

2・4・25条

(45) ヴォラー大尉夫人

○郊外のキアラノーにある家に着くと、堂々とした感じのいい女性があらわれ、私を見るとすすり泣き、悲しみのあまり両手をもみ

ながら語りはじめた。

42・10・25条

(46) エヴァンス提督

○今日、アルコ伯が横浜のクラブで、アメリカのエヴァンス提督のためお茶の会を催した。提督は見たところ剣士のように手ごわそうな人物で、ひげのないつるつるの顔、広くてがっしりとした顎、指でつまんだような口の持主だが、それでいて愛想がよい。

35・5・2条

(47) エカテリーナ二世

○ピョートル大帝の絵が少ないのが目につく。もちろんエカテリーナ二世の肖像は数え切れないほどだ。将校の服装をして馬に跨った図もある。絵で見る限り、明らかにやぶにらみの気がある。それを除けば、太る前は美人だったに違いない。

41・7・8条

(48) エドモントン卿夫人

○正午、英国公使のもと。公使がエドモントン卿夫妻のため午餐会を催したのだ。自分は夫人の隣席だった。夫人は非常に優れた型の英国婦人で、美しく、品があり、静かで、気取らない。動作や言語には、洗練された社交においてのみ得られる落着きがある。

37・5・26条

(49) エーベルハルト (ベルツ舎弟ロベルト令息、愛称エボ) → (103) グレーテ (ベルツ舎弟カール令嬢、愛称マルグレーテ)

↓ (189) トク、エルヴィン (ベルツ令息) → (275) マリア (ベルツ舎弟ロベルト令室) → (229) ヒルデ (ベルツ舎弟

ロベルト令嬢、マイアー・マックス令室)

○マリアも、エボも、ヒルデも、そろって元氣。だが、ロベルトはこのところ体調がよくない。

39・10・11条

○今日はエーベルハルトの誕生日でもある。一二歳の好青年。以前のひ弱な印象も影をひそめ、今はすっかり健康そうに見える。

43・12・26条

○エーベルハルトとエルヴィン、それにグレーテは意気軒昂である。

41・8・23条

(50) エリカ(ネット―令嬢) ↓ (25) イルゼ(ネット―令嬢)

(51) エリカ(ホフマン中尉令嬢)

○ホフマン中尉夫妻と二人の子供たち(利口だが、お転婆な四歳のエルビ、愛らしい一歳半のエリカ)

41・2・29条

(52) エリーゼ(ベルツ令妹) ↓ (330) ロベルト(ベルツ舎弟)

○ここでの滞在は、特にエリーゼにとっても効果があったようだ。山を下りた時の健康そうな様子は、久しく見たことがないほどだった。

40・6条

○エリーゼは二週間のノイエナール滞在が効を奏し、とても若返って見える。

41・8・23条

○エルヴィン・レンツがニューヨークに発った。ヨーロッパでの休暇はたいへんよかったようだ。故郷と家族の心地よさが身にしみたとみえて、後ろ髪を引かれる思いで帰っていった。実に久しぶりに帰郷した息子に、母親はすっかり若返った。

42・9・14条

○エリーゼはまだ少し顔色が悪いが、衰弱しているようには見えず、楽しそうだった。

44・1・16条

○ほんとうに元気を回復した。

2・2・27条

(53) エルンストⅡヘーシユ女史(フォン)、L、博士(在ゴードスベルク)

○エルンストⅡヘーシユ女史(博士)から自作の短編小説集を贈られる。どの作品からも、彼女の外観や人となりから受ける峻厳な印象が息づかいのように伝わってくる。

40・6条

(54) エーレンヴァール神経科医(在アールヴァイラー)

○アールヴァイラーにあるエーレンヴァールの神経科病院を見学。エーレンヴァールは白い髭を長くのばした好感のもてる美男子だ。

(55) 大隈伯爵・外相(重信)

○大隈は新日本の最も重要な人物の一人で、日本の財政を建て直すという困難な職務を担っているが、それはまるで孔だらけのおけに水をくみ入れるようなものだ。大隈はできるだけのことをやったが、この任務はあまりにも大きい。天性快活な人物だが、この二、三年の間に急に老けてしまって、今では少しせまが多い。四十歳代の前半という若さであり、大柄で、全然ひげがなく、ずるような眼をしているが、その態度には好感がもてる。

(56) 大倉(喜八郎)夫人

○高島夫人は一二歳になる息子のほかに四人の小さな子供があるが、<sup>(56)</sup>相変わらず少女のように見える。義理の姉妹にあたる大倉夫人も愛くるしい。

41・4・19条

(57) 大谷法主(光尊)

○病人は、いわゆる「日本の仏教徒の法王」として、宗教上の階級制度から見て非常に高い地位に置かれているだけではなく、別にまた、京都一の美男子であるとの評判をとっている。事実また、かれとその家族はいかなる点からみても、全くずば抜けて気品のあつる人たちである。

33・2・20条

(58) 大谷法主(光尊)令嬢

○まず西本願寺の大谷法主、その令息と美しい令嬢の治療。それから西本願寺の立派な寺院と、その門外不出の絵画の参観。

25・9・1条

(59) 大谷伯爵(光瑞)、(60) 同夫人

○午後三時には、ドクトル齋藤が自分のため、門徒宗の高僧である西本願寺の大谷伯爵のもとを訪問する取極めをしておいてくれた。

41・8・23条

(中略) 高僧はまだ青年で「法主」の位は世襲である(60) 日本人にしては堂々たる風采の人物であり、すこぶる大柄で、頑丈な体格をし、顔立ちも精力的で、あたかもナポレオンを想わせるものがあつた。伯は皇室と極めて近しい親類の関係にある。すなわち伯の夫人は、東宮妃とは姉妹であり、従つて伯自身は、次代の天皇の義兄弟にあたるわけだ。(中略) 東宮妃の姉妹にあたる大谷伯爵夫人は、かねがね評判の美人ときいていたが、美しい上品な婦人で、話振りにそつがない。

38・4・26条

(61) 大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥(巖) 夫人

○今日、国民の中で第一流の女性の一人である、陸軍卿大山大将夫人の葬儀が行われた。産褥熱におかされて、二日前に永眠したとき、夫人は二十三歳だった。夫人は外人にも、同胞の親しい人たちにも、等しく好感をもたれていたが、後者の人たちには、夫人のやることに良い点を認めるのが全く困難であつたことは確かだ！宴会などのおり、あのきれいな顔、無邪気でいたずらっぽい子供のよ<sup>うな</sup>笑いが、自分の心を楽しませてくれたことも幾度だったか！まだ元氣あふれる夫人を最後にみたのは天皇誕生日のことだったのに、一週間前、夫人の病床に呼ばれた時は、もう意識もなく、青白くやつれ果てていた。

15・8・25条

(62) 岡玄卿男爵・侍医

○岡侍医は相変わらず落ち着いたもの静かな人物。潑刺として若い。

41・3・6条

(63) 小鹿島夫人

○日本の一女性の出現により、すっかり魅了されたが、それは小鹿島夫人で、自分が今までに出会つた最も魅力ある女性の一人だ。夫人は達者に英語、フランス語、オランダ語をしゃべり、あえて日本のハカマを洋装に利用する勇氣があつた。

22・3・2条

(64) 岡部子爵・元岸和田藩主(長職)、(65) 同令母

○午後、東京へ。名古屋までの関西線では、あまり軍隊輸送と接触することなく、まだ急行一列車が通っている。同車は岡部子爵と、まだ元氣なその母堂のみであつた。二人は、昨年自分が、重体だった子爵の令嬢を治療したことを、いまだにひどく感謝していた。

岡部子爵は、大和に近い国の旧大名である。子爵は、およそ大名の中で最も堂々とした、男性的外見の人物である。子爵の顔は、ナポレオンを想わせるが、しかしナポレオンとは違ってほどよくつり合っており、普通日本では力士にのみ見受けるような胴体の上にある。車中岡部子爵は、大名の一行が江戸へ往来した昔の国道である並木道を、自分に指さしていた「あの街道を、まだ若い領主だったころ、両刀を差した三百人の侍を従え、槍持ちを先頭にして、通行したことがあります、一行が近づくと、旅人も住民も、みな土下座して、路上に突いた両手に額を擦りつけねばならなかったのです。こうして今、他の誰とも同じように、汽車の中からこの辺をながめると、当時のことが、まるで奇妙な夢のようです」と。「ほんとうに夢ですよ」と、母堂もつぶやいたが、この老婦人にとっては、このような変遷がいつそう奇異に感じられるに相違なかった。

(66) オズーフ大僧正

○日本人は、この人のことを「きれいな坊さん」といっており、靈化した旧約聖書の予言者のような顔をした人。 36・2・1条

(67) 落合駐俄日本国代理公使(謙太郎)

○日本の代理公使、落合氏が来訪。ご用があればなんなりとお申しつけください、と言ってくれた。落合はもう何年もロシアにいますが、ひどくやつれたように見える。 41・7・8条

(68) オッペンハイマー嬢(在フランクフルト)

○チューリヒのマルティンの弟子にあたるフランクフルトのオッペンハイマー嬢。どう見てもユダヤ人ではなくアングロサクソンとしか思えない、このエレガントで繊細な女性は、とてもすぐれた堂々たる講演を行った。 40・6条

(69) オルコット神秘仏教徒

○オルコット師は品のある立派な老人で、堂々たる白いひげと髪を持ち、洗練された社交的の外形を備えている。師の話し振りは落

ち着いていて、明瞭で、理性的である——がしかし、話がブラバッキ——女史のことに及ぶと、もういけない！そうになると、何もかもおしまいだ。

22・3・7条

(70) 桂伯爵・首相・将軍(太郎)

○宴後、桂首相と長話をしたが、首相の外見からは、一年この方の多難な時代の片鱗すら認められない。相変わらず健康ではち切れそうな丸顔の、親しみのある愉快な人物である。(中略)自分は桂首相に、今日の新聞に親独の記事が載って喜んでいることを語った。首相のいわく「もっと以前に、世論を一変させようと、あらゆる努力を払ったのだが、自分は新聞に対しては無力だ。それに、法律上では、どうしても干渉できない。事実、出版の自由は存在するのだから」と。これは、桂首相の本当の話だと思う。首相はあのおり、長年ドイツで暮し、流暢にドイツ語をしゃべるし、つねに個人的にはドイツに好意を示しているのだから。

37・9・27条

○首相桂伯爵は、結婚立会人として出席していた。祝宴の後で自分は、伯がその心労と劇務にもかかわらず、依然として元気で快活な様子であることは、同慶のいたりであり、また政党が伯を悩ますことのはなはだしいのは、遺憾にたえないと、伯に述べた。

37・12・15条

(71) 加藤時次郎博士・医師・社会運動家夫人

○私のかつての教え子である加藤時次郎博士が、チャーミングな夫人(私がこれまで会ったなかで最も美しい日本女性の一人)をともないシュトゥットガルト入り。八月十八日から二十四日まで当地で開催されるインターナショナル社会主義者会議に参加するのだ。

40・6条

(72) 金谷 日光ホテル所有者令息 → (302) 山口 箱根富士屋ホテル経営者(仙之助) 令嬢オコ

○金谷はロンドンに何年かいたことがある。小さくて華奢な体つきとめかし込んだチョビ髭から気取り屋の優男ふうに見えるが、どうして達者な柔術家であり、実にみごとな筋肉質の体をしている。

41・4・29条



(73) 樺山伯爵・海軍大将(資紀)

○海軍大将樺山伯爵は、強くて威のある薩摩男の好典型である。つねに伯爵とは、快く語り合う。

37・11・19条

(74) カプフ開業医令息、(75) 同令嬢(在シュレットシユタット)

○ここで三〇年開業医をしている幼な友だちのカプフを訪ねる。カプフには、<sup>(74)</sup>絵から抜け出したような美形の成人した三人の息子と、<sup>(75)</sup>美しい娘が二人いる。

40・8・22条

(76) カプルタラ印度大王、(77) 同妃

○今日、青山御所で、観菊の宴が催された。(中略) 変わり種の拝観者はインド・カプルタラの大王とその妃で、妃は風雅なインドの衣裳だった。妃の高貴な、全く古典的の顔立ちは、その服装により一層引き立っていた。<sup>(76)</sup>鼻、額は真直ぐな線を描き、口、顎の形は美しいが、線の強い顔面上部に比べると、いささか弱い。麗しい眼、非の打ちどころのない優れた容姿。顔の色が白いので、妃はヨロップ人の血を引いているのだとの風説が立ったほどだが、妃を賓客として迎えているマクドナルド夫人は、妃が生粋のインド婦人であることを、自分に断言した。<sup>(77)</sup>皮膚の色はヨーロッパの婦人よりも白かった、とまでは自分もいわないが、かの女らよりも一層青白くはあった。微かに灰色味を帯びた蠟のような感じだった。頬にも、いささかの赤味すらなかった。大王は、歴然たる褐色で、男性的の、しごく理智的な顔立ちで、すばらしい歯をしていたが、この点はその従者たちも同様だった。

36・11・13条

○昨晚、大王の招待で帝国ホテル。(中略) 大王は洋服だったが、<sup>(76)</sup>金糸入りの白いターバンをつけていた。インド人のことだから、いうまでもなくおびただしい宝石で、時計鎖には大きなトルコ石がついていた。妃は純洋装で、<sup>(77)</sup>黒髪にダイヤの星飾りをつけていた。

36・11・26条

(78) 上村提督(彦之丞) ↓ (188) 東郷提督・海軍大将(平八郎)

○昨晚、母ははじめてホーエンツォレルン通りのヘルマンの家を訪ねた。馬車に乗り込むのさえおぼつかない母の状態からすれば、これは大したことである。だがとても元気で、帰る道すがら、少しも疲れていないと言っていた。

○母上はここしばらく見なかったほど元氣潑刺としている。

○兄弟姉妹たちとエルヴィンが駅まで迎えに来てくれた。母上も含め、みな元氣。

○母上はこれまで通り顔色もよく、元氣だ。ロンドンからもよい知らせ。

○家からの手紙によれば、母上はすこぶる壮健に(八八回目の!)誕生日を迎えたとのこと。

○母上は今日で八九歳を終え、九十代を迎えた。肉体的に元氣だけでなく、特に精神的にも矍鑠としているのは、ほんとうに喜ばしい。

○母上はこの暑さがつらいと口癖のように言っているが、九〇という年齢にもかかわらず、庭を歩いたり、夕方、大好きな花に水をやったりと、元氣十分である。

○この暑さにも私は元氣だ。どうやら、乾ききった空気が性に合うようだ。母上もまわりが心配するほどは参っていない。

○母や家族の者はみんな元氣だった。 44・7・30条

○母上は元氣潑刺。九〇歳の誕生日の記念に、子供たちで彫刻家のヤンセン教授に依頼してブロンズ製の実物大のプロフィール像を製作してもらった。 45・1・19〜20条

○母はずっと元氣だ。義妹のマリーはロンドンへ帰って行った。 45・2・24条

○家族の者はみな変わりがなかった。近ごろ目に見えて弱っていた母上も元氣だ。 45・3・30条

45・7・6条

○母上の九一歳の誕生日。(中略) 母が心身ともに元気でこの日を祝うことができたのは、なんとという幸せだろう！ 2・2・28条

○駅まで出迎えてくれた妹たちは、みんな元気だ。母上も達者にしておられる。 2・4・16条

(80) カロリーネ (ベルツ令妹)

○カロリーネがとても元気になってデュルハイムから戻ってきた。 41・7・20条

○カロリーネは貧血で顔色もひどく悪いが、病人や気の毒な人々のためにたゆまず働いている。 45・5・31条

(81) 川村伯爵・海軍大将・枢密顧問官 (純義)

○川村伯爵と長話をする。伯は小柄の元気な人である―否、正しくは、大変元気な人であった、というべきだろう。今は六十八歳の老人で萎縮腎と喘息を患い、物を言うのが大儀であるから、たいていはあまりしゃべらないが、話が戦争のときだけは活気づく。そして最近、例の勝報の来たとき、非常に興奮してあまりしゃべりすぎたため、喘息の劇しい発作が起きたくらいである。伯のおおうべからざる功績は、日本海軍の大部分を編成したことである。(中略) 伯が日本海軍の称賛されるのを聴くときは、まるでラッパの響きに耳をそばだてる騎兵の老馬のようである。 37・2・12条

(82) 韓国皇帝 (光武) 王子

○ブンシュは、宮廷医としての本職の方では、あまりいそがしくない。(中略) 天然痘が流行し始めたとき、かれは王子に種痘をさせるよう勧めたが、旧くからの先入主にとらわれた母親が承知しなかった。そんなわけで、かわいそうに王子は、愛くるしい元気な子だそうだが、これで一生醜い外見になってしまうことだろう。 36・4・27条

(83) カーンハイム衛生顧問官夫人、(84) 同令嬢

○熱帯衛生学部門の長として夕食会を催す衛生顧問官カーンハイムのところへ顔を出す。片手間に医者をやっている金持ちのプレイ

ボーイだ。夫人と娘は、<sup>(85)</sup>どうみてもユダヤ人のようには見えない。

40・9・14条

(85) カンボン法国公使館一等書記官→(13) アルマン駐日法国公使

(86) ガレ外科医令母

○ラガツに到着。ホテル・ローゼンガルテンに入る。飾り気はないが、いいホテルだ。今年七五歳になる女主人は若々しく、足腰も  
しっかりしている。有名な外科医ガレの母親だ。

42・2・22条

(87) 北白川宮(能久王)、(88) 同王子(成久王)

○この数日のあいだ、北白川宮の病気の王子をたびたび見舞った。王子は一歳半の、まれに見る美しい<sup>(88)</sup>幼児である。母君は、有識の  
誉れ高い大名の一族伊達家の姫君である。天皇の叔父君にあたる当主の宮は、およそ四十歳で、ちょうど維新の当時一八六八年には  
上野の寺で院主だった。宮はわずか二十五歳あまりで、將軍派により天皇に対抗して擁立されたが、のちドイツに派遣され、そこで  
完全な軍隊教育をうけて、大尉にまで昇進した。<sup>(87)</sup>口ひげのある、全く西洋人のような外見の、上品な紳士で、優しくてもの静かで、  
「昔型」のよい日本人だ。

21・12・15条

(89) 北島男爵(治房)、(90) 同夫人、(91) 同令孫

○宮殿のような門から、<sup>(91)</sup>上品な風采の、端麗な一人の若紳士が出てきて、車を止めてきた。「寺をお訪ねになる外人の方というの  
は、あなたでいらっしゃいますか?」——「仰せのとおり、寺へ行くところですが、お待ち下さる方があろうとは意外です」——「で  
は、私の家へ紹介されていらっしゃるか?」——「いいえ、そうじゃありません」——そこで、おもむろに  
話が始まったのだが、自分が、単なる旅行者以上の興味を抱いており、日本の事情に精通していることに気づくと、紳士はその家に  
立寄るように勧めた——「わたしの祖父にお会いになりませんか? 祖父は寺院と宝物に最も通じている人間です」と。名刺を渡すと、

非常に優雅な、純日本式の邸宅へ案内された。間もなく、雪白の長いひげを蓄えた、体格のよい端麗、温厚な老人が現われた。(中略) 部屋の中から、美しい声<sup>(90)</sup>がした——「ベルツさんがいらっしやったのですか?」と。老人は、そうだとこたえた。すると、静かに障子が開かれて、自分は中へ入るように促された。そして、ソファーに半身を横たえて、自分に会釈する婦人を見たとき、自分は誰の家に居るのが、やっと判った。それは、一度見た者の、決して忘れることのできない顔であったからである。およそ二十年以上も前のことであるが、一人の婦人が自分のところへ、嫁を診てもらうために連れてきた。自分が日本で見ただけ、最も美しい、目に立つ女の一人であったその婦人が、すでに嫁のある身であり、否、それどころか、祖母でさえあるとは、ほとんど信じられなかった。しかし、事實はそうだった。その婦人は、四十歳を越えていたが、まだあまりにも若々しくて美しく、しかも元氣潑刺として、美しいトビ色の眼は利口に輝く有様で、その後、長年のあいだ、婦人の姿がしばしば自分の念頭によりみがえったほどである。十五年前、自分は再びその婦人であった。当時、婦人は肺を患っていたが、いま話るところによると、その後全快するにいたらなかった由である。今方も、医者が来ていたそうであるが、自分が、親しく診察して参考に供することを申し出ると、婦人は感動のあまり、眼に涙をうかべる有様だった。(中略) 一日中、自分と寺めぐりをやって、なんの疲れも見せない七十三歳の北畠老の驚くべき元氣さにはあきれざるを得ない。(中略) 氏の夫人は、現在六十七歳である。夫人は病身のため、すでに久しい以前からほとんど外出しない。しかし、その優れた才色と貞淑さは今なお、到るところで、あらゆる人の語り草となっている。

(92) ギールケ解剖学教師

○ギールケは上品で、すこぶる熱意のある人物だが、惜しいかな常に病身である。

13・6・22条

(93) 久邇宮陸軍大将・元帥(邦彦王) ↓ (162) ダウム(フォン)

○船に乗り合わせた船客のゼーリヒ氏が、日刊ベルリーナー紙などに反日的な記事をたくさん書いているフォン・ダウム氏について、次のような話を聞かせてくれた。富士山麓は精進湖のホテルのこと。星野が所有するこのホテルは、それまでヨーロッパ人しか訪

れなかった。そこへ、久邇宮（現在ベルリンにご滞在中）来訪の通知がある。ここには共用の食堂しかなく、ホテル側は宮のために特別な食事室を用意しようと考えた。しかし、肩の凝らない気さくな若紳士(88)でおいで(89)の宮は、自分はほかの客と同じ部屋で食事をしたいと言われ、お供の将校とともに部屋の隅のテーブルにつかれた。そこには何人かのヨーロッパ人がいて、そのなかに日刊ベルリナー紙をはじめ多くの新聞の特派員をしていたフォン・ダウム氏も入っていた。のちに解説付きでこの記事を発表した幾人かの他紙の記者もいた。ダウム氏は自分が送った記事の頭に、日本人についてはいいことばかり言われてきたので、自分はその醜い面をほじくり返してみたい、と書いた人物である。実際、この御仁のやり方はいかにも悪趣味で、途方もなく無神経であった。ところが、その当人がどんな人間であったか、この精進湖で明らかになったのだ。ダウムは連れの人たち——ご婦人方——に向かってあたりはばかることなくドイツ語で大声を張りあげ、日本の皇子について、口汚い言葉を吐いては悦に入っていた。あとから、宮のお供の将校が別のドイツ人に言ったそうだ。「あなたのお国の方がおっしゃっていたことは、すべて通じておりましたよ」と。

(94) 熊雄（バイル令孫）

○原田テルを訪ねる。彼女の子供たち、熊雄とノブは立派に成長した。熊雄は典型的な日本人の顔だち。ノブは典型的なユダヤ人の容貌を祖父のバイルから受け継いだ。

(95) クラウス、フェルディナント（在ハンブルク）

○クラウスは化学を学んでおり、大学のあるフライブルクへ向かう途中で立ち寄ったのだ。好人物なのだが、気の毒なことに足が弱い。それでも、先天性股関節脱臼の手術を受ける前に比べれば、見違えるほどうまく歩けるようにはなっている。おまけにクラウスはとても太っている。これが二重に負担をかけているのは、いうまでもない。

(96) クラーチュ解剖学者（在プレスラウ）

44・4・18条

○クラークの話は例によっておもしろいが、不愉快でだらしな話し方だ。

41・8・4条

(97) クリーゲルン (フォン) 夫人 (在ドレスデン)

○ドレスデンのフォン・クリーゲルン氏とその若くて感じのよい夫人と知り合いになった。

42・10・31条

(98) クリーン将軍 (在ベルリン)

○クリーン将軍が来訪。日本時代からの古い友人である。(中略) 気の毒に、皮膚の硬化症をわずらっており、なおる見込みはない。  
顔がひどくゆがんでいる。痛みがなく、全身症状も出ていないことだけが救いだ。

40・6条

(99) 黒田首相 (清隆)

○先日、大隈外相邸で宴会に出席。黒田首相と大いに語り合った。首相は以前、途方もなく乱暴でかんしゃく持ちのため「氣違い黒田」と呼ばれていたが、今ではすっかり人心を引きつける愛想のよさと謙讓さを備えた人物である。とても力が強くて、力技はなんでもみな好きだ。

21・12・15条

(100) グスマン博士・ベルツ家主治医

○三十五年間わが家族の主治医であったシュトゥットガルトのグスマン老博士が急死した。個人的にも親しくしていたので、とても残念だ。グスマンは私が知っているなかでも、美男子中の美男子だった。

44・1・27条

(101) グリスコング駐日美国公使夫人令母

○昨夜、イギリス公使館書記官ガビンズのもと。(中略) 自分が食卓へ案内する役にあたった婦人は、アメリカ公使夫人のお母さんだった。方々に旅行して、世故に通じ、利巧で、彫像のように美しいこのアメリカ婦人と、大いに快談した。

37・11・5条

(102) グルート・ヘレン (幼名アイコ)

○コンドル家のお茶に招かれた。スウェーデン人と結婚した娘のヘレン (幼名はアイコ) が赤ちゃんを連れて来ていた。ヨローロッパ

○○○○○

とアジアの血を引く子供たちのなかでも、ヘレンはとびきり背が高く、優雅で気品のある美しい女性に成長した。 41・4・27条

(103) グレーテ (ベルツ舎弟カール令嬢、愛称マルガレーテ) → (49) エーベルハルト (ベルツ舎弟ロベルト令息、愛称エボ)

○朝、起きようとする、部屋のドアの向こうから、心地よい女声のやさしい歌が聞こえてきた。姪のヒルデとマルガレーテだった。病気の伯父のためにクリスマスの歌を歌ってくれたのだ。涙が出るほど感動した。 1・12・25条

(104) グローヴァー、トーマス・B 日本在留外人最古参者

○トーマス・グローヴァーのもとで午餐。かれは最古参の日本在留外人である。すでに四十五年以上も前に来朝したのだ。かれはたびたび財産を作り、たびたび財産を無くした。うわさによると、折悪しく現在はちようど金持ちでないそう。しかしながら、その数奇な人生のあらゆる栄枯盛衰を通じて、終始変わらぬ陽気で快活な性質を保っている、誰もかれを六十六歳だと見る者はない。

37・10・29条

(105) ゲン・ミン前緬甸王

○王はわれわれを愛想よく迎えた。王自身は明らかにフランス語が割合によくわかる様子だったにもかかわらず、会話は先刻の人物を介して行われた。王は、ヨーロッパ式に仕立てた黒い軍服を着て、黄色い絹のターバンをつけていた。小柄で、愛想のよい、やや太り気味の人で、半分ないし四分の三まで蒙古系の顔立ちをし、ゴマ塩の短い頭髪と上ひげがある。メール大尉は、自身および全フランス人が王に好意を寄せていることを断言し、新たに始まったこの年のうちに王が愛する臣下の居るビルマの地域に帰還できるとを、自身および全フランス人が期待していると伝えた。

36・1・2条

(106) ケスラー、マリオン

○ケスラーは現在、ジーマンス・シュッケルト製作所の支配人という要職にある。一家は市の西はずれ、プリンツ・レゲンテン通り



四番地に住んでいる。残念ながら、ケスラー夫人はあまり体調がよくない。今年一二歳の娘のマリオンは背が高いが、思っていたほどかわいらしくない。

41・11・29条

(107) ゲルラッハ陸軍大尉夫人

○車中でベルギーの陸軍大尉ゲルラッハ夫妻と再会。夫人は美人ではないが、善良で信仰心があつく、信じられないほど好奇心が旺盛である。

41・7・7条

(108) コアット伯爵

○夜、パジエと共にコアット伯のもと、二人とも実に魅力のある人物だ。

27・11・30条

(109) 皇后 (明治天皇皇后美子)

○皇后は、内親王がたや女官たちと共に、あとより続かれた。長いすそをひく、バラ色の洋装をしておられた。

22・2・11条

○皇后は、だんだん洋装に慣れてこられた。全く立派に見える。優しい容姿に、品のある顔だち。簡単な式辞を読まれた。

22・4・27条

(110) 皇子 (迪宮裕仁・昭和天皇)、(111) 同 (淳宮雍仁・秩父宮)、(112) 同 (光宮宣仁・高松宮)

○若い皇子迪宮 (「光りかがやく高貴な方」という意味) は元気で、本当に美しい赤ちゃんだ。

34・9・16条

○朝、岡侍医と、沼津にある別邸に滞在中の東宮のもとへ。(中略) 東宮のいわゆる御用邸もここにある。ごきげんよし。父親らしいご自慢で、隣家の川村伯爵のもとにお住まいの——というよりは、むしろ養育中の——皇子たちを見てほしいとのこと。全く自慢されるのも無理はない。二人とも立派な男の子だ。兄の迪宮は二歳半。いくぶんお父さん似で、色もお父さんのように浅黒く、丈夫な坊やである。弟の淳宮は一歳半。色白ではおが赤く、すこぶる美しい顔立ちの、とても可愛らしい子で、しかも歳の割には非常に利発

110

111

だ。

37・2・12条

○東宮夫妻は、自分が久しく皇子たちを拝見しなかったので、再び見せようと思われたのであった。両親として自慢されるのも、まことに無理のない次第で、いとけない皇子たちは、この上なく可愛らしく、健やかで元気がよい。洋式の子供服姿で、その服装にすこぶる満悦の様子だった。

37・10・9条

○まず最初、先日拝見したばかりの、一番末の皇子を見舞う。誕生後八十日には立派な体格、見事な発育で、お母さん似だ。上の二人の皇子は現在、ほぼ四歳と二歳半になるが、まことに可愛らしい。行儀のよい、優しく快活な坊やである。長男の皇子は穏やかな音声と静かな举止とで、非常に可愛らしく優しいところがある。次男の皇子はいっそうお母さん似で、すこぶる活発で元気だ。

(中略) 天気がよいと、二人とも終日、御苑内や海岸の砂浜で遊ばれる。(中略) お互いに仲良く、いっしょに遊んでおられるのを見ると、全く可愛らしい。(中略) 弟皇子は自分が「お魚は、一体どこにございますか」と尋ねると、いたずらっぽい微笑を浮かべながら、木の小皿を自分に突きつけて「これにお魚が一杯なのが、見えないの」といわれる。

38・3・31条

○妃は私に三人の皇子を誇らしげに引き合わされた。お三方そろって発育がよく、元気で快活な少年。

41・3・30条

(113) 皇太子 (明宮嘉仁・大正天皇) ↓ (114) 皇太子妃 (大正天皇皇后九条節子)

○絶好の天気恵まれて、東宮成婚式。(中略) 東宮はお元気な様子。妃は大変お美しい。

33・5・10条

○東宮はご機嫌よく、お丈夫らしい様子である。以前よりも、たしかに元気で、いきいきとしておられる。妃は、物腰に大変お優しいところがある。

34・9・15条

○東宮は気遣わしいほどたくさん紙巻タバコをおふかしになる。

34・9・16条

○東宮は、二週間このかた、急に目立って体重が減ってこられた。(中略) 顔は少しやせられたが、胸や肩の筋肉は力士のようである。

34・9・16条

○沼津に近い静浦は、日本の最も美しい入り海の一つだ。(中略)東宮のいわゆる御用邸もここにある。<sup>(113)</sup>ごきげんよし。 34・10・4条

○晩餐会の最中に沼津から、東宮が高熱との電報に接した。わずか一週間前に、<sup>(113)</sup>元気で丈夫な様子を拝見して喜んだばかりの自分にとって、この報道は全く寝耳に水だった。 37・2・12条

○東宮は軽微なインフルエンザにかかっておられたが、<sup>(113)</sup>元気で上機嫌だった。 38・3・25条

○皇太子を診察することこそ、日本への旅の唯一の目的である。東宮は古くからの友人のように私を歓迎された。一時間もあれこれと雑談を交わす。体調はきわめて良好とお見受けした。<sup>(113)</sup>日に焼けて太られたようだ。 38・3・26条

○われわれの進言によって天皇は、<sup>(113)</sup>スポーツマンらしい筋骨たくましい体になられたが、内外ともますます難問の多い昨今、治世をつかさどることによる興奮に耐えられるものかどうか、私は疑問視していた。 41・3・30条

(114) 皇太子妃 (大正天皇皇后九条節子) ↓ (113) 皇太子 (明宮嘉仁・大正天皇)

○東宮御所の引見式。東宮ご夫妻がこの種の引見をされるのは、これが最初である。礼式は天皇の場合と同様だが、ただ少し簡略である。(中略)東宮は軍服で、<sup>(113)</sup>ごきげん良かった。妃は白の洋装で、<sup>(114)</sup>いつものようにお優しく美しい。お気の毒に、<sup>(114)</sup>三メートルは優にある重い長すそで、歩くのにとってもお困りだろう、<sup>(114)</sup>あの小柄なお体では全く綱渡りのあぶなっかしさだ—<sup>(114)</sup>侍女がそのすそを、妃の肩の高さに保持していたから、あの重い布地の目方が、<sup>(114)</sup>きゃしゃな妃にはひどくこたえたに違いない。 37・1・1条

○妃は、皇子たちを手もとにお引取りになって以来、<sup>(114)</sup>もとのように快活になられた。 38・6・6条

○皇太子妃は<sup>(114)</sup>明るく、華があり、魅力的なご様子。グレーの毛織りの服に白いブラウスとボレロ風の上着をお召しになった優美なお姿。<sup>(114)</sup>着こなしも上品で、おじょうずだ。 41・3・30条

○皇太子は私を妃殿下のところへ連れてゆかれた。妃殿下は本日もまた魅力的なご様子。<sup>(114)</sup> 41・5・20条

(115) 小村男爵・外相 (寿太郎)

○首相桂伯爵や小村外相と興味のある話をした。小男の外相は、日ごろよりもいっそう小さく見える。困難な時局に会して、山々の心配事があるのだ。

(116) ゴルチャコフ、ミカイロビッチ將軍

○ロシアでは信心なるものを、上流社会に至るまで、往々にして真面目に考えていることは、今度初めて発表されたビスマルクの書簡でわかる。ビスマルクは其中で、ゴルチャコフのことを次のように述べている——ゴルチャコフは復活祭の後で、すっかりやせ衰えてペテルブルクへやって来たが、そのわけは、あまり厳格に精進を守ったので、肉類をいっさい断ったのみか、獣炭で精製されているというので、砂糖すらとらなかったからであると。

(117) 西郷陸軍大将 (隆盛)

○西郷は傑出した軍人であり、指揮者であることがわかった。首のないかれの胸がまず発見された。後には首も見つかった由。

10・10・4条

(118) 齋藤海軍大臣・首相 (美) ↓ (188) 東郷提督・海軍大将 (平八郎)

(119) ザイデンシュピナー—枢密軍事顧問官

○口髭をみごとに伸ばした枢密軍事顧問官ザイデンシュピナーとは親しく話をしたことがない。

40・11・16条

(120) ザイブルク (フォン) 総領事、(121) 同夫人

○ドイツ人の希望により、横浜のクラブで「東アジアにおける女性界」と題する簡単な講演を行なった。その後で愛想のよいフォン・ザイブルク総領事夫妻のもとで、自分のために送別会。

38・5・27条

(122) シェーンレーバー、ヘルマン、(123) 同夫人

○シェーンレーバーの家族は、夫妻も、子供たちも、義理の両親である建築監督官ターフェル夫妻も、みんな魅力的だ。(122)(123)(159)(160) ヘルマン・シェーンレーバーは、われわれと同じビーティヒハイムの生まれで、カールの幼な友だちであり、学友でもある。 43・1・24条

(124) シック↓(297) モーザー

○ヴァイグレ以外に、エルヴィンは二人のシュトゥットガルト出身の若い学生、シックおよびモーザーとつき合いがある。二人とも裕福な家庭の息子たちで、かなり上品だが、おもしろみがない。 42・11・11条

(125) シボー高田商會社員(ハイゼ、ヴィルヘルム嬢) 夫人

○イギリス人と日本女性との間に生まれたシボーは、高田に教育を受け、今はこの会社の社員である。その愛らしい若妻は、私の友人ハイゼと日本女性の間にも生まれた。 43・7条

(126) シーボルト(フォン)、ハインリッヒ・フィリップ、(127) 同夫人(ミセス・カーペンター)、(128) 同義理令嬢(カーペンター嬢)

○三カ月前にフォン・アイゼルスベルクの執刀で腸を吻合したシーボルトは、めざましい回復ぶりをみせ、(126) 体重も一〇キロ増えた。

しかし手術前の黒い嘔吐物を考えると、まことに残念だが治癒の見込みはない。現在、シーボルトは所有する日本の品々の整理と翻訳に没頭している。自分の病気がどれほど重いか知らないで見ると、つくづく不憫である。今ようやく居城フロイデンシュタインの改修と内装を終えたばかりだというのに、幾許もなく世を去らねばならぬとは。(中略) 夫人はさるイギリス人近衛将校の裕福な未亡人。(127) 色黒の、必ずしも好感のもてる女性ではない(ユタヤの生まれだが、インド人の血が入っていると思われる)。たいへんな動物好きで、犬一二匹、乗馬ウマとシカと雄ヤギを数頭、クジャク二〇羽、七面鳥に白鳥、そしてオウムや鳩を一ダース、それに

何百というエキゾチックな小鳥を飼っている。最初の結婚でできた一八になる女の子がある。驚くほど口数が少なく、(128) 血色の悪い娘

だ。

40・10・4条

○ハインリッヒ・シーボルト男爵がミラノへやって来た。日本に発つ前にミラノカナポリで会えるかもしれないと手紙を書いておいたのだ。ありがたいことに、私といっしょに日本へ行く計画を思いとどまってくれた。旅行には体がもたなかっただろう。<sup>(126)</sup>見るからに衰弱しており、この二、三カ月でひどく老け込んでしまった。六月に手術をしたアイゼルスベルクが言うように胃ガンがまだ取りきれていないのは確かだが、術後五カ月を経てそのめざましい回復<sup>(126)</sup>ぶりを目にして、見立て違いかもしれない、そうであってほしいと希望を抱きかけていたところだった。残念ながら、もはやそんな期待は持てそうにない。なにがそんなにシーボルトを日本に駆り立てるのか、私にはよくわかっている。<sup>(127)</sup>気位の高い奥方より美しい、彼のおはなさんがいるからだ。だが、彼女との再会はほとんどないだろう。シーボルトはヨーロッパの女性に対してひどく辛辣で、日本女性のこととなると手放しでほめたたえる。しかしシーボルトは文句を言えた筋合いではない。愛情からでなく、金のために結婚したのだから。夫人は自信家でわがまま、精力的で利口な女性で、日本の妻のようにシーボルトの言うことをきいてくれはしない。ドイツ人の良妻の夫への尽くしようというものが、シーボルトにはわかっていない。

41・1・16条

<sup>(129)</sup> シュヴァインフルト、ゲオルク植物学者・アフリカ探検家

○年とってなお豊饒たるアフリカ研究家、G・シュヴァインフルト。

43・10・3条

<sup>(130)</sup> シュタイネン(フォン・デン)教授夫人

○芝居がはねてから、フォン・デン・シュタイネン教授夫妻とラインゴルトで夕食。血色もよく、きれいな目をした夫人は若く見える。八人も子供がいるとは思えない。

41・12・13条

○黒い瞳のすてきなフォン・デン・シュタイネン夫人は九人も子供のいる主婦だが、いまだ容色衰えず、まるで少女のような初々しさ。

43・10・3条

(131) シュテッカー、ヘレン博士・女権論者

○女権論者ヘレン・シュテッカー博士の「結婚をめぐる闘い」という講演を聞く。(中略)シュテッカー嬢の印象はかなり好感のもてるものであった。愛嬌があるとはお世辞にもいえないし、着ている改良服はセンスのよさとはほど遠いが、話は明快でうまい。現代女性には、しゃべっているうちに興奮して、せっかくの話をだいなしにしてしまう人が多いが、シュテッカーにはそんな心配はまるでない。

40・11・1条

(132) シュトルルーヴェワシントン駐在公使夫人

○夫人は美人ではないが、私がこれまで会ったなかでいちばん利口な女である。おそろしいほど理智的。そのうえ、おおぜいの子供の母親を立派につとめている。

17・9・20条

(133) シュミット司法官補(在ハノーファー)

○ハノーファーのシュミット司法官補(眼鏡をかけた陽気な紳士)

41・8・3条

(134) シュルツ、カール上院議員・内務長官

○写真から予想していたよりも、はるかによい印象を受ける。写真のシュルツは顔に皺を寄せて気難しそうに見える。実際に会ってみると、ゆるくウェーブのかかった銀鼠色の髪に、短く刈りそろえた赤っぽい髭を顔一面にたくわえた、背丈のある細身の男だ。横から見ると多少だんご鼻をしているが、不格好ではない。目には生気があり、鼻眼鏡の陰から射るように見える。時々、口元に笑みが浮かぶ。言葉は明瞭で、確固たるものがあり、揺るぎない。声は耳に心地よい。少し口調が強くなることもあるが、私には好感がもてる。

17・10・5条

(135) シュルツェ、エミール・アウグスト・ヴィルヘルム博士・東京医学校教師、(136) 同夫人

○会議の期間中、東京時代のかつての同僚で、隣人でもあったシュルツェがわが家に滞在した。相変わらず学識ゆたかで、議論好き

な男である。(中略)六四という年齢にもかかわらず、<sup>(135)</sup>肉体的にも精神的にも驚くべき若々しさだ。 39・9・29条

○シュルツェ夫妻を訪ねる。シュルツェは今年七〇歳になるが、<sup>(135)</sup>相変わらず元気なスキーをしている。だが、前よりも少しばかり覇気がなくなった。(中略)今年、ブラウンシュヴァイクにいる長男も末の娘も結婚した。シュルツェ夫人は<sup>(136)</sup>肥満気味だが、まだ元氣潑刺としており、今でも女性の地位向上を求める運動などに精を出している。 43・11・24条

(137) シュレーン ナポリ大学病理解剖学教授

○パウ・ルンとともにシュレーン老博士を訪ねる。三六年もの間、ナポリ大学の病理解剖学の教授をつとめている。天才肌の男で、さまざまなすばらしい発見をした。少なくとも自分ではそう信じている。いずれにせよ、途方もなく広い関心を有し、精力にあふれていることは間違いない。結核と労咳は二つのまったく異なる疾患である、と博士は主張する。 41・1・21条

(138) ジョンストン、ハリー探検家

○ジョンストンは愛すべき博識の紳士だった。この精力的ながらも風采のあがらぬ小男に、イギリスのために中央アフリカ全域を獲得する力があつたとはとても信じられない。 43・10・15条

(139) ジンガー、パウル社会民主主義者

○議長をつとめるジンガーはなかなかうまい。<sup>○○○○○○○○○○</sup>ユダヤ人とは見えぬ立派な髭をたくわえ、人を引きつける力強い声と精力的な発言。そして確信に満ちた態度で、きわめて舵取りのむずかしい大会をとりしきっている。 40・8・22条

(140) スクリバ、ユリウス・カール東京帝国大学医科大学外科学教授

○いま一人の旧友を、自分はやがて喪うことになるだろう。ドクトル・スクリバだ。かれは非常に老衰しているので、まだ五十六歳なのに、七十歳に見られているくらいだ。 37・12・25条



○午後三時三十分、スクリバ死去、享年五十六歳。二十三年間、お互いに親友であり、同僚であった。医師としての故人は、確かに優秀な外科医だった。この方面では大家であり、しかも尽きざる努力、うまざる勤勉の人であった。また教師としては、西洋の医学を日本に紹介する点で、抜群の功績をたてたのである。人間としての故人は、局外者からとても無愛想に見られていた。しかし、一段と近しい知り合いになったものは、やがて故人が、上辺はつつけんども、心底は親切な人間であることを悟り、その人格を尊重するようになった。

(141) ストルーベ駐日俄国公使夫人

○ストルーベ露国公使の生後二カ月の赤ん坊が泣き叫んで、軽い臍脱腸を起こしたのである。母親は在住外人のうちで、最も美しい女性とまではいえないにしても、確かに最も利口な女性である。かの女は半ダースもの外交官を自在に操っている。それでいて優れた母親であり、恋愛に劣らぬ才能で子供たち——四人の女の子——を養育している。

13・2・9条

(142) ストレート

○昨夜、クラブで、上品な一青年が拙文「死者の荣誉表彰」のことで、自分に話しかけてきた。かれはその英文訳を、どこかで読んだそうだ。かれの風采たるや全く、一段と洗練された近代的アメリカ人の典型だった——背の高い、やせた体つき、整った、きりっとした顔立ち、細いかぎ鼻、薄い唇の口もと、がっしりとしたあご。しばらくして、微笑しながらかれのいわく「あなたはおそらく、わたしをご存じありません？」と。「存じません」と自分はいった。「しかしわたしは、あなたをよく存じておりますよ、なにしろ十五年前、この東京でチブスの治療をして戴いたのですから。わたしの名前はストレートです」と。そこで自分も、やっとかれを思い出した。そのころのかれは、南ドイツで「極道者」と称する種類の人間だった。情けないことにかれは、教養の高い優れた婦人で、結核の亢進していたかれの母親が、息子に立派な教育をうけさせるだけのお金をもうけるため、どんなに血の汗を流していたかを、

てんで気にとめなかった。それが今、ここに気品の備わった、真面目な人物となって現われたのだ。ああ、せめてこの様を、あの善良な母親に見せてやりたかった。

(143) スワロフ

○スワロフも想像とは異なり、やせこけた年寄りの校長のように見える。

41・7・9条

(144) ゼラー 美国学者、(145) 同夫人

○エーレンライヒ教授宅で晚餐。旅の見聞も広く、経験ゆたかで愛すべき男だ。夫人も才気煥発である。アメリカ学者のゼラー教授が同席。すこぶる愛想のよい中年の紳士。夫人の方は学識はあるが、騒がしく自信たっぷりの女性である。

39・5・24条

(146) ゼーリヒ夫人

○ゼーリヒ(横浜)とその若く心やさしい夫人

41・3・4条

(147) 副島内相(種臣)、(148) 同令息

○副島伯、品川に代って内務大臣。副島は上品な老人で、よい意味における「昔風の日本人」であり、骨の髄までジェントルマンだが、特に外人に好意をもっているというほうではない。

25・3・12条

○日本の最も優れた政治家兼学者の一人で、高潔な人格により一般に尊敬されている副島から、その一人息子のために診察を求められた。かれは威厳のある高貴な面差しの人で、ほとんどシナ人型に近く、しかも、それなりに美しい顔立ちである。だが、今では老人であり、それも早老の方で、長いまばらの白ひげがある。令息は全く絶望状態に陥っている。肺を病み、もはや余命いくばくもない有様だ。一年前に熱愛する母親を失ったが、それ以来この十九歳の美青年はしだいにやせ衰えていったすえ、今年の初めになって急激に発病したのであった。善良な旧い型の日本人である父親は、(中略)時々、苦しげにその口元がかすかにけいれんしてはいたが、

しかし自己を抑制し、静かながらもしっかりとした調子で語っていた。

14・5・12条

(149) ソンターク女史

○夜、ドクトル・ブンシュと共にソンターク女史のもと。とても達者な六十代の婦人——ちなみにエルザス出身——で、韓帝の洋式生活がっしりと切り盛りしている。

36・4・27条

(150) 高島(嘉右衛門)夫人→(56) 大倉(喜八郎)夫人

(151) 高田カミキチ(高田慎蔵婿養子)

○カミキチは私の親友の高田慎蔵の婿養子である。日本人としてはとても背が高く、上品に育っている。技師をしており、とても社交的な性格だ。みごとにドイツ語を話し、英語もほとんど同じくらいうまい。

43・7条

(152) 高義 駿式部官

○東京で顔見知りの堂々とした高義 駿式部官と、外国語のしゃべれない韓国の高官一名が列席していた。

36・5・5条

(153) 田中子爵・宮相(光頭)、(154) 同夫人→(164) ダヌタン、アルベル駐日比利时国公使夫人(ダヌタン、エリアノーラ・メアリー)→(171) 珍田男爵・駐徳日本国公使・大使夫人

メアリー)→(171) 珍田男爵・駐徳日本国公使・大使夫人

○夜、ドイツ公使館で盛大な宴会。ビスマルクの姪にあたるフォン・コツツェ夫人を食卓に案内した。(中略)その他の出席者にはベルギー公使と、<sup>(164)</sup>美装を凝らしたその夫人——夫人は最近、あの年で『愛の歌、その他』なる小歌集を出版している。多忙な才人珍田次

官、<sup>(171)(164)</sup>田中宮内大臣とそれぞれの美しい夫人、お道楽から戦時通信員をやっている英国の某貴族、有名な英国の漫画家メルトン・ブライヤ、フランスの某外交官、多数の日本官吏、公使館関係の若いドイツ貴族の身内五、六名、それから、しんがりに挙げては申し

訳ないが、ボアス氏!氏は、ご自身の重要性なる点に関して非常な自惚れをおもちのようだ。氏は、百種の新聞を取り扱っているドイツの大通信社の通信員であり、従って、二百万の読者を相手に記事を書くのだそうだ。日本の国土と国民に対して、なんの知識も

もたぬ人間を派遣するなどは、ドイツ新聞界の不手際を証明するようなものだ。しかもその人間が、ドイツに日本の知識を吹きこもうというのだ。個人的にも氏は、万人の鼻つまみとなっている。

37・3・14条

○今朝、重病の宮相田中子爵夫人を往診。平和に関する風説のことを、田中子爵に述べた。子爵のいわく「さよう、平和は結構でしょう。しかし、それが一体、可能だとお考えですか」と。自分はいったーロシアはこの戦争で、ひたすら敗北を重ねてきたから、おそろく、たやすくは和睦できないだろうと。すると、子爵は笑って「もちろん、そうでしょう。だが、いかにわれわれが平和を望んでいるからといっても、ロシアのために、わざわざ負けてやるわけには参りませんからね」と。

それから子爵は、ウイルヘルム皇帝より日本の天皇への親電の英訳を、自分に見せたが、その内容は、大体こうだった「乃木将軍とその軍隊は、旅順において抜群の勇猛果敢さを發揮せり。陛下よ、朕と朕の軍隊の名において、朕の授与し得る最高の陸軍勲章、すなわち朕の祖宗フリードリッヒ大帝の制定に係る勲功章を、朕の贊嘆の徴として、乃木将軍に授与することを御聴許ありたし、ステッセルにも、該勲章は授与せられたり」と。最後の一句に、田中子爵は笑いながらいった「貴国の皇帝は、大変如才ない方ですね」と。そして子爵は、体の前で両手を、天秤の皿のように上下させたのである。乃木将軍の叙勲が、ご註文どりの好印象を日本の国内に惹起するかどうかは、疑わしいものだ。

38・1・11条

(155) タノスケ、(156) 司令母  
○自分に不安を感じさせたのは、かれの目立って青白い顔色だった。(155) しかもそれが急激にその度を加えると共に、意識が減退していったので、自分は直ちに内出血で、それも致命的のもの、おそらくは胃の出血であろうと診断した。(中略) 弱い白髪(156)の老婆であるこの母は、息子が気を失って倒れたとの知らせに、あわてふためいて駆けつけ、悲痛のあまりかれの上に身を投げかけたので、これを引き留めねばならなかったほどである。(中略) そうしながらも老婆は、金切り声で死人の耳にその名を絶えず叫ぶ——というよりは、(156) むしろどなるのであった。(中略) 合掌した手を高く上げてぶつぶつとお祈りをした。

13・3・20条

(157) ターフェル博士、(158) 同令母↓(324) ロイシュレ嬢

○シュトゥットガルト出身でチベット帰りの若いターフェル博士が、地理学会ですばらしい講演を行った。ターフェルは私といっしょにクラウスのところに泊まっている。ターフェルの母親は、私が子供のころから知っている、あのシュトゥットガルトのかわいらしいロイシュレ嬢であることがわかった。

41・12・1〜5条

(159) ターフェル上級建築監督官、(160) 同夫人↓(122) シェーンレーバー、ヘルマン、(123) 同夫人

(161) タフト將軍・前菲律賓總督

○かれは目下米国に赴く途中で、その陸軍大臣に決しているのだが、現時米国の膨脹政策に際して一役を演じるには、おそらく適任であろう。堂々たる肥大漢で、精力的な型だが、柔和な顔立ちをし、白髪混じりのブロンドの口ひげがある。愛想よく振舞う点にかけては、全く堂に入っている。

37・1・4条

(162) ダウム(フォン) ↓(93) 久邇宮陸軍大將・元帥(邦彦王)

(163) 伊達侯(慶邦) 令息

○午後、岡玄卿と一緒に、旧仙台の大名の六歳の病児を往診。この子は、ほとんどすべての大名の子供がそうであるように、至極虚弱に発育し、きゃしゃで、りこうだが、かんが強く、これは極度に愚劣な甘やかしによるところが多い。

12・4・2条

(164) ダヌタン、アルベール駐日比利时国公使夫人(ダヌタン、エリアノーラ・メアリー) ↓(153) 田中子爵・宮相(光頭)、

(154) 同夫人

(165) 団十郎(市川)

○今日、団十郎の葬儀。かれの死により日本は最も卓越した俳優、おそらくは古今を通じて最も偉大な俳優の一人を失った。(中略) 自分は個人的の交際でよく団十郎に会ったことがあるし、また重症のかれを治療もした。かれはかっぶくがよく、顔は面長であった

が、おもな日本人の型タイプでよく見受けるように、惜しいことに下顎突出が全体の印象を著しく醜いものにしていた。

36・9・20条

(166) 団蔵(市川——)

○午後、高島と大倉の招きで劇場へ。団十郎に勝るとも劣らぬと評判の役者、今年七四歳の団蔵が先代萩を演じた。昔ながらのスタイルの主役たちの例にもれず、団蔵は風邪でもひいたような不自然に押し殺したしわがれ声を喉の奥から出す。そして役者絵そっくりの、ぞっとするような渋面を作る。私の所有する一八世紀初頭の屏風には、ちょうど「先代萩」の場面が描かれている。それを見れば、この二百年間、演技にまったく変化がないことがわかる。現代の役者たちは、当時この作品を演じた役者たちとまるで同一人物のようだ。

41・4・18条

(167) ダンフィー嬢

○ホテルの相客たち。モントブッケン準男爵夫人。金持ちで黒い瞳(167)をしているが、ほかの血が混じっているために、評価がいまひとつのダンフィー嬢(228)。ブロンド美人のヒルス嬢。

17・8・16条

(168) 駐日清国公使(裕庚)夫人、(169) 同令嬢

○夜、清国公使(168)(169)、その美しい夫人と令嬢、フランス海軍提督プールトレー伯父妻と令嬢、三宮夫妻、ジューラン画伯などと共に、アルマン(フランス公使館)のもと。あとで、みながダンスをした。

28・11・18条

(170) 珍田男爵・駐徳日本公使・大使(捨巳)、(171) 同夫人↓(153) 田中子爵・宮相(光顕)、(154) 同夫人

○四時、日本大使珍田男爵を訪ねる。夫婦ともども感じのよい人たちだ。しかし井上夫妻の後釜ということ、二人とも割を食っている。なにしろ、あれほど夫婦そろってそつのない外交官は、日本ではおいそれと見つからないのだから。

41・12・13条

(172) ツァッペ元横浜総領事夫人

○午後、以前の横浜総領事ツァッペの未亡人と、当地に嫁いでいる娘のメルテンス夫人がうちでお茶をともにした。ふたりとも上品で魅力的な女性だが、それぞれに深い悲しみと心配の種をかかえている。

(173) ツィントグラフ博士

○しばらくエチオピアの宮廷に仕えていたツィントグラフ博士が、この国についての講演を行った。実に感じの悪い人物だ。

44・3・8条

(174) ツェッペリン、フェルディナント伯爵・飛行船製造者

○とうとう私はツェッペリン伯爵とも個人的に知り合うことになった。七二歳にしては驚くほど若々しい。鳥の飛び方などについて興味深い話をみんなに聞かせてくれた。

(175) ツェトキン、クララ共産主義者

○報告者は、わがシュトゥットガルトのクララ・ツェトキン。見かけはエルヴェの描写そのものだ――愛想がよく、栄養のゆき届いた、ひとりよがりなプチブルおばさんの典型である。だが、ひとたび演壇に上がるや、印象は一変する。残念ながら、ざらついたしわがれ声ではあるが、両手を振りまわし、上体を前後に揺らしながら、まるで猛り狂ったように無条件の婦人参政権を主張する。

40・8・22条

(176) ツェルヴェク夫人

○ルートヴィヒスブルクにエルヴィンを訪ねると、中年の未亡人ツェルヴェク夫人の感じのいい住居を割りあてられていた。夫人はまさに世話好きのおばさんといった印象で、若い寄宿人（彼女はずっと一年志願兵を受け入れている）の面倒をきちんとみているのがわかる。

41・10・1条

○三人の娘と家を切り盛りしている家主のツェルヴェク夫人は、貫禄のある親切な女性。下宿人の面倒をよくみてくれる。

41・10・11条

(177) ティーツェ帝国地質学研究所長

○昨夜の講演会で偶然ティーツェに会った。一八六八年にチュービンゲンで机を並べた仲である。あれ以来ずっと顔を会わせることがなかったとは！ティーツェは今、帝国地質学研究所の所長をつとめている。六三歳、貫禄十分！

42・3・12条

(178) テイルピッツ提督↓(14) アレキシエフ極東総督

(179) テグナー令尊

○思いがけず、横浜のテグナー一家と出会う。夫人はエルドリッジ博士の娘である。子供四人と日本人の女中連れだ。久しぶりの家水入らずのひとときを過ごしていたようだ。テグナーの父親であるコペンハーゲン出身の恰幅のよい老人は、健康のために毎年、冬の半分をここで過ごしている。一家はこの老人を訪ねてやって来た。

43・3・6条

(180) 寺島伯爵(誠一郎)夫人

○アルコ伯爵のもと。伯は、新婚の寺島伯爵と、すこぶる美しいその夫人(実家は京都の三井家)のため、厳かな宴を張ったのである。

38・5・28条

(181) デイースト(フォン)將軍↓(193) ドウ・ピュイ弁護士・考古学者

(182) デイーフェンバッハ上級参事官

○上院議員という公的な資格でシュトゥットガルトにいるいとこのアルベルト・メルヒオールが訪れた。また、デイーフェンバッハ上級参事官の訪問も受けた。人あたりのよさは昔と少しも変わらない。八〇歳という高齢でありながら、まだあのように矍鑠として  
いるとは！

2・1・15条



(183) デ・ヴェッキ博士

○デ・ヴェッキ博士はきわめて愛想のいい魅力的なイタリア人、外科医のヴォルムザー、シュロース、アラスカ商会のアルトシュール。みんな、とても親切にしてくれる。

17・8・16条

(184) デ・サンチス大佐夫人

○夜、イギリス公使館で盛大な晩餐会。自分は、スペインのデ・サンチス大佐の美しい夫人を食卓に導く。またもや、すっかり国際的で、自分のそばにはこのスペイン婦人、その次が日本人、それからアメリカ婦人、そして清国公使、イギリス人、フランス人、それにドイツ人等々。自分はドイツ・イギリス・フランス・日本の各国語を、ほとんど一気にしゃべった。

38・1・11条

(185) デーニッツ、フリードリヒ・カール・ヴィルヘルム帝国公衆衛生局長

○デーニッツに会う。二五年前に彼が東京を離れて以来、これまで一度も会う機会がなかった。もう七〇になっているはずだが、実に饗饗たるもので、まだ帝国公衆衛生局の公職についている。

40・11・1条

(186) デュバイユ駐日法国公使

○デュバイユ法国公使を訪問して、トンキンへの紹介状を依頼した。公使は、総督あてに手紙をかき、歓迎してくれるように取り計らうとのことである。公使はいつものように、非常に愛想がよく、およそ人好きのする人物である。

35・7・4条

(187) 出羽海軍提督 (重遠) ↓ (188) 東郷提督・海軍大将 (平八郎)

(188) 東郷提督・海軍大将 (平八郎) ↓ (19) 伊東提督 (祐亨) ↓ (78) 上村提督 (彦之丞) ↓ (118) 斎藤海軍大臣・首相

(実) ↓ (187) 出羽海軍提督 (重遠)

○今日、宮中の最大な新年宴会。各国公使を除けば、またも自分は唯一の西洋人であり、しかも、金糸入りの大礼服姿の百官に混じって、たった一人の燕尾服だった。(中略) 自分は、いうまでもなく当世の花形である東郷提督の筋向いに席を占めたので、その顔立ち

をくわしく観察することができた。かれは面長で、<sup>(188)</sup>顴骨はほとんど目立たず、上り下りのない真っ直ぐの眼、高くはない鼻だ。ゴマ塩の鼻下ひげがある。全体として、その顔はいささか日本人離れがしている。その隣は、明治二十七年に鴨緑江沖の海戦で勝利を得た伊東提督で、話によるとこの人は、なんの指揮権をも委ねられなかったので、冷遇されたと思っ<sup>(188)</sup>ているとか。もし実際にそう感じているのなら、かれは自己の感情を、ひた隠しに押包むすべを心得ているものだ——というのは、東郷の冷静、謹厳な有様に反して、かれは<sup>(19)</sup>大いに笑い、大いにしゃべっていたからである。

38・1・5条

○夜はフォン・ムム大使による盛大な海軍のパーティー。<sup>(188)</sup>(中略)東郷、伊東、上村、斎藤、出羽の各海軍提督が出席。みんなとても陽気で、大使のふるまう有名なワインをしたたか飲んだ。日本海軍における飲酒の問題。表向きアルコールを敵視している日本の将校たちがうまさうに酒を飲み干すのを見たら、禁酒主義者たちは肝をつぶすだろう。東郷はカニのように真っ赤になり、<sup>(188)</sup>普段にもまして快活であった。一八九五年、鴨緑江の戦いに勝利した伊東は、いつものように<sup>(19)</sup>あふれんばかりの上機嫌。私の隣には上村が座った。

41・4・14条

<sup>(189)</sup> トク、エルヴィン (ベルツ令息)

○トクは大きくなっていて、意外に元気だが、これはまる一ヵ月、堀内の海岸で遊んでいたからだ。

26・8・21条

○トクは、臨終の時、妹のそばにひざまずき、涙にむせぶ声で絶えず祈り続けました。「お助け下さい、どうか妹をお助け下さい」と。

29・2・28条

○九時、ワイマール号は棧橋を離れた。坊やは、胸もはり裂けんばかりに、すすり泣いた。

33・4・7条

○夜十時、たった一人の子供との悲しい別れの時刻となった。あの子は痛ましく泣いた。自分も眼をうるませずには居られなかった。

33・4・8条

○エルヴィンはたくましい。しかし学校では、必ずしも思い通りにいっていない。この子の文学への傾倒ぶりは度を越している。

39・4・26条

○エルヴィンはシモン教授の教え子たちと同じ簡素な部屋へ移ることになっている。本人は元気いっぱい、楽しそうだ。かなりきついハイキングでも疲れを知らない。

39・7・23条

○エルヴィンは見ていて楽しい。卒業試験を終えてからは見るからにたくましくなった。十月一日から一年間、ルートヴィヒスブルクの第二九砲兵連隊に入隊する。

41・7・20条

○エルヴィンはとても元気だった。連隊での生活に十分満足しており、相当きつい軍務（四時起床、五時厩舎当番）にも音をあげていない。

41・10・11条

○寝台車でベルリンを発ち、朝七時二五分にシュトゥットガルトに着く。エルヴィンが迎えに出てくれた。日焼けして、健康そのものに見える。

42・4・9条

○今日でエルヴィンの兵役期間が切れる。いろいろな意味で、エルヴィンには有意義な体験であった。性格も大人びて、これで安心して大学に行かせられる。体格も立派になった。子供のころの弱々しさを考えると、喜びもひとしおである。

42・9・30条

○エルヴィンがミュンヘンから戻り、次の日曜日まで家にいた。相変わらず元気だ。

43・1・24条

○エルヴィンはこの何日か扁桃腺を起こしているが、起きあがってもなんともないし、夕食も食べられるほど元気だという。昔、東京で、まだ体が弱く顔色も悪かったころには、頻繁に扁桃腺を起こして親を心配させたものだ。しかし今はこんなに丈夫になったのだから、それほど深刻に考えなくてもよいだろう。

43・2・5条

○扁桃腺炎がなおりかけのエルヴィンは、まだ少し青白い顔をしている。

2・3・13条

(191) トルッペル膠州総督・海軍大将

○旧知の中で、現在は膠州総督をつとめる魅力的な海軍大将トルッペルに会えたのは、ことのほかうれしかった。 39・5・17条

(192) ド・アッダ侯爵夫人

○夜、アルコ伯爵のもとで、新任イタリア公使ヴィンチ伯爵のため、盛大な宴会があった。(中略)自分は、若くて美しいイタリアのド・アッダ侯爵夫人を食卓に案内した。夫人との会話はフランス語だった。左側へは日本語を、向かい側へは英語を、そしてその他になおドイツ語をしゃべらねばならない——といった有様で、まったく各国語の総ざらえだ。 37・11・16条

(193) ドゥ・ピュイ弁護士・考古学者(在リユーティヒ)

○リユーティヒの弁護士ドゥ・ピュイがわれわれを待ち構えていた。すぐれた考古学者であり、多くの先史時代の遺跡を発見した人物である。その風貌たるや怪異。精悍な顔立ちは彫りが深く、大づくりで品がある。黒い髭に、黒い巻き毛。まるで旧約聖書の預言者(181)のような。ゲルマン系美男子の典型である偉丈夫のフォン・ディースト將軍と並んで歩く姿は、みごとな絵になっていた。われわれはみんなでドゥ・ピュイ氏の人類学的類型について話し合った。スペイン領時代のオランダにルーツを有し、ユダヤ人の血が流れているに違いないと私は主張した。私の判断は正しかった。氏の母親はポルトガルから移り住んだシェファルデムの出だったのだ。 43・8・7、14条

(194) ナウニン夫人

○キールからヘルフェリヒが来て二、三日こちらにいた。ナウニンも、活発で、聡明な、モンゴル系に似た容貌の夫人をともなって来ていた。 40・2・12条

(195) 長与又郎博士令妹

○午後、結婚式の後の日本式披露宴に出席。唯一の西洋人だった。長与又郎博士の令妹が、一青年医師と結婚したのである。そして今日、帝国ホテルで三百人の客を迎えて、その披露が行われた。(中略)新婦は背の高い、美しい人で、以前上流の若い婦人、ことに花嫁のあいだで流行<sup>モイド</sup>だったベッコウの花かんざしを髪にさしていた。

38・3・16条

(196) ナート ハンブルク・アメリカ汽船取締役、(197) 同夫人

○ナート取締役(ハンブルク・アメリカ汽船の役員ということで、船上ではわがまま放題だった)とその夫人は、見かけどおりの傲慢で下品な人間たち。将校夫人連とはほとんどつき合わなかった。

41・3・4条

(198) 鍋島侯爵(直大)、(199) 同夫人、(200) 同令息、(201) 同令弟

○夕刻、肥前の鍋島侯のもと。侯は夫人や今年六歳の令息と共に長らくロンドンに居った。皆よく英語を話す。比較的寒い気候の土

△△△△△△△△△△

地に相当ながらく滞在した日本人はたいいそうだが、侯もひどいせきに苦しめられていたが、今ではかなりよくなった。夫人の方はもっとひどかった。令息は可愛らしい元気な子供だが、このような両親の間に生まれた子としての宿命的な性質を持っている。最

(200)

近ひどい百日ぜきにかかったが、無事にきりぬけたので、ほんとうにうれしい。家族は自分にすこぶる感謝している。そこで今日、

(198)

食事に招かれたわけである。(中略)侯はまだ若くて、三十二歳くらい、中背、やせ形、まばらな黒い総ひげのある柔和な顔付の人で

ある。いまだかつて自分は、洋服姿いがいの侯を見たことがないほどで、その身のこなしたるや、大多数の日本人とは異なり、全く

(198)

板についていて、なんのあぶなげもない。しかもその上、大名としてはめずらしいことだが、粹である。侯には、小鍋島といわれる

○○○○○

(199)

瓜二つの令弟があるが、その夫人を自分は永らく治療した。鍋島夫人は、今日は、ヨーロッパ風の夜会の盛装をしていた。いつも和

(199)

服姿の夫人を見慣れていたので、変わった服装と髪飾りの夫人に、最初は全く気がつかなかった。外国の衣服をつけた夫人の姿は、

日本の女性のすべてと同様に、まるで人形のように堅苦しく、ひ弱い感じがしたが、まんざら悪くもなかった。自分は夫人の相手役

になって食卓に導き、英語でとても愉快に語り合った。侯夫妻は非常に洗練された社交振りを示し、しかもすこぶる感じのよい会話  
△△△△△△△△△△  
の才をみせていた、鍋島侯が鋭い観察眼をもってしていることは、侯のヨーロッパに関するいろいろな話や批判からすぐわかった。侯は、  
とても多くの旅行をし、ほとんどドイツ全国をまわっている。

12・7・9条

○今日、異例の光栄にあずかった。赤十字の会長および、特に日本の上流婦人のお歴々から、帝国ホテルでの食事に招かれたのである。毛利公夫人、鍋島侯夫人――日本一の美人として名高い女性――、西郷侯夫人、大山侯夫人など。このような日本の上流婦人がヨーロッパ人を招待したのは、おそらく最初のことだろう。

33・8・3条

○夜、アルコ伯爵のもとで、新任イタリア公使ヴィンチ伯爵のため、盛大な宴会があった。(中略) およそ十年の昔、日本一の美人といわれた鍋島侯爵夫人も出席していた。夫人は、赤十字の婦人会長として毎日、朝七時と昼二時の二回、新橋駅へ負傷兵の列車を迎えに行くと、自分に語った。しかもその上、夫人は多数の他の愛国団体に関係しており、家庭では大人数の大世帯を抱えて、正確にこれを切りまわしているのだ。

37・11・16条

(202) ネット――、クルト、(203) 同夫人

○ネット――の葬儀。(中略) 十日朝、悲しみの家族を弔問。未亡人は落ち着いているが、その衝撃たるやたいへんなものだった。死の前日、ネット――はすこぶる元気で、家族とマイン川の氾濫を見に出かけた。夕食の際も上機嫌で、食後に絵を描いている。夜中の三時に夫人と言葉を交わし、それから二人とも眠りについた。三時半、夫人は夫が喉をゴロゴロいわせる音で目ざめた。それからまもなく、ネット――はふたたび意識を取り戻すことなく、妻の腕のなかで息絶えた。彼自身こうしたおだやかな死を望んでいた。また、重い心臓病をわずらっていることを考えれば、突然の死も十分に予測できた。「あの人は私の人生のすべてでした」と夫人は語った。事実、ネット――はまれにみる非のうちどころのない人間だった。(202) 美男子で、愛嬌があり、常に笑顔をやさず、ユーモアにあふれ、

しかも才気煥発。あらゆるスポーツに通じており、すばらしい絵を描き、詩人でもあった。私も、かけがえのない友を失った。

42・2・7条

(204) 乃木將軍・陸軍大将(希典)

○先日、乃木將軍は、新たに出陣する第三軍の指揮を執るため出発するとき、停車場まで見送った野津元帥に、笑顔でいったそうだ  
「どうです、若返ったように見えませんか？どうも白髪が、また黒くなってきたように思うのですが」と。將軍のこの喜びが、早急に曇らされたことは、あまりにもいたましい。

37・6・2条

(205) 野津將軍・元帥(道貫)

○橋本と野津邸へ。左上部に急激な崩潰を伴う乾酪性肺炎を認める。本人は、体格強壯で、まだ良好な筋肉組織を保っている。ダボスならば助かるかもしれない。だがこの東京では、運命に任せるよりほかはなからう。

13・6・23条

(206) ノブ(バイル令孫) ↓ (94) 熊雄(バイル令孫) ↓ (314) リース、ルートヴィヒ帝国大学文科大學史学科教師令嬢

(207) ノールデン(フォン)教授夫人、(208) 同令息、(209) 同令嬢

○終日、コレクションを見たり、街を見物したりして過ごす。夕方、医学会へ。いろいろとおもしろい経験をした。思ったほどユダヤ人の顔を見かけなかった。その後で、フォン・ノールデン教授宅の食事に招かれた。とても気持ちのよい家族だ。夫人はラインラントの生まれで、堂々たる体軀の快活な女性。そして、繊細で礼儀正しい子供たち。一番上の息子は医学部の学生で、みるからに物事をとてもまじめに考えるタイプ。また、絵にかいたように美しくほがらかな娘も医学を学んでおり、前期課程の試験を終えている。

42・3・12条

(210) ハイゼ嬢(オヤス)

○夕方、ハイゼの娘オヤスが訪ねてきた。ほとんど生粋のヨーロッパ人にしか見えぬ、魅力的な娘だ。ことによると、高田のところの若い男と結婚することになるかもしれない。もちろん、そうなれば彼女にとってはたいへん幸せなことだ。

(211) ハインリッヒ親王

○プリンツ・アダルベルト号乗組の候補生として来朝された親王を、在京ドイツ人の名目で精養軒への小宴にご招待しようというのである。親王は十六歳と六ヵ月、長身で、目立って小さい頭、優しい青い眼、快い微笑の持ち主である。顔立ちは、厳密に言えば、ドイツ型というよりはむしろイギリス型のほうだ。態度はすこぶる控えめで、また飾りけがない。そして感じのよいその気質によって、すべての人をひきつけておられる。

(212) ハウス、デイジー

○夜は動物園でガーデン・パーティー。ヴァナー一家といっしょに行く(ヴァナー夫人は病気のため欠席、かわいい姪のデイジー・ハウスが代行)

(213) ハーゲン、B、フランクフルト民族学博物館長・宮廷顧問官夫人

○近くの宿で昼食をとり、徒歩でテンヒエルと二つのラポルツヴァイラー城を通り、ワイン畑の真ん中に位置するラポルツヴァイラーへ向かう。ほぼ全行程をハーゲン夫人と並んで歩く。魅力的で、知性と教養にあふれる女性だ。ご主人についてスマトラまで行ったという体験の持ち主。早くから文筆活動にも手を染めている。

○会議の運営。地域役員をつとめる宮廷顧問官ハーゲンは、魅力的な夫人の助けを借りて、その職務をみごとに果たした。

41・8・4条

(214) 橋本男爵・子爵・軍医総監・宮中顧問官



○橋本はひどく老けた。戦時中の激務と子供たちに関するあれやこれやの心痛がこたえたらしい。優秀な人間だけに、とても残念だ。

41・3・6条

(215) ハナ (ベルツ令室荒井花子)

○ハナ、トク、赤ん坊のウタが待っている、山手のネムブリニ・ゴンザガ方へ。ハナは脚気でまだ少し顔色が悪い。

26・8・21条

○帰って見ると、妻は相変わらずいきいきとして輝くばかり。

34・9・3条

○当初こちらの習慣を身につけるのにとっても苦労したハナも、今ではすっかり馴染んでいる。絶えず快活にしており、近ごろでは

ドイツ語にも進歩がみられる。

39条

○ハナは明るく元気に四五歳の誕生日を迎えた。

42・2・20条

(216) バイル

○少数のドイツ居留民の指導権を握っているのは、バイル氏で、外面的にも内面的にもまれに見る上品な人物ですが、ユダヤ人であるため、氏をけなす連中も少なくはありません。

9・6・26条

(217) バウディッチ、H、博士・生理学教授夫人

○H・バウディッチ博士はハーヴァード・メディカル・スクールの生理学教授。夫人はライプツィヒ出身で旧姓クナウト。夫人とは一三年前に二度、ゴリス運河でいっしょにスケートをしたことがある。そんなに長い時間がたって彼女を訪ねることに、私は氣後れを覚えていた。しかし、私がボストンにいることを知った夫人は、「きっと、うちにお泊まりいただけると信じております」とご主人を通じて伝えてきた。招待を受けたのもう夕方だったので、夫妻の住むボストン郊外五マイルのジャマイカ・プレーンに着いたのは一〇時をまわっていた。こうしてわれわれは、十月の深まる宵に一三年ぶりに旧交をあたためた。彼女は相変わらず愛らしく、快活で、魅力的だ。会って一五分もたつと、まるで何年も前から家族ぐるみのつき合いをしてきたような気分になった。これがほん



○きのう、路上でバルツァー氏とばったり出会った。東京以来の古くからの知人である。今は、新たに開設された植民地局で参事官兼技官として働いている。家族はメランに住んでいる。末の娘がとても病弱なのを心配してのことだが、正確に言えばそれも過去の話で、今ではすっかり元気だとのこと。バルツァーは相変わらず気だてがよく、親切で、誠実な男であり、自分の専門に並々ならぬ情熱を傾けている。

40・5・26条

(224) パウリーネ(ベルツ叔母)

○午後、エリーゼといっしょにビーティヒハイムに叔母のパウリーネを訪ねる。さぞかし体の具合が悪いのではないかと心配していたが、会ってみると、七八という年齢のわりに驚くほど達者で若々しい。姉にあたるミーネ叔母は八二歳の年齢相応に見えるが、やはり矍鑠としており、快活だ。

40・9・9条

(225) パウ・ルン博士夫人

○夜、思いがけぬ人と再会。上海のパウ・ルン博士が会いたがっている、とボーイが伝えてきた。博士は夫人と五人の子供を連れて数日前に当地に着き、すぐ近くのペンション・ミュラーに泊まっている。昔とちっとも変わらぬ、すばらしい人物。上海に新設されたドイツ医学校の理事であり、さらにスタッフを雇い入れる目的もあって来たのだ。かわいらしい子供たち。パウ・ルン夫人はあまり体力がありそうには見えない。

41・1・16条

(226) パジュー→(108) コアット伯爵

(227) パペリール博士

○高取のパペリール博士のもとへ。パペリールは自分の地所で、ひとり娘の教育と造園にいそしんでいる。庭造りのおかげで、昔は病弱で華奢だった優男もすっかり丈夫になったようだ。

41・4・1条

(228) ヒルス嬢→(167) ダンフィー嬢

(229) ヒルデ (ベルツ舎弟ロベルト令嬢、マイアー・マックス令室) ↓ (26) イレーネ (ラインハルト令嬢) ↓ (49) エーベ

ルハルト (ベルツ舎弟ロベルト令息、愛称エボ) ↓ (103) グレーテ (ベルツ舎弟カール令嬢、愛称マルグレーテ)

○昨夜はヒルデと長いこと宗教について語り合った。それぞれ立場は異なるものの、魅力あふれる娘の宗教に対するひたむきで深い  
思いを聞くのは、とてもうれしい。  
40・4・5条

○ヒルデが婚約した。相手は、シュトゥットガルトでも人望があり、おおぜいの娘たちの憧れのままとであった市教区牧師のマイ  
アーである。カロリーネといっしょに教区の夕べの集いに参加したヒルデに、マイアーはひと目惚れしたのだ。それもそのはず。ヒ  
ルデほど繊細で魅力的な、感じのよい娘は、ちょっと考えられない。親しくおつき合い願えないかとマイアーに言われて、予想もし  
ていなかった事態にヒルデはうろたえた。そして「はい」と返事をするまでには長い心の葛藤があったが、今ではもうマイアーに首っ  
ただけである。マイアーは、彼を知るだけからも好かれている。これほど例外なく好意的な評判は聞いたことがない。ただ風貌だけは、  
お世辞にもいただけない。凡庸きわまりない無骨な顔。特に鼻がひどくしゃくれている。おまけに赤みがかった八の字髭のせいで、  
牧師というよりは靴屋のように見える。そんなわけでヒルデの顔とはまるで月とスッポンだ。しかし、容貌上の不利にもかかわらず  
だれからも好かれるということこそ、なかなかの人物である証拠だ。  
40・6条

○ヘルマン、そしてマックス・マイアーとヒルデから手紙が届く。この若夫婦は幸せにあふれんばかりだ。  
41・6・12条

○夜、近い親戚を家に呼び、姉妹とその子供たち、そしてヒルデと彼女の夫にクリスマススの贈り物をした。ほんとうに愉快的な晩で、  
みんなとても上機嫌だった。  
43・12・6条

(230) ヒルデ (ベルツ舎弟ロベルト令息ラインハルト令嬢) ↓ (26) イレーネ (ラインハルト令嬢)

(231) ヒルデブランド医学部教授夫人 (在マールブルク)

○イーゼンフルーの客たち。マールブルクの地質学のカイザー教授。同じくマールブルクの医学部教授ヒルデブランド。夫人は背が

高く、スタイルもよいが、服装の趣味がひどく悪い。そのほか四〇名ほど。

(232) ビスマルク、オットー・德国初代宰相

○一八九〇年の抗争の折りに腹黒く立ちまわった形跡のあるビスマルクに比べれば、皇帝の発言などはお行儀がよい方だ。ビスマルクは全国民に嫌われていた息子ヘルベルトを自分の後継者にしようと、ありとあらゆる手をつくしたのだ。

39・10・10条

(233) 閔丙奭將軍

○夜、旧友ワイペルト京城駐在ドイツ領事の送別に、韓帝の命で催された小宴に招かれた。(中略) 主人役を務めたのは閔泳煥將軍で、すべての外人に声望があり、非常に好意的だと見られている人物である。さらに、その親戚閔丙奭將軍が出席していた。この人は、すぐれた美男だといわれ、その顔は仏さまにたとえられているが、全くそのとおりだ。蒙古人種で、このように美しくて品のある人に出会ったことは滅多にない。四年前、自分はこの人を朝鮮服姿で見たのだが、今日は洋服だった。それで、ほとんど見分けがつかなかったのだが、どちらの服でもよく似合っていた。

36・5・5条

(234) フェ伯爵・駐日意大利国公使

○午前、イタリア公使館を訪問。ウェルニツヒから公使フェ伯を紹介された。伯はヨーロッパ人の中で一番人気がある。そして、それだけの値打ちのある人物だ。赤褐色の濃いひげで囲まれたまんまるい顔に、狩猟用ジャケット、つば広のソフト、深い長ぐつという姿の伯は一見、ドイツの山林官にそっくりである。伯はもと士官で、竜騎兵式の流儀が幾分残っている。伯はあざやかにドイツ語(ウィーンの守備隊時代からのもの)、フランス語、英語をしゃべる。そして伯は、気が気でないほどせかせかしている。この人の身辺いっさいは絶えず活動しており、常に元気一杯で、見たところ話には少しも注意をはらっていないようであるが、実際は優れた記憶力でいっさいをつかんでいる。フェ伯は男やもめで、変わった暮らしをしている。いつも食事に客を招くことがすまだ。そして誰

41・8・23条

でも伯の家では、ただもう気分がよいのである。

(235) フェーリング夫人(在シュトラースブルク)

○フェーリング家を何度か訪ねる。夫人は上機嫌だったが、最後の日は体調を崩した。フェーリングには、二一歳の生さぬ仲の息子がいる。やさしくて、まじめな青年だ。

41・10・20条

(236) フォスベルクIIレスコー博士

○フォスベルクIIレスコー博士は虚栄心が旺盛で、自分の話になると、どんなにつまらない話でも果てしなくしゃべり続ける。

40・11・16条

(237) フラーツ夫人

○すらりと背の高い簿記係のフラーツ夫人

41・2・29条

(238) フリードリヒ・ヴィルヘルム二世(在位一八八八—一九一八)

○自分の見た、ヴィルヘルム皇帝の最近の写真で、皇帝は奇妙な眼差しをしておられたが、これは、内心の臆病と外面の慢心がもつれ合って、精神の均衡を失った人間のもつ眼差しだ。

38・2・11条

(239) フリードリヒ・ヴィルヘルム三世(在位一七九七—一八四〇)

○サンスーシーへ。まずフリードリヒ三世とその王妃が葬られている荘厳な平和教会の建物群を見る。全体の印象は、静謐、荘重、厳粛。しかし靈廟そのもの(なんだったってまた、きまって野蛮な王の死後に靈廟が建てられるのか?)は、あまりいただけない。横たわる皇帝の大理石像はどこか俗物風におさまり返っていて、偉大さや個性の輝き(もちろんフリードリヒ三世は、生涯そうだったものとは無縁だったが)を欠いている。

40・5・27条

(240) フリードリヒ・ヴィルヘルム三世(在位一七九七—一八四〇) 皇子

○ブランケンブルクは寂しく独身を通した。——皇帝フリードリヒ三世の子供で、<sup>(239)</sup><sup>(240)</sup>このブロンドの美男子は皇帝と似ている)、  
フォン・ブランケンブルク家に引きとられた。それで結婚もままならぬのだろうということだ。

(241) フレロース

○瘦せた白髪のイギリス人フレロースが演壇に上がり、興奮のあまりうわずった声でわめきたて、踊り出さんばかりに身をよじり、  
体を震わせながら、同郷の女性を攻撃した。女であり、社会主義者たる者が、制限付きの婦人参政権を擁護するような情けない心根  
を持っているとは、イギリスの恥である。彼女は少数派にすぎず、あのようなふるまいにおよぶ権利さえないのだ、等々。フレロー  
スが全身を震わせ口角泡を飛ばしながら、女性の普通選挙権を実現させることこそ唯一の正しい道であると主張し、万雷の拍手をあ  
びて演説を終えると、採決に移った。

40・8・22条

(242) フーン (フォン) ケルン新聞ベルリン支局長夫人

○夕食はフォン・ムム大使のところ。相客としてフォン・フーン夫妻が招かれていた。ケルン新聞のベルリン支局長であるフーン  
は、どうやら自分はいへんな重要人物だと思っているらしい。フーンの年齢の半分を越えたばかりの夫人は、周囲が眉をひそめる  
ほど、享樂的な性格のようだ。

41・5・6条

(243) ブーグアン、ヴォシェ退役陸軍大尉、(244) 同夫人

○市ガ谷監獄を訪れ、ブーグアン大尉に面会。かれのために、診断書を作ってほしいと、その細君が希望しているのだ。当局はこれ  
を許可した。かれは久しい以前から、本当に肺病なのだが、最近は少し良いよう<sup>(243)</sup>で、<sup>(244)</sup>肥えてもいる。獄中生活がかれの健康上危険で  
あることは、自分も公明正大に証明することができる。かれも細君も、<sup>(243)</sup><sup>(244)</sup>想ったほど消沈したり、興奮したりしていない。細君はこれ  
を、やましくない証拠だとしている。だが自分には、一概にそうだとも思われぬ。かえって、自分はこう考える——そんな縄目をう

ける覚えの全然ない人間なら、非常に憤慨して興奮するか、もしくはひどく憂鬱になるはずであるが、一方、こういうことになるかも知れないと、つねづね予期している人間は、実際にそうなった場合、むしろ自若として取り乱さないだろうと。

38・5・13条

(245) ブラウン、マック・リービー 韓国総務司

○ブラウンは韓国の総務司である。しかし本当は、一種の大蔵大臣であって、かれの存在はこの国にとって全くの天恵である。それというのも、およそこの国が整った財政の一部門——つまり税関だが——を持ち、ここからはいる収入をだらしなく浪費しないでいるのは、全くこの人物の氣力、才能、誠実のお陰であるからだ。かれは、これらの収入を韓帝のむだ遣いに任せないで、燈台制度を設けるのに使用し、仁川への困難な入港を燈火により容易にすることに着手した。ロシア人にとっては、イギリス人であるこの硬骨漢ブラウンは、つねに目の上のこぶであったから、かれらはしばしば全力を尽くして、かれを追いつきと努めた。(中略) 万人にとつてしあわせなことに、ブラウンはいまなお、その職に留まっている。かれは個人としても、興味のある人物だ。というのは、今日ではまれに見る普遍的教養を身につけた人物の一人であるからで、このような人物が所もあろうに仁川のような土地に居るとは、ほとんど想像もつかないほどである。かれは独・仏・伊の各国語を話し、しかも優れたシナ通である。あの歳で——もう七十に近いはずだが——まだ元氣一杯で、疲れることを知らない。

36・4・27条

(246) ブランケンブルク (フォン) 中將

○夜、グリースルボーツェンに住むフォン・ブランケンブルク中將が訪れ、夕食をとみにした。ブランケンブルクは相変わらず、ユーモアあふれる陽気な社交家だ。これほど活発な精神の持ち主が、長い間こんなところで辛抱していられるとは！

43・2・5条

(247) ブリンクリー、イネ、(248) 同ヒデ

○ヒデ・ブリンクリー——を訪問。彼女は音楽を学ぶために四年前からこちらに来ている。日本へ帰りたいという気持ちはまったくなくようだ。すっかりドイツに溶け込んでおり、うわべだけのイギリス娘よりもドイツの娘たちの方がずっと好きだと言っている。音楽



と芸術に生きる、ひたむきで魅力的な娘だ。<sup>(248)</sup>遊び好きで愛嬌のある妹のイネとはまるで違う。外国人の若い女が身を飾りたて、おもしろおかしく暮らすことしか考えていない東京では、孤立したような気分になるのではないかとヒデは心配している。私も同感だ。しかしヒデなら父親を教育して、そのドイツ観を少しでもまともなものにすることができるとも思えないという期待はある。なにしろジャパン・メールの編集者であるブリンクリーは、先頭に立って日本の世論やジャーナリズムを反ドイツへと煽っているのだ。

40・6条

(249) ブルクハルト医師、(250) 同夫人

○ブルクハルトが上行結腸ガンで、手術を受けねばならなかったのだ。(中略)腸を大きく切除して、小腸と大腸を吻合しなければならなかった。すべては、この開腹手術の結果いかにかかっている。今日までのところは、まあまああゝの容体。ブルクハルト夫人はこの間ずっと毅然とした態度を崩さなかった。<sup>(250)</sup>

40・2・12条

○ブルクハルトが死んだ。(中略)最期の日、意識は朦朧としていたが、苦痛もなく、安らかだった。私は大きなものを、とてつもなく大きなものを失った。ブルクハルトは心の友であり、彼も私をそう見ていた。死の前日、夫人が「あなた、ベルツよ、わかる？」と話しかけると、ブルクハルトはじっと私を見つめて満面に至福の笑みを浮かべたのだ！夫人は毅然とした態度をとり続けた。彼女ならあとになって泣き崩れることもないだろうと、私は確信する。

40・3・29条

(251) プフェッテン (フォン) 嬢

○カロリーネ、ハナとともにブルクハルト家の食事に招かれた。オッテンハイマー夫妻とフォン・H・？夫人が同席。夫人は旧姓をフォン・プフェッテン嬢といい、快活な娘時代を送った人。

39・11・15～17条

(252) プレーン博士

○ただちにプレーン博士とウルバン病院へ。プレーンはここで大きな医局を率いている。とても学識ゆたかな人物で、カメルーンでは多くの仕事をしてきた。しかし私の見るところ、助手にも患者にも権威がない。どこか頼りないところがあるのだ。

41・11・27条

(253) ヘーガー、フランチ教授・民族学博物館顧問

○ハノイで開かれたオリエント会議に出席するため、ヘーガーはオーストリアから、私は日本から出向いたのだ。相変わらず愉快な男だが、多少、卒中の気がある。

42・3・6条

(254) ヘッセ (在ロンドン)

○ロンドンのヘッセ氏とわが家で夕食をとる。感じのよい老紳士。

40・4・28条

(255) ヘルフェリヒ (ブルクハルト義兄弟)

○ヘルフェリヒは元気を回復しており、自分の運命といくらか和解しているようだ。

41・12・19条

(256) ベルギール男爵夫人

○コロンボからは二組の夫婦が乗ってきた。ワルトハイム夫妻 (夫人はオーストラリア人) とベルギール男爵夫妻。男爵夫人は、化粧の限りをつくし、これみよがしにダイヤモンドをぶら下げた派手な美人である。そして忘れられないのが、小さな愛くるしいジェルメーヌ・マルタン (五歳)。フランス人の女の子で、両親は神戸に住んでいる。横浜へ行くという二人の婦人に母親代わりに面倒をみてもらっていた。一人は感じの悪いマルタン嬢。

41・3・4条

(257) ベルボラニ伯爵・駐日意大利国公使夫人

○夫人は庭園に出ている、ジンチョウゲの香をかいだのだが、あとで鼻の中がいささかむずがゆくなった。そこで思ったらしい。虫が嗅覚器官の中へもぐり込んだのだろうか。これが、夫人の考えでは、脳の中まで侵入するかも知れないというのだ。夫人は、そん

なことがあり得ないということ、単に自分の口から聞きたかったにすぎない。自分は、若い女の気まぐれから夜分ここまで駆けつけねばならなかったことに、危うくかっとなるところだった。しかし、わずか二十歳になるかならぬかで、五十歳のイタリア公使の夫人である、このようなあでやかな女性に対して、誰が腹を立てられよう？――

(258) ページェット、ラルフ駐バイエルン兼ヴュルテンベルク英国公使

○東京時代からの友人であるラルフ・ページェットが、ミュンヘン兼シュトゥットガルト駐在のイギリス公使となった。彼は今日、国王に謁見するためにこちらへ来て、わが家を訪れた。十年ぶりの再会である。その間にページェットはグアテマラの公使をつとめ、それから六年以上もシャムにいた。(中略)昔から変わらぬ愛すべき人物だが、やはり熱帯地方の暮らしがこたえたのが顔に出ている。

42・6・14条

(259) ペーターゼン近衛少尉↓(12) アルコ伯爵(在日德国大使館)

(260) ペチャックアウシツヒ炭鉱所有者

○ヘルマンといっしょに、アウシツヒの炭鉱所有者ペチャック氏がわが家を訪ねてきた。ケーニヒスベルクの炭鉱施設を三〇〇万マルクで買った人物である。小柄で、非常に礼儀正しく、とても知性的な男だ。ケラー&ゼーネ銀行をはじめ、シュトゥットガルトの企業家の多くが保守的であることに、ひどく驚いている。そして、ヘルマンが長年こうした狭量な連中を相手に仕事をせざるをえなかったことを気の毒がる。

39・7・17条

(261) 波斯国前宰相(アタバケ・アザム)

○英国公使館の午餐会で、ペルシャ前宰相に会う。目下令息、秘書と共に、当地に滞在中である。実はメッカ訪問の旅の途中ですが――と、この愛想のよい老人は自分に語った。

37・1・4条

(262) ペルニッツ船長

○今日、船客名簿が配られた。船はほとんど満員である。数名の日本からの近しい知人、ドイツ人、イギリス人、アメリカ人、オランダ人、そして若干のロシア人。このロシア人の中で、特に自分の興味をひいたのは、ドイツ系でリガ出身のペルニッツ船長である。かれは長身で、純粹の北歐型の男だが、久しくリガの有名な海難救助会社に勤めていた。

(263) 細川侯(護久) 令息

○今日は華族会館クラウンの盛大なポロ(打球)の催しがある。会員は日本古式の服装で日本式のくりに乗っているものもあれば、競馬騎手ジョッキの服で洋式のくりに乗っているものもある。(中略)その態度と技能ですっかりひきつけられたのは、やっと十五歳になる細川侯の令息で、五時間にわたる競技中、大人の誰にも劣るところはなかった。終了後、(中略)その活躍振りで先刻われわれを驚嘆させた少年が、あまりにもかよわい子供であるのを見て、びっくりした。

(264) 細原ハナ

○私はハインリヒ・フォン・シーボルトに代わって、細原はなを訪ねる。なかなか元気そうだ。まだ秋葉神社の閑静な住まいにいる。

41・4・1条

(265) ボアス通信員↓(153) 田中子爵・宮相(光頭)、(154) 同夫人

(266) ボラール博士夫人

○ボラール夫人はすぐれた画家で、魅力的な女性。

43・3・23条

(267) マイアー、マックス市教区牧師↓(229) ヒルデ(ベルツ舎弟ロベルト令嬢、マイアー、マックス令室)

(268) マイエット、パウル東京医学校教師・大蔵農商務両省顧問、(269) 同夫人

○教師のマイエット氏(268)(まだ若くて、さまざまの理想と国民経済の革新制度とでいっぱいになった頭腦の持ち主です)

○夜はマイエツト家へ。長い間遠く離れて暮らしていたにもかかわらず、今でも昔からのかけがえのない仲間だ。現在マイエツトは帝国保険局に勤め、大規模な改革案に取り組んでいる。マイエツト夫人は、<sup>(269)</sup>すっかり白くなってはいるが相変わらず剛そうな髪を短く詰め、たっぷりとした絹の服で肥満体型を隠していた。

39・5・23条

(270) マカロフ旅順司令長官→(14) アレキシエフ極東総督

(271) マクドナルド、クロード駐日英国公使・大使

○今日、英国公使は平素に似ず、すこぶる興奮のていに見受けられた。従来公使は、実のところ、戦争になるとは思っていなかったのだが、ここ数日來の情勢は、公使に安閑たるを許さなくなったのである。

36・9・30条

○イギリス大使クロード・マクドナルド卿は老けて、肉が落ちたようだ。

41・3・7条

(272) 松方伯爵・首相(正義) 令息

○トーマス・グローヴァーのもとで午餐。(中略)大阪の船会社の重役で、快活な愛想のよい人物である神戸の松方がおった。かれは、そもそも日本で名門の子弟(かれの父は、有名な政治家の松方伯である。)が実業界に身を投じた皮切りである。

37・10・29条

(273) 松田東京府知事(道之)、(274) 同夫人

○松田東京府知事死去。かれは胃癌と肝臓癌を病み、一カ月前に自分が初めて診察した時は、もはや絶望である旨、その近親や友人に宣告せねばならなかった。<sup>(273)</sup>小柄できゃしゃな体つきの、快活な美男子で一般に好感をもたれ、府知事という面倒な役にはうってつけだった。夫人はこの国で最もインテリな女性の一人だ。夫人は心から夫を愛していたが、あれほどの愛情をその夫に寄せている日本の婦人も珍しい。先日、夫人をみた時は痛ましかった。<sup>(274)</sup>苦悩にうちひしがれんばかりの有様で、眼には一杯の涙をうかべていたが、なおかつ取り乱さないで、品位を保つことを忘れなかった。それどころか、夫君が見ている間は、涙でその運命を案じさせないために、<sup>(274)</sup>微笑をすらすらたえていたのである！

15・7・6条

(275) マリア(ベルツ舎弟ロベルト令室) ↓ (49) エーベルハルト(ベルツ舎弟ロベルト令息、愛称エボ) ↓ (330) ロベルト(ベルツ舎弟)

○カロリーネはこのところ具合がよくない。もう一年にもなる。そこへ最近の一連の出来事(ヒルデの婚約と、その件でマリアが不機嫌になったこと)による精神的な興奮が追い打ちをかけ、いっそう参ってしまった。 40・6条

○ロベルトとマリアが療養のため滞在しているグンデルスハイム近くのホルネグ・サナトリウムへ行った。腎臓に刺激性の炎症のあるロベルトはすっかり痩せ衰えており、もっと太る必要がある。一方、マリアはもう少し減量しなければならない。 42・11・11条

○マリアはいつものように元気だ。ラインハルトと夫人のエミリーも変わりはない。 43・6・20条

(276) マルタ(ベルツ舎弟ヘルマン令嬢)

○きのうと今日、姪のマルタといっしょに過ごした。両親は娘の健康を気遣っているが、いらぬ心配というもの。マルタはいたって元気で、潑刺としている。 40・5・24条

(277) マルタン嬢 ↓ (256) ベルギール男爵夫人

(278) マルタン、ジェルメーヌ ↓ (256) ベルギール男爵夫人

(279) マレガリ駐日意大利国公使、(280) 同夫人

○夜、イタリアのマレガリ公使のもとで晩餐会。公使夫妻は愛想のよい人で、<sup>(279)(280)</sup>いづれもドイツ語を話す。 37・3・24条

(281) マンロー、ネール・ゴードン博士・横浜ゼネラル病院医師・考古学者

○いっしょに古墳群を見に行ったマンロー博士は長く印象に残る好人物。名前からすぐわかるように「生粋のスコットランド人」である。がっしりした体格に、上品というわけではないが愛嬌のある顔だち。とはいえ、あくまで男性的だ。隠しだてのない誠実そうな目。善良で信頼に足る男がここにいると感じさせる率直な人柄。そのうえ大の理想主義者であり、驚くほどの博識と幅広い教養を

身につけている。

41・4・1条

(282) ミーネ(ベルツ叔母) ↓ (224) パウリーネ(ベルツ叔母)

(283) ミュテール僧正

○ミュテール僧正は、極東にいるすべてのカトリックの坊さんと同様に立派なひげを蓄えた、上品で親切な教会主だが、まるで王様のようにこの城に君臨している。僧正はこのほか愛想よく迎えてくれて、自分を保母たちのところへ案内し、のみならず検査の時には、親しく手伝ってさえくれた。

36・4・28条

(284) ミュラー博士(在ルートヴィヒスハーフェン)

○ルートヴィヒスハーフェンのミュラー博士は小太りの、とても陽気な愛すべき男。

45・4・24条

(285) ミントー加拿大國総督夫人、(286) 同令嬢

○夜、英國公使のもとで、カナダのミントー総督夫人とその美しい二人の令嬢と共に内輪の宴。夫人の一行は日本経由の旅行中である。まったく上品なこの人達の、落ち着いた、申し分のない挙動を見れば、われわれドイツの上流社交界でも、こんな態度が普通であればよいのにと、誰もが希望することだろう。

36・10・4条

(287) メーズウエ北鎮雲山鉦山支配人、(288) 同夫人

○北鎮では、支配人のメーズウエ夫妻にすこぶる愛想よく迎えられ、その家に客として招かれた。

36・6・8条

○メーズウエは世間の荒浪にもみぬかれたような様子の、やせた、四十がらみの人物だが、見かけによらず、すこぶるねばり強く、鉄の意志の持ち主だ。

36・6・10条

(289) メッツ

○ヴァナー家には、カイロからドイツに保養にきたメッツがいた。六二歳という歳の割に、その力にあやかりたいと思うほど元気そ

うだ。白髪もほとんどない。こうした様子からもエジプトの気候がうかがえる。

43・8・13条

(290) メルク博士・医師 (在ダラムシュタット)

42・2・7条

○ダラムシュタットに住んでいる無愛想な甥 (医者) メルク博士。

(291) メルテンス夫人 (前横浜総領事ツァッペ令嬢) ↓ (172) ツァッペ元横浜総領事夫人

(292) メルヒオール、アルベルト (ベルツ従兄弟) 上院議員

○いとこのアルベルト・メルヒオールが卒中のため六九歳で急死した。アルベルトは年齢の割に驚くほど若く快活に見えた。私はシュトゥットガルトから出てくる前に、「アルベルト、君は永遠の若さを保つ処方箋を持っているようだな！」と言ってやったものだ。そのアルベルトが逝ってしまうなんて。重い病気に苦しむ私がまだ生きているのに。

2・3・13条

(293) 毛利公 (元昭) 夫人、(294) 同令嬢、(295) 同先公 (敬親) 未亡人

○今日、毛利公 (長州の前領主) の家庭で、先公未亡人の「床上げ」 (全快祝い) という非常に興味のあるお祝いに列席した。七十五歳になる才色兼備で名高いこの未亡人は、<sup>(296)</sup> 昨年の暮、中風・眼炎その他の病気に<sup>(296)</sup> かった。予後を比較的に診断したのは自分ひとりだった。幸いにも、それが正しかったので、自分はこの家では人気がある。日本では、床 (フトン) を上げる時、すなわち病人がもはや床に就いている必要がなくなった時、知人を招いて盛大なお祝いをする。今の場合もそれなのであった。 (中略) 全部日本式。部屋の西側にある床の間 (壁のくぼんだ場所にある祭壇) の前に公がすわり、その右に病気のなおった公の母堂、左に公の<sup>(298)</sup> きれいな夫人。母堂の右側には、<sup>(294)</sup> 明るい顔付きの、七十歳以上でまだとても陽気な婦人。公の夫人の左側には、近親の若い婦人三名、その次がこの家の未婚の令嬢で典型的な満鮮系だが、大きくて丈夫な体格に、くぼんだ細い利発な眼をした十八歳の娘さんである。男子はすべて、これらの婦人の向い側にすわっていた。 (中略) <sup>(293)</sup> <sup>(294)</sup> 上品な公の夫人や令嬢が、ゆかしい日本の風習に従って客の間を<sup>(293)</sup> 行き来



し、親しく酒をすすめるのを見て、気の毒に思った。その折に自分は、十八歳の毛利公令嬢と大いに快談したが、令嬢の率直で明朗、快活な人柄は、多くの上流日本婦人のやや形式に流れ過ぎた、堅苦しい礼儀作法ばりの態度と好対照だった。

(296) モーザー夫人(旧姓フォン・ズルツァー・マルト)

○ズルツァー・マルト男爵家のモーザー夫人に昼食をご馳走になった。年配の、快活で大金持ちのスイス女性だ。大方のスイス人の例にもれず称号狂いだが、それを除けば、まことに好人物である。

(297) モーザー↓(124) シック

(298) モラヴァツ(フォン) 夫人(在ヴィーン)

○ヴィーンのフォン・モラヴァツ夫人が交易地理協会でダルマチアについて講演した。小意気で、潑刺とした、話のうまい女性である。モラヴァツはたくさん写真を解説しながら、夢中になって話をした。

(299) モール夫人式部官

○皇后お付きの女官たちの中に式部官として当地の在留する同国人フォン・モール夫人の上品な姿を認めた。

(300) モンテリウス、G・オスカー考古学者

○今夜の主賓であるスウェーデンの大考古学者モンテリウス。彼は明日、北方の先史時代および原始時代について講演することになっている。——美丈夫で鳴るスウェーデン人のなかでもひとときわ美形で、その品格のあるたくましさは群を抜いている。ウィットとユーモアに富み、女性たちみんなの憧れの的であった。

(301) 山口 箱根富士屋ホテル経営者(仙之助) 令息

○機械技師である山口家の息子は心臓病ということでアメリカから送り帰されているが、今ではまったく健康だ。

(302) 山口箱根富士屋ホテル経営者(仙之助) 令嬢オコ

○四月三十日から五月五日まで、宮の下の富士屋に滞在した。三年ぶりの再会に、山口家の人々はみんな心から喜んでくれた。かわいい娘のオコは、もう結婚していた。相手は日光のホテル所有者の息子、金谷ジュニアで、気だてのよい男だ。 41・4・29条

(303) 山階宮(菊麿王) ↓ (18) 伊藤参議・伯爵・侯爵・公爵・首相(博文)

(304) 山田伯爵・司法相(顕義)

○午後、山田伯の全快祝いに出席。伯は重い肺壞疽から、驚くほど見事に回復した。以前よりも血色がよく、肥えており、自身ではすっかり健康だと思っているが、もちろん、まだそうまではなっていない。伯は今日、芸者入りの盛大な宴を張ったのだが、この宴で自分は花形だった。最後に、出席者は自分を胴上げした。 25・3・25条

(305) 雄大佐・雲山郡長

○メーズウエの家で雲山の郡長雄大佐と、八年間アメリカに居って、英語のとてもうまいその子息に会った。雄は最も進歩的な朝鮮人の一人で、軍服姿ではまるでヨーロッパ人のようだ。 36・6・10条

(306) ラウト医師

○病妄想。昨日、恰幅のいい、見るからに健康そうな紳士の来訪を受け、自分も医者だが、ぜひ診察をお願いしたいと頼まれた。長いことブラジルで医者をしているというその男は、レプラ(ハンセン氏病)にかかっていると思ひ込んでいたのだ。現地のドイツ人医師が顕微鏡検査のために小さな腫瘍を掻き落とす際に感染させられたのであり、処置に用いた器具は、たぶん前にレプラ患者にも使われたものだろうと言ひ張る。 39・7・17条

(307) ライトゲン、カール前東大教授・法学者、(308) 同夫人

○以前東京で長年にわたって隣人だったK・ライトゲンは、現在、ハンブルクで国民経済学の教授をしており、目の玉が飛び出るよ

うな給料(二万五千マルク)をもらっている。輝かしい経歴を誇る、たいへん有能な男だ。しかし外見は悪い方(307)に変わってしまった。以前は繊細で、少しとり澄ましたところのある好青年だったが、今では体裁もかまわぬ白髭の俗物にしか見えない。人あたりのよい夫人だが、どうやら見かけには無頓着のようだ。

41・12・1〜5条

(309) ランケ、J・人類学会事務局長→(37) ヴァルダイア―

(310) ランツ艦長

○今日、横浜海軍病院に、太沽砲台占領のとき負傷したイルチス号の士官を見舞う。勇敢な行動により、皇帝から電報で功労章を授けられたランツ艦長は、傷の工合が非常によく、元気で上機嫌だ。日本人はかれに好意の限りを尽くしている。

33・7・14条

(311) 李駐日清国公使・李鴻章養子(徑方)

○最近、自分を訪れてきた新任の清国公使C・F・李と知り合いになった。かれは自分に、医師と同時に―特に強調したところでは―友人にもなってほしいのだそうだ。かれは、清国の事実上の支配者である李鴻章の養子で、教養の高い堂々たる美丈夫であり、まことに面白い人柄で、英語をよく話す。今日、かれは自分に、秘書の一人が憂鬱症になったので、診てほしいといった。通訳が自分に、精神を診るのにも、胸を診るのと同じような器具を持っていないのかとたずねた。李は、このばかげた質問に大笑いした。自分も、そんな器具があれば―と思った。

24・3・8条

(312) 李容翊

○李容翊は王宮の近くの横町に住んでいる。(中略)かれは、とても頑丈な体格の男である。以前はすこぶる太っていたそうだが、今は重い病気でやせ衰えている。顔は長くて細く、かなり品があり、ほとんどヨーロッパ人みたいだが、これは特に、鼻が高く細く、白髪まじりのひげが顔一面にかなり多いせいだ。手は目立って美しく、細くて白く、全く貴族的な感じがする。かれがかつて苦力(クワリ)で

あったという説を、信ずる気にはなれないくらいだ。

36・6・24条

(313) 利休(千一)令嬢

○巨大な楼門建築「山門」は興味あるもので、また秀吉の横紙破りの振舞いによって有名だ。当寺に居住していた茶道の始祖で巨匠の利休は、この山門の楼上に自己の像を他の諸像と共に安置させた。かれの君主にあたる秀吉は、まだうら若い未亡人で、才色兼備の娘を、利休が妾に差し出そうとしなかったので、不快に思っていた。利休はその娘に、秀吉の召しに応ずるくらいなら、むしろ死を選ぶ方がましだといった。

38・4・26条

(314) リース、ルートヴィヒ帝国大学文科史学科教師令嬢

○高田にハイゼの娘を引き合わせるため、二人を昼食に呼んだ。高田商会の社員で、自分も混血であるシポイとこの娘の結婚に脈ありと踏んでのことだ。高田はこの娘をとても気に入った。こちらの意図を見抜かれないようにするため、私は口実をもうけて、原田テルとその娘ノブ、それにリースの二人の娘も招待した。それにしても魅力的な娘たちが一堂に会したものだ。みんな、しゃれたホテルで食事ができて喜んでいた。

41・5・17条

(315) リニユール神父

○自分は、リニユール神父にあったが、この人はカトリック教の飽くことを知らぬ議論家で、筆を執っては、あるいは異教徒に、あるいは正教派に当り散らしている。ご本人は白髯の好々爺だ。われわれの談話は戦争にも及んだ。リニユール師の見解は、他の大多数のフランス人とは反対で、最後には日本軍が勝つというのだ。

38・2・14条

(316) リヒター外科医(在サンフランシスコ)、(317) 同夫人(後妻)

○リヒターを訪ねる。元氣そうだ。一二年も会っていないなかった。顔中に髭をたくわえたリヒターは心から歓迎してくれた。彼は有名

な外科医で人気も高い。性格の不一致から最初の夫人と別れたあと、アメリカ人と結婚した。この夫人は今ドイツ語を習っている。<sup>△△△△△△△△△△△△△△△△(317)</sup>  
かわいらしい若妻。赤ん坊が一人いる。

(318) 林学教授 (本多静六)

○新任の林学教授にも会ったが、文字どおり「樹の節」のような先生で、ぎこちなく、ごつごつしていて、とてもだらしない服装をし、ぶよぶよした大きい手に慾ばった指輪。この先生が、日本人には自然と礼儀に対する微妙な感覚が全然ないとおっしゃる！  
変わっている！

(319) リングナー—枢密顧問官・薬剤師

○博覧会の発案者で、物心両面の父ともいうべき人物が、枢密顧問官のリングナーだ。組織力に関しては天才的だが、どこかうさん臭い。背が高く、美男子で、容貌はあかぬけている。薬剤師であり、特に特許薬の製造業者でもあるリングナーは、もともと個人的に開催するはずだった博覧会に、世界中の政府や医学会の公式参加をとりつけた。そうして開かれた博覧会は、実にみごとなものになった。

(320) ルクセンブルク、ローザ社会民主主義者

○私の真下のすぐ前の席にローザ・ルクセンブルクが坐っていた。こんなにいやな女はめったに見たことがない。——醜悪にむくんだユダヤ人のやり手婆か、おんな女術めげんといったタイプだ。それはそうと、ルクセンブルクは絵心があるらしい。まわりにいる人間たちを大胆なタッチでスケッチしては時間をつぶしていた。

(321) ルシヤン (フォン)、フェリックス人類学者、(322) 同夫人

○ルシヤンも同じく聡明だが、たいへんな世渡り上手でもある。彼ならばきつとベルリンの民族学と人類学を引っ張ってゆけるだろ

44・8・21条

34・9・7条

40・8・22条

う。ただルシャンは周囲の受けがよくない。<sup>(321)</sup>高慢な人間と見られており、それもある意味では当たっている。夫人も賢く、<sup>(322)</sup>活発で、陽気だ。夫の仕事を大いに助けている。

39・11・27条

(323) レンツ、エルヴィン (ベルツ令妹エリーゼ令息)

○夜、帰宅するとエルヴィン・レンツがいるのにびっくりした。二、三日の予定でパリから来たのだ。アメリカから戻ったところよりも、ずっと元気そうだ。

44・7・30条

(324) ロイシュレ嬢 ↓ (157) ターフェル博士

(325) ロストック横浜德国海軍病院事務長

○横浜のドイツ海軍病院の事務長ロストックは、六年の勤務を終えて帰郷するところだ。<sup>(326)</sup>愉快な恰幅のよい男。

17・8・16条

(326) ローゼン男爵・駐ニューヨーク・駐日俄国公使、<sup>(327)</sup>同夫人 (先妻、ペテルブルク出身)、<sup>(328)</sup>同夫人 (後妻、ミュンヘン出身) ↓ (16) イスヴォルスキー駐日俄国公使夫人

78

○東京で公使館の書記官をしていたローゼン男爵は、現在、ニューヨークのロシア総領事である。頑固な独身主義者で通っていたこの男は、最近、<sup>(327)</sup>愛らしいが、あまり頭はよさそうにないペテルブルクの女性と結婚した。はたして、二人は幸せになれるのだろうか？

17・9・20条

○ローゼン男爵は困難な時局に当面している。しかし幸いにも男爵は、自分にそう断言したように、<sup>(326)</sup>神経が太い。事実、責任の重い活動と、政局がもたらすはずの憂慮とが、<sup>(327)</sup>外面的にはいささかも認められない。男爵は非常に親日的と見られており、事実またそのとおりである。だがその男爵も、今ではやはり日本の主張に腹を立てて、英国が同盟の力を認めることにより日本人の頭を狂わしたものと称している。「われわれは徹頭徹尾平和的で、決して侵略的ではない」と男爵はいった。そこで自分は一言さしはさましてもらっ

たのである。——とにかくロシアは、他国の眼にはすこぶる侵略的に感じられる、満州占領は日本人から大いに侵略的な行動と見られていると。すると男爵は沈黙し、ただ肩をすくめるばかりで、なんだか口の中でつぶやいた。

○ローゼン男爵はロシアの利益代理をオーストリア公使に一任したが、引揚げは金曜日になるらしい。男爵には誰もが、心から同情を寄せている。男爵が真に日本の知己であることは周知だ。二年半の昔、自分が男爵とその夫人にミュンヘンであったとき、夫妻は日本への深い望郷の念を語っていた。東京への再任命に接した時、夫妻はしあわせで、心から悦んでいたが、もちろん、いかなる難局がその前途に横たわっていたかを、知る由もなかった。弁明の余地なき自国の侵害的なやり方を代表すべき使命をば、人もあるうに、男爵が引受けねばならなかったことは、全く気の毒である。日本人を毛ぎらいした前任公使イスヴォルスキーなら、さだめしこんな使命を快しとしたことだろうに。

○午後、ロシア公使館でお別れ。明日、ローゼン男爵夫妻はヨーロッパへ立つ。今一度、旧友にあえて本当にうれしいと、夫妻は懇ろに述べた。自分としては、夫人の故郷であるミュンヘンに、夫妻を訪問する約束をせざるを得なかった。あれほど日本びいきのローゼン男爵も、今では(無理もないことだが)苦り切っている。

(329) ローゼンベルク

○同宿者は、ローゼンベルクという名のドイツ系アメリカ人の若者が二人。どちらもユダヤ人には見えない。

(330) ロベルト(ベルツ舎弟) → (275) マリア(ベルツ舎弟ロベルト令室) → (52) エリーゼ(ベルツ令妹)

○ノイエールへ向かう。ケルンで開催される自然科学者会議に出席する前に、ロベルト、マリア、そして、すでに十二日から当地に滞在しているエリーゼと数日過ごすためだ。三人とも体調がよく、元氣。

○昨夜、ロベルトとマリアは到着するとその足でやってきた。二人とも元氣そうだ。

○ロベルトはガルドーネに行く前にもう二、三週間ほど様子をみるために、きのうホルネグのサナトリウムに着いた。<sup>(330)</sup> 元気で、一時間の散歩ができる。

43・2・5条

○残念なことに、ロベルトは具合があまりよくない。ふたたび発作を起こし、瀉血を受けた。だが、われわれの見たところ、また体力を取り戻し、<sup>(330)</sup> 元気になったようだ。

43・6・3条

○ロベルトは五七歳までしか生きられなかったが、多くのことを為し遂げた。ロンドン在住のドイツ人にとっては友人であり、若い世代には父親のような存在であった。だれもが全幅の信頼を寄せ、けしてそれを裏切ることがなかった。ロンドンのドイツ大使をつとめたベルンシュトルフ伯爵が、かつて私にこう言ったことがある。「弟さんがいなければ、在留ドイツ人は途方に暮れてしまいますよ!」。ロンドンにいるロベルトの息子エーベルハルトとラインハルトは、父親の死に目に会えなかった。しかしおだやかなロベルト<sup>(330)</sup>の死に顔はいささかの歪みもなかったので、亡き骸と対面しても驚くということはなかった。それどころか、堂々とした容貌に長く<sup>(330)</sup>白い髭をたくわえたロベルトは、石棺の蓋に刻まれた中世の誇り高き騎士そのものであった。

45・2・16条

○ロベルトが亡くなった翌日、私は母を連れて遺体の安置されている墓地へ行った。(中略) 最期は苦しむこともなかったので、安らかに眠っているようだった。<sup>(330)</sup> きりりとした顔だちと長く白い髭は、誇り高く男らしい。老いた英雄の像そのものだ。

45・2・19条

### 三

右掲の『ベルツの日乗』(以下、これを『日乗』と略称する。)にみる「風貌・風体記事」を吟味し、検討する前に、本稿末尾付載の同『日乗』所載人名索引に基拠して若干指摘しておかねばならぬことがある。即ち同『日乗』に載録されている人名は、全部で一八二六名(例えば、ウォッシュユバーン三兄弟<sup>(30)</sup>や、カプフ開業医の三名の子息<sup>(74)</sup>と二人の令嬢<sup>(75)</sup>、さらに<sup>(329)</sup>は、先掲の「風貌・風体記事」に上り、そのうち記主たるベルツ自らが直接に面謁ないし面談した者、あるいはそう考えら事例該当者番号である。)に上り、そのうち記主たるベルツ自らが直接に面謁ないし面談した者、あるいはそう考えら



れる者（以下、これを「面謁・面談者」と仮称する。）は、その全載録者数一八二六名の約六五・七％に当たる一二〇〇名を数える。これは、当『日乗』に所見される全ての人名数のうち、三人に二人近くの人物が、実にベルツの「面謁・面談者」であることを示している。こうしたことから、記主がその『日乗』に、如何に多くの人物を登載し、その中に如何に多くの「面謁・面談者」が含まれているかを明らかにしうるのである。而して当面の問題たる「風貌・風体記事」の事例該当者は、全部で三三〇名を数えるので、この三三〇名という員数は、同『日乗』に登載する総員数一八二六名の約一八・一％を占めており、約五・五人に一人が「風貌・風体記事」の事例該当者ということになり、さらに、その「風貌・風体記事」の事例該当者総数三三〇名の、「面謁・面談者」総数一二〇〇名に占める百分比は、二七・五％となるので、実に「面謁・面談者」の四人に一人以上が「風貌・風体記事」の事例該当者ということになる。無論、こうした「風貌・風体記事」の事例該当者の中に、そうした「面謁・面談者」が極めて多く含まれているであろうことは、容易に推察されるところである。事実、そうした「風貌・風体記事」の事例（1）～（330）の該当者三三〇名中、（14）

（47）（82）（93）（116）（117）（143）（162）（178）（204）（223）（232）（238）（239）（240）（313）の一六名を除く三一四名（その百分比は約九五・二％）までが「面謁・面談者」であることが判明する。因に、その三三〇名の性別内訳をみるに、男性は、（2）

- |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| （6）   | （7）   | （9）   | （12）  | （13）  | （14）  | （15）  | （18）  | （19）  | （20）  | （23）  | （27）  | （28）  | （29）  | （30）  | （33）  | （35）  | （37）  | （38）  | （39）  | （40）  |
| （41）  | （43）  | （44）  | （46）  | （49）  | （54）  | （55）  | （57）  | （59）  | （62）  | （64）  | （66）  | （67）  | （69）  | （70）  | （72）  | （73）  | （74）  | （76）  | （78）  | （81）  |
| （82）  | （85）  | （87）  | （88）  | （89）  | （91）  | （92）  | （93）  | （94）  | （95）  | （96）  | （98）  | （99）  | （100） | （104） | （105） | （108） | （110） | （111） | （112） | （113） |
| （115） | （116） | （117） | （118） | （119） | （120） | （122） | （124） | （126） | （129） | （133） | （134） | （135） | （137） | （138） | （139） | （140） | （142） | （143） | （144） | （147） |
| （148） | （151） | （152） | （153） | （155） | （157） | （159） | （161） | （162） | （163） | （165） | （166） | （170） | （173） | （174） | （177） | （178） | （179） | （181） | （182） | （183） |
| （185） | （186） | （187） | （188） | （189） | （190） | （191） | （193） | （196） | （198） | （200） | （201） | （202） | （204） | （205） | （208） | （211） | （214） | （216） | （218） | （219） |

(226) (227) (232) (233) (234) (236) (238) (239) (240) (243) (245) (246) (249) (252) (253) (254) (255) (258) (259) (260) (261)  
 (262) (263) (265) (267) (268) (270) (271) (272) (273) (279) (281) (283) (284) (287) (289) (290) (292) (297) (300) (301) (303)  
 (304) (305) (306) (307) (309) (310) (311) (312) (315) (316) (318) (319) (321) (323) (325) (326) (329) (330) の一八七名  
(その百分比は約五七・〇%)、女性は、自余の一四二名(その百分比は約四三・〇%)となつて、員数の点で、男性の方が女性よりも遙かに上廻つて  
 いることが分かる。これは、記主が面謁ないし面談の機会をより多くもつたのは、女性ではなく男性であつたことに基  
 づくものであり、こうした事実を略々そのまま反映していると解してよからう。さらに、この三三〇名中に記主の家族、  
 あるいは親族の者が (1) (2) (3) (26) (31) (44) (49) (52) (79) (80) (103) (189) (215) (224) (229) (230) (267)  
 (275) (276) (282) (292) (323) (330) の二三名(その百分比は約七・〇%) みられる。これは、記主が己の家族をはじめ親族の者たちと  
 互に交誼を厚くして親愛の情という紐帯で強く結ばれていたことの現われとみることができよう。  
 さて、それは兎も角として、ここで取り分け注意しておきたいのは、某人物の「風貌・風体記事」の事例該当事者総数  
 三三〇名についての各当該記事にあつて、

①、記主が、言語や語学それ自体、もしくはその堪能者・精通者に対して殊更に関心を寄せていたとみられること  
 を示す簡条(先掲「風貌・風体記事」事例中の傍△印付加部分)が見受けられること。

②、記主が、人類・人種・血統・遺伝などといった、いわゆる人類学に深く関わる事柄に対して殊更に関心を寄せて  
 いたとみられることを示す簡条(先掲「風貌・風体記事」事例中の傍○印付加部分)が見受けられること。

の①②双方、あるいは、そのうち孰れか一方の記事を有する人物の存在を指摘しうることである。

先ず、①についてみるに、これは、決して某人物の風貌・風体それ自体を示すものではないが、それに某かの係わり  
 合いをもち、しかも、その某人物の「風貌・風体記事」に伴出し、汎く一般に当該人物の為人の一端を示すものである

ことから、ここに併せて載録し、討究対象の一項目として挙げておいたのである。

さて、この○の具体的な事例は、(4)(7)(10)(20)(63)(70)(105)(151)(152)(192)(198)(199)(200)(215)(219)(234)(245)(279)(280)(303)(311)(317)の二二名にみられ、「風貌・風体記事」の事例該当者総数三三〇名の約六・七%を占めている。なお、この他、事例(305)の記事に、雄大佐・雲山郡長の子息について、「八年間アメリカに居って、英語のとてもうまい」云々とあるのも、そうした事例記事に同類のものといえる。但し、この雄大佐の子息の場合は、風貌・風体それ自体に直接関わる事柄を示す記事がみられぬことから、先掲事例に加えられていないのである。このように○に関わる記事がかなり多く見受けられるのは、例えば、事例(184)の記事に、イギリス公使館での盛大な晩餐会の折、ベルツがスペインのデ・サンチス大佐夫人を食卓に導いた後、自分の傍にいたスペイン婦人、日本人、アメリカ婦人、清国公使、イギリス人、フランス人、そしてドイツ人等に対して「ドイツ・イギリス・フランス・日本の各国語を、ほとんど一気にしゃべった。」とあり、あるいは事例(192)の記事に、駐日ドイツ公使アルコ伯爵の許で盛大な宴会が催された際に、ベルツがイタリアのド・アッダ侯爵夫人を食卓に案内して、同夫人とフランス語で遣り取りした後、「左侧へは日本語を、向かい側へは英語を、そしてその他になおドイツ語をしゃべらねばならない——といった有様でまったく各国語の総ざらえだ。」とあることから察知されるように、記主たるベルツ自身が、その母国語であるドイツ語をはじめとして、他にイギリス・フランス・日本の各国語に精通していて、殊のほか諸国の言語に関心をもち、興味を抱いていたことに因由するものと考えられるのである。

次に、○についてみるに、この○の具体的な事例は、(1)(7)(14)(15)(16)(25)(30)(32)(33)(38)(44)(50)(68)(73)(77)(83)(84)(94)(102)(105)(110)(111)(112)(127)(139)(142)(147)(165)(167)(178)(181)(188)(193)(194)(201)(206)(210)(211)(216)(219)(221)(230)(233)(240)(262)(270)(281)(294)(312)(329)の五〇名にみられ、

「風貌・風体記事」の事例該当者総数三三〇名の約一五・二%を占めている。これにより、この①における百分比の方が、既述の②におけるそれよりも遙かに陵駕している事実を指摘しうる。これは、記主自身が①に関わる事柄もさることながら、それよりもなお一層、②に関わる事柄の方に深い興味と強い関心をもち、常日頃、人と接する際に、その多くの場合において、そうした意識感覚を以て臨んでいたことを諒察せしめるのである。而してこうしたことは、上記五〇名の他になお、例えば、ベルツが韓国は堂峴里からポマイまでの七十五里の道程を踏破した時、「正午、ある村で休止。道路は不潔だが、人々は親切である。無限に多種多様の型の眼、鉦夫の間では、ほとんど全く見かけなかったような斜視の美しい顔立ちが比較的多い。」（『日乗』明治三十六年五月十六日）と記し、あるいは、ベルツがカプルタラ印度大王の招待を受けて帝国ホテルでの宴会に向いた時、大王にお付きの医師の風貌・風体を「純ヨーロッパ人風の顔立ちで、ちょっとイタリア人のようである。」（同『日乗』同年十一月二十六日）と録し、さらにあるいは、事例(207)の記事中に「夕方、医学会へ。いろいろとおもしろい経験をした。思ったほどユダヤ人の顔を見かけなかった。」などとある箇条を随見しうることによっても頷可しうるであろう。さらに言えば、それはまた、記主自身が最も興味と関心を抱いて、その生涯を賭しての追窮課題とした人類学という学問領域の研究に深く係わることもあった、と判釈しうるのである。

#### 四

ベルツは、日本での永年に亘る功績が認められて明治三十八年六月三日に「旭日章の大十字勲章」「旭日大綬章？」を授与されたが、その際に「これは東郷や乃木のような人が、戦に勝って授けられるのと同じ勲章であり、王侯に列しないただの外人が日本で受ける、およそ最高の榮譽ではないか。これによって自分は、日本の国土と国民のため、人生一代に等しい年月のあいだ最善の努力を払った自身の働きが、公けに認められたことを知り、なによりも満足を覚えた。」

（同『日乗』同年同月・日条）とした上で、これまで実践躬行してきた「実地診療の仕事から解放された後にこそ、本当に研究に没頭

することができると思っている。」(上)と記し、さらに故丘の地シュトゥットガルトの家族の許に帰着し、間近に開催が予定されているザルツブルクでの人類学会議を前にして、「なんの妨げもなく自由に、できるだけ早く人種の研究に没頭し、著述に取掛ることができると思えば、今からしてすでにうれしい。それに必要な材料は、あり余るほどもっている。」(同「日乗」同年七月二十二日条)と、今後に懸ける期待と抱負を認めて、自らが専念したいと考えている学問が「人種の研究」であることを鮮明しているのである。こうして彼が己に残されている向後の人生を「人種の研究」に賭していたことを知るのであるが、ここにいう「人種の研究」とは、広義の人類学を研鑽することであり、それは形質人類学、考古学、地質学、民族(俗)学、人種学、医学、地理学、等々といった広範な分野に亘る総合的な学問領域の呼称と解して差し支えなからう。一体に彼がこうした領域の学問に興味と関心を抱いたのは、フェリックス・ショットレンダー著「エルヴィン・フォン・ベルツ―日本に於けるドイツ人医師の生涯と業績」に依れば、来日四年前の一八七二年春、彼が二十三歳の頃比であったという(「ベルツ日本再訪」七一八頁)。爾後、ベルツは、来日八年後の明治十七年の第一回目の賜暇帰国中に、カールスルーエで開催された人類学会において、「東アジアの人種的諸特性について」なる講演を行ない、これが当時のドイツ人類学会長ルドルフ・フィルショーに注目されて高い評価を与えられて以来、ドイツにおいて人類学者としての地位と名声を贏ち得たという(同上書七一九頁)。こうしてベルツは、明治九年の初来日以前より、すでに人類学に興味と関心を抱き、その後の約三十年間に亘る在日期间中も、公職たる東京医学校、改組改称されて東京大学医学部勤務と、日本政府との契約によって容認されていた民間人に対する往診医療活動の他は、その掲げる学問の研鑽に鋭意尽瘁し、また、明治三十八年のドイツへの帰国後も、益々学業を積み重ね、当地における人類学会、熱帯医学会、植民地看護協会、自然科学者会議などでの講演・研究発表に、あるいは諸誌への論文執筆に余念なく、愈々以て斯学の研窮に淬励して多大な成果を上げ得たのであった。こうした経緯を介意するならば、その「日乗」に、記主自らが直接に面謁ないし

面談した人物は固よりのこと、そうしたことのなかった人物についても、その風貌・風体それ自体、あるいはそれに関わる事柄を伝える記事が多見されるのも、決して故なきことではない。何となれば、ベルツ自身が諸多の人々と直接に面謁ないし面談するという宮為を通して得られる諸種様々な人々の風貌・風体についての知見が、彼の人類学研究の有用な一資料として、その研攻をより拡大させ、あるいはより深化させる上において、大いに供用されたと考えられるからである。この意味において、件の「日乗」に多見されるそうした「風貌・風体記事」をば、彼が人類学の研覈に只管勤み励んで、その学問を大成成就せしめたことを雄弁に物語る一証跡と見做しえよう。

最後に、稿を閉じるにあたり、ベルツの人類学を中心とする学業成果の一端を示す講演・研究発表（表示）と、論文等の執筆について、その「日乗」に所見されるもの全てを摘出して掲記しておくこととする。

講演・研究 発表題目	講演・研究 発表年・月・日	講演・研究 発表場所	所載条	備考 (その時の状況や様子、さらには 本人の所感・感想等をも含む。)
「東アジアにおける女性界」	38・5・25	横浜のクラブ	38・5・27条	ドイツ人の希望による。
「東アジアの文化と衛生」	39・12・18	博物館ホール	39条	ヴェルテンベルク国王臨席のもと、 同日同国王より宝冠騎士十字章を 賜り、一代限りの貴族に叙せらる。

<p>「東アジアの先史時代」</p>	<p>39・5・19</p>	<p>ベルリン人類学会</p>	<p>39・5・19条</p>	<p>「とてもおおぜいの参加者がおり、終わりに盛大な拍手を受けた。私の帰国を久しく待ちこがれていた会員にとって、独創性と批判精神の発露をみること疑いなしの私の報告を聞くことは、常に大きな喜びである、とはリサウアー会長の弁。いずれにせよ、成功裏に終わったことは大いに満足してよいのではないだろうか。」</p>
<p>「変形して非対称となった頭蓋骨」</p>	<p>39・9・16 20</p>	<p>シュトゥットガルト</p>	<p>39・9・29条</p>	<p>シュトゥットガルトで開催された第七十八回自然科学者・医学者会議の人類学部会での発表。 同右</p>
<p>「日本人と朝鮮人の類縁関係」</p>	<p>39・9・16 20</p>	<p>シュトゥットガルト</p>	<p>39・9・29条</p>	<p>同自然科学者・医学者全体会議、「非常に多くの参加者が詰めかけ、大喝采を博した。もっとも、医学者、とりわけ大学の医学者たちは心理的な問題をことごとく避けている、と非難したものだから、幾人かの大物のご不満のようだったが。」</p>
<p>「憑依およびこれに類する状態」</p>	<p>39・9・21</p>	<p>シュトゥットガルトの歌唱ホール</p>	<p>39・9・29条</p>	<p>同自然科学者・医学者全体会議、「非常に多くの参加者が詰めかけ、大喝采を博した。もっとも、医学者、とりわけ大学の医学者たちは心理的な問題をことごとく避けている、と非難したものだから、幾人かの大物のご不満のようだったが。」</p>

「東アジアの文化の基礎」	39・11・15	フランクフルト	39・11・15 条	フランクフルト植民地協会、聴衆の関心は低く、主催者の手ぎわも悪い。
「東アジアの文化の基礎」	39・11・16	ホンブルク	39・11・15 条	「きのうとはうって変わって、もののわかった感じのよい聴衆。W・フォン・ビュロー地方裁判所判事、薬剤師ルーディガー博士。はじめて聞くたくさんの興味深い話に思わず引き込まれたと、みんな口々に語ってくれた。」
「日本における天皇の位置について」	39・12・7	ベルリン	39・12・8 条	ドイツアジア協会
「東アジアの家庭生活について」	40・4・20	ウルムのホール	40・4・5 条	植民地看護協会
「日本の洪水熱について」	40・9・17	ドレスデンのフリードリヒ市立病院解剖学講堂	40・9・17 条	熱帯衛生学部会
「朝鮮人およびその他のアジア人」	40・10・21	フランクフルト	40・10・4 条	人類学協会、「大いに好評を博したようだ。」



「インドシナについて」	「日本文化の発展と日本人の国民性について」	「突然の白髪化」 「細菌感染後、とりわけチフス感染後に見られる直毛の縮れ」	「諸国民の生活における魔術、暗示、催眠」
40・10・23	40・11・29	41・8・4?	42・1・22
フランクフルト	ベルリンの軍事アカデミー大講堂	フランクフルト	シュトゥットガルトの王宮大広間
40・10・4条	40・11・16条	41・8・4条	42・1・13条
地理・統計協会、「ここでも、おぜいの出席者に十分満足してもらえたと思う。」	ドイツ・アジア協会、「講堂は立錐の余地もなし。講演後の盛大な拍手からも、また新聞の記事を見ても、私の話が聴衆の旺盛な関心を呼びましたことがわかる。会長のゴルツ將軍は（中略）ある種の性格、とりわけ好戦的な性格が育つためには、人種的な要素よりも社会的影響や教育の方が重要であるという私の見解に賛成してくれたのは、とてもうれしかった。」	人類学会、「人種と環境」という演題を予告しておいたが、東アジアへ旅行していたために準備が間に合わなかった。そこで、かわりに「上記の演題で話した。」	ドイツ植民地看護婦協会、「おおぜいの聴衆（少なくとも一〇〇〇人は下らない）がためかけ、間違はなく喜んでもらえたと思う。」

「東アジアの文化の基礎」	42・2・15	エルバーフェルト	42・2・7条	学術講演協会、「おおぜいの聴衆から盛んな拍手を受ける。」
「東アジアの人種、および他の人種との親近性について」	42・3・11	ヴィーン	42・3・11条	人類学会、「盛んな拍手をあび、学会の名誉会員に推された。」
(演題記述ナシ)	43・1・12	シュトゥットガルト	43・1・12条	交易地理協会
「日本の鉄器時代に属する巨石遺構について」	43・5・3	ベルリン	43・5・3条 13条	先史人類学会
「諸民族の生活における暗示と催眠」	43・11・19	シュトゥットガルトの王宮大広間	43・11・18条	植民地看護婦協会、「巨大なホールは立錐の余地もなく、割れんばかりの拍手を頂戴した。医師たちも旺盛な関心をもったようで、うれしい限りだ。」
「さまざまな国における男女数の比率について」 「東アジアに残存するコーカソイドについて」	44・8・10	シュトゥットガルトのリンデン博物館	44・7・30条	人類学者会議、「両方とも盛大な拍手を受けた。」

「自然老化と死をめぐる諸国民の謬説について」	44・9・25	カールスルーエ	44・8・21条	自然科学者会議および医学者会議の「人類学および民俗学」に関する第十四部会
「西洋と東洋における世界観と文化の違いについて」	44・12・16	シュトゥットガルトの市民図書館広間	44・11・27条	「盛んな拍手を受ける。」
「人類分類についての批判」	1・8・5カ	ヴァイマルの「弩協会」ホール	1・7・31条	人類学会議

「日乗」にみる論文・報告・随想・書評等

岩波文庫本『ベルツの日記』(出二一九頁)掲載諸論文は、ここに掲記していない。

- 「ロイマチス性熱について」 12・9・21条
- 「日本人の身体的特性について」 17・8・16条
- 「東京の加藤総理について」 17・8・16条
- 「継続的な温泉浴について」 17・8・16条
- 「レプラ(ハンセン氏病)について」 17・8・16条
- 「死者の栄誉表彰」 37・11・22条

「日本の先史時代」 39・10・10条

マンロー著『日本の未開文化について』の書評 41・2・3条

「日本人とヨーロッパ人の国際結婚に関するおきまりの愚劣な意見を正す」 ジャパン・メール紙宛ての書簡 41・6・10条

「東アジアの人間の類型について」 41・11・27条

「熱水浴について」 41・11・27条

「伊藤公の個人的な思い出」 42・10・31条

自著『日本人の身体的特性』の補筆 43・2・5条

「朝鮮、その起源と終焉」 43・8・30～9・11条

『ベルツの日乗』 所載人名索引

ア

- アイコ → ○グルート, ヘレン (幼名アイコ)
- アイシン家令息 37.4.12, 37.4.16  
 アイゼルスベルク (フォン) 医師 (在ヴィーン)  
40.2.12,40.2.27,40.3.15,40.10.4,41.1.16
- アイゼンデッヒャー 41.6.21
- アイゼンデッヘル (フォン) 駐日德国代理公使 9.6.26
- アイゼンロール建築家 41.8.23
- アイヒロート兄弟 44.8.21
- アウグスティヌス, アウレリウス初期基督教神学者 41.1.16
- アウグスト (ベルツ従兄弟) 40.10.4,41,41.1.16,41.1.27
- アウグスト (ベルツ従兄弟) 夫人 (マリア) 41,41.1.16
- アウグスト (ベルツ従兄弟) 義父 41.1.16
- アウグスト (ベルツ従兄弟) 義父夫人 41.1.16
- 青木周蔵子爵・駐德国公使・外務次官・外相  
9.1.3,22.3.2,24.5.29,33.4.20, 36.4.27,37.9.26,  
 37.11.12,37.11.20,37.12.4,37.12.15,37.12.19,  
 38.1.22,39.11.29
- 青木周蔵子爵・駐德国公使・外務次官・外相夫人 (エリーザベト) 39.11.29
- 青木周蔵子爵・駐德国公使・外務次官・外相令嬢 (ハナ) 37.11.12,39.11.29
- 青山胤通東京帝大医科大学長 41.4.16
- 赤星 (樺山伯爵義兄弟) 37.11.19  
 秋元子爵 (興朝) 22.5.6
- 秋山軍医 44.8.21  
 秋山『二六新聞』 主筆 (定輔) 37.4.1
- アーサー, チェスター・アラン 美国大統領 17.10
- アスター, ジャン・ジャック 大富豪 45.4.1
- アストン, ウィリアム・ジョージ 駐長崎領事・初代朝鮮総領事 41.6.9

アスパジア	13.3.19
○足立 寛博士 (在浜松開業医)	25.8.28
○足立 寛博士 (在浜松開業医) 夫人	25.8.28
アーチバルド	37.11.5
○アッダ侯爵夫人	37.11.16
アッチラ	38.5.12
○淳宮雍仁・秩父宮 → ○皇子 (淳宮雍仁・秩父宮)	
アッベ, エルンスト光学用ガラス製造業者	45.7.31
○アディケス フランクフルト市長	41.8.4
○アヌーチン シベリア総督令息	17.8.16, 17.9.13, 17.9.15, 17.9.20
○アネタン外交団主席	37.10.28
○アプトン嬢	41.3.4
アマリエ	12.6.29
○荒川	41.3.26
有栖川宮 (熾仁親王)	10.2.26
○有栖川宮 (威仁親王)	33.2.8, 33.3.23, 33.5.9, 34.9.16, 34.10.4, 34.10.5, 38.3.25, 38.3.28, 38.3.29, 38.7.19, 41.3.9, 41.4.1
○有栖川宮 (威仁親王) 妃 (慰子)	33.6.12, 33.6.14, 34.9.16, 38.3.25, 38.3.29, 38.7.19, 41.3.17, 41.4.1
○有栖川宮 (裁仁王)	41.3.9, 41.3.21, 41.3.22, 41.4.1
○有栖川宮女王 (実枝子)	41.3.9
アリストテレス	34.11.22
アルキメデス	34.11.22
○アルコ=ヴァレー (フォン), ルートヴィヒ → ○ヴァレー, ルートヴィヒ伯爵・駐日徳 国公使	
○アルコ伯爵 (在日徳国大使館)	41.3.25
○アルトシュール	17.8.16
○アルトヘル=ジモント夫人 宿屋主人	42.6.21
○アルマン駐日法国公使	28.11.18, 37.2.5, 37.2.23, 37.12.19, 38.1.11
アレキシェフ極東総督	36.9.30, 37.1.6, 37.2.5, 37.2.10, 37.2.11, 37.2.13,

	37.2.19,37.2.27,37.4.24,37.5.7,37.5.10,37.7.20,
	37.9.29,37.10.3
アレクサンダー王子 (ヴェルテンベルク)	43.5.3~13
アレクサンデル公	37.1.19
アレクサンドル二世俄国皇帝	13.2.23,41.7.8
アレクサンドル三世俄国皇帝	24.5.18
アレクサンドル三世俄国皇后 (マリア・フョードロブナ)	24.5.18,38.1.25
アレクサンドル三世俄国皇太子 → ニコラス二世俄国皇太子・皇帝	
○アレン駐韓美国公使	36.4.30
○アレン駐韓美国公使夫人	36.4.30
アーレンス	9.11.30
阿波侯爵 (蜂須賀茂韶)	12.7.12
アンジェリーナ	17.9.12
安重根 伊藤博文暗殺者	42.10.29
安藤広重	37.8.22
アントニオ写真師	35.12.30
○アンドリアン (フォン)	40.6
○アンドレー教授	40.6,41.8.4,43.7.19
○アンドレー教授夫人	43.7.19
○アントン,カルル親王	37.9.26,37.9.27,37.10.9,38.4.28,40.11.16
アンナ	40.6
アンブロシウス	41.1.16
イ	
井伊掃部頭 (直弼)	35.4.12,41.4.12
○飯塚アリス嬢	38.1.22
イヴァン四世	41.7.7
イヴァン四世王子	41.7.7
○イエーガー船長	41.1.22
イエス・キリスト	41.7.9,43.10.3,44.3.30

家康（徳川一）	38.4.26
イェルマク	41.7.9
イーガン通信員	37.7.3
イギリス王 → エドワード七世英国皇帝	
○池田男爵・医学部長（謙斎）	10.5.14,10.10.5,14.6.21,33.5.26,35.4.2,41.5.20
イサベラ女王	17.9.15
石井（房州勝山魚屋）	35.3.1
○石川教授・帝国大学農科大学教授（千代松）	41.6.21,41.6.23,41.6.24,41.7.5,41.7.7,41.7.8, 41.7.9
○石黒男爵・軍医監（忠憲）	35.4.2,38.5.30,38.6.7,41.6.6
○石原	44.8.21
○石本将軍・陸軍次官（新六）	37.3.24, 37.6.7, 37.11.29
○イスヴォルスキー駐日俄国公使	33.6.6,34.10.28,35.1.1,35.1.30,36.2.1,37.2.7
○イスヴォルスキー駐日俄国公使夫人	33.6.6,36.2.1
イゼット・パシャ土耳其国国防大臣	2.1.24
○板垣元参議・自由党総理（退助）	15.10.12
○一井（上州草津有力者）	37.9.22
○市川医師	40.11.1
○一条親王	41.5.20
○一条親王妃	41.5.18
イタリア王（ウンベルト一世）	33.8.1
○伊藤参議・伯爵・侯爵・公爵・首相（博文）	16,22.4.15,22.10.18,22.10.27,24.5.18,24.6.2, 33.2.8,33.3.23,33.5.9,33.5.26,33.6.6,33.8.15, 34.9.8, 34.9.15,35,2.17,35.2.21,36.9.20,36.10.12, 36.12.12,37.1.1,37.2.5,37.2.13,37.3.6,37.3.16, 37.3.18,37.4.6,37.9.27,37.10.13,37.11.19,37.12.8, 37.12.17,38.1.25,38.2.5,38.3.17,38.6.9,40.11.15, 41.2.18,41.3.26,42.10.29,42.10.31,42.11.11,



	42.12.31
○伊藤参議・伯爵・侯爵・公爵・首相（博文）令尊（十蔵）	25.8.28
○伊藤参議・伯爵・侯爵・公爵・首相（博文）令母（琴子）	36.10.12
○伊藤勇吉（博文養嗣子・博邦）	37.6.27
○伊東提督（祐亨）	34.10.28,38.1.5,38.6.5,41.4.14
○伊東巳代治男爵	37.1.19
○井上伯爵・侯爵・大蔵大輔・外務卿（馨）	
	12.11.3,14.5.19,16,22.6.25,22.10.18,22.10.27, 24.6.6,25.3.12,33.5.26,33.8.15,34.9.8,34.9.16, 35.4.2,37.2.5,37.2.13,37.5.27,37.12.8,40.11.15, 41.5.8,41.10.3
井上伯爵・侯爵・大蔵大輔・外務卿（馨）令嬢	14.5.19
○井上勝之助駐德国大使・外相	39.5.17,39.11.29,39.12.8,40.5.10,40.5.28, 41.3.26,41.5.8,41.12.13
○井上勝之助駐德国大使・外相夫人（末子）	
	39.5.17,39.11.29,39.12.8,40.5.24,40.5.26,41.12.13
○井上子爵・文相（毅）	26.11.27,27.3.19,38.3.17
○井上子爵・文相（毅）未亡人（鶴子）	38.3.17
井上子爵・文相（毅）令嬢	38.3.17
○井上角五郎代議士	33.6.5
イブセン,ヘンリック劇作家	39.11.29
○入沢達吉教授	38.2.7
○イリス	37.11.6,38.4.13,38.4.15
○イリス夫人	37.11.6,38.4.15
○イルゼ（ネットー令嬢）	39.5.15,42.2.7
イルチェスター侯爵 オランダ・ハウス所有者夫人	43.7
○イレーネ（ラインハルト令嬢）	43.6.20
○岩倉公爵・右大臣（具視）	16
○岩倉公爵・右大臣（具視）令息	16
○岩倉公爵・右大臣（具視）令息(具定)	38.3.28, 41.5.19

○岩佐 純男爵・侍医	13.3.19,41.5.20
○岩崎男爵 (久弥)	37.10.29,38.3.11
岩崎男爵 (久弥) 令尊 (弥太郎)	37.10.29
イワン雷帝 → イヴァン四世	
イワン雷帝王子 → イヴァン四世王子	
○インガルト (ヒルデ令息)	42.2.21
インゲノール艦長	35.4.18
麿昌陸軍大臣	44.8.21
ウ	
ウィッテ	38.2.4
ウィットゲフト提督・旅順艦隊指令長官	37.8.14
ウィットボーイ,ヘンドリック	37.10.23
ウィリアム王	9.6.9
ウィルキンズ	17.8.16
○ウィルキンソン雲南・貴州英国総領事	41.6.26
○ウィルソン,ハンチントン美国公使館一等書記官	37.8.2,37.10.31
○ウェスト博士	17.9.28
ウェーデル伯爵・駐日德国公使	33.6.6,33.7.14
ウェーデル伯爵・駐日德国公使令息	38.3.10
ウェーベル駐韓俄国公使	36.4.27,36.6.24,36.7.4,36.9.18
ウェーベル駐韓俄国公使夫人	36.4.27
○ウェルニツヒ,アガートン博士	9.6.9,9.11.15,9.11.25
ウェルプ船長	17.9.20
ウェルプ船長夫人	17.9.20
○ウォッシュバーン三兄弟	17.9.13
ウォルター	36.5.12
○ウォルター,ジェームス	41.3.30
○ウォルフスケール伯爵	37.7.18
○ウォレンD.	17.9.28

ウジファルヴィ	43.10.3
○ウスイ博士・江田島病院長	41.3.9
○ウタ (ベルツ令嬢)	26.8.17,26.8.21,26.12.24,26.12.25,26.12.29, 27.7.25,27.9.8,28.8.23,28.12.24,29.2.28, 29.3.1,29.3.2,42.4.13
ウチトムスキー公爵	37.7.3
○内山	45.5.26
ウーデ (フォン),フリッツ画家	41.7.9
ウラジミル大公	37.10.1
○ウラッハ (フォン),カール公爵・交易地理協会会長	40.2.27,44.2.15,44.3.15,44.5.27~29,44.6.2, 44.6.6,45.5.26
○ウラッハ (フォン),カール公爵・交易地理協会会長夫人	44.3.15,44.5.27~29,44.6.6,45.5.26
ウルズリー,ヨセフ卿・元帥	37.9.19
ウルム・エルバッハ (フォン) 夫人 → シーボルト (フォン),アレクサンダー・ゲ オルク夫人	
○ウンガーアルフレート園芸技師	37.7.15,37.11.15,41.6.21,41.10.20,44.3.19
○ウンガーアルフレート園芸技師夫人	41.10.20
○ヴァイグレ	42.11.11,43.1.12,43.2.5
○ヴァイペルト,ハナ	43.7.19
○ヴァーグナー (在カールスルーエ)	44.5.27~29
○ヴァーグナー (在ゲッティンゲン)	44.5.27~29
○ヴァーグナー博士 (在シュトゥットガルト)	42.3.6,43.1.24,44.3.20
○ヴァーグナー博士夫人 (在シュトゥットガルト)	43.1.24,44.3.20
○ヴァーグナー=ホーエンロールベーゼ博士	40.9.18
ヴァーグナー,リヒャルト → ワーグナー,リヒャルト作曲家	
○ヴァナーTh・G.	41.8.23,43.7.19,43.8.13,43.10.15,43.11.21, 43.11.24,44.5.27~29
○ヴァナーTh・G.夫人	41.8.23,43.7.19,43.8.13

ヴァナー兄弟	41.8.23
○ヴァルター (ベルツ舎弟ヘルマン令息)	
	39.5.15,39.5.18,40.9.6,40.9.9,40.11.16,41.12.6, 41.12.13,42.3.26,42.4.9,42.4.13,42.9.14, 43.5.3~13,43.9.29,43.10.3,43.10.15,44.2.25, 44.4.18,44.6~7,44.11.17,44.12.27,45.3.2, 45.5.25,45.5.31,1.9.20
○ヴァルター令母	44.6~7
○ヴァルダイアー	41.8.4,43.7.19
ヴァルデルゼー将軍	33.8.20
○ヴァルデンプルク博士 (在ベルリン)	43.7.19
○ヴァルトハウゼン (フォン) 阿根廷国公使	39.5.19,39.5.22
○ヴァレー, ルートヴィヒ伯爵・駐日德国公使	
	34.9.7,34.12.14,35.5.2,36.1.27,36.2.1,36.12.17, 37.1.6,37.1.19,37.1.27,37.2.5,37.5.21,37.6.7, 37.7.10,37.7.18,37.9.4,37.9.5,37.9.23,37.10.1, 37.11.6,37.11.16,37.12.8,37.12.15,38.1.6,38.1.27, 38.2.16,38.2.26,38.2.28,38.3.4,38.3.12,38.3.19, 38.3.25,38.3.29,38.5.28,38.6.1,38.6.5,38.6.7, 39.5.17,39.5.19,39.5.22,39.7.17,42.10.16
ヴァレンティン (フォン), フィンドリヒ画家	17.10.8
ヴィクトリア女王	44.4.18
○ヴィーダースハイム	39.7.17,43.11.24
○ヴィーダースハイム夫人	43.11.24
○ヴィーダースハイム令息 植物学者	43.11.24
○ヴィベキルク陸軍中尉・植民地看護協会会長	40.4.5
○ヴィリバルト (ネッター令息)	42.2.7
○ヴィルザー	41.8.4
○ヴィルトゥ博士 (在ミュンヘン)	42.11.11
ヴィルヘルム一世 → フリードリヒ・ヴィルヘルム一世	

ヴィルヘルム二世 → フリードリヒ・ヴィルヘルム二世	
○ヴィルヘルム二世 (ヴェルテンベルク国王)	38.2.26,39,40.2.27,40.4.2,42.3.16,42.6.14, 43.1.14~21,43.4.15,43.12.3,44.3.29,44.5.27~29
○ヴィルヘルム二世 (ヴェルテンベルク国王) 王妃 (シャルロッテ)	42.3.16,43.1.14~21,43.4.15,44.3.29
ヴィンターハルター,フランツ・クサヴァール画家	17.10.8
○ヴィンチ伯爵・駐日意大利国公使	37.11.16
○ヴェーゲナーG.	43.2.5,43.10.15
○ヴェッキ博士 → ○デ・ヴェッキ博士	
ヴェーバー画家	45.4.1
ヴェーバー画家夫人	45.4.1
○ヴェルター (在カールスルーエ)	44.2.3
○ヴェルター嬢 (在カールスルーエ)	44.2.3
○ヴェルター検事	44.2.11
○ヴェルター検事夫人	44.2.11
○ヴェルナー (ベルツ舎弟カール令息)	43.4.10,2.4.25
○ヴェルナー軍医大尉	40.9.17
○ヴェレシチャーギン,ヴァシーリー画家	41.7.5,41.7.7,41.7.9
ヴェロネーゼ,パオロ画家	17.9.15
○ヴェンデル博士	43.8.29
○ヴォイレ博士	40.9.19,44.5.27~29,44.11.27,1.11.1,1.11.2
○ヴォイレ博士夫人	1.11.2
○ヴォティエ	41.6.6
○ヴォティエ夫人	41.6.6
○ヴォラー大尉	42.10.25
○ヴォラー大尉夫人	42.10.25
ヴォルフ,フーゴ作曲家	43.11.24
○ヴォルムザー外科医	17.8.16
○ヴグニー	37.6.18

- グюнシュ,リヒャルト博士・韓国宮廷医 36.4.27,36.5.1,36.5.9,36.6.24,37.3.8,  
38.3.2,40.5.4,41.3.6,41.3.19,41.6.6
- グюнシュ,リヒャルト博士・韓国宮廷医夫人 41.6.6

エ

- エアハルト,H.(在ロンドン) 39.10~11,40.11.16,43.6.20,43.7
- エアハルト 43.1.24
- エアハルト夫人 43.1.24
- 衛満 36.6.10
- エヴァンス提督 35.5.2
- エヴァンス,アーサー クノッソス遺跡発掘者 43.6.20
- エカテリーナ二世 41.7.8,41.7.9
- エストマン(在ハンブルク) 42.3.20
- エスバッハ博士 1.10.21
- エセド・パシャ 2.3.27
- エセル 17.9.28
- エッケルト楽長 13.6.2
- エッケルト男爵 36.3.16,37.10.16
- エッケルト男爵令尊 37.10.16
- エッシェンバッハ(フォン),M・エープナ嬢 42.3.10
- エツェル少佐・德国公使館付武官 37.3.2
- エドモントン卿 37.5.26
- エドモントン卿夫人 37.5.26
- エドワード七世英国皇帝 37.1.27,37.5.26,37.6.9,37.6.29,37.7.17,  
37.11.10,38.3.29,39.7.17,42.4.13,43.5.3~13
- エドワード七世英国皇帝皇后 38.3.29
- 榎本子爵・外相(武揚) 24.5.18,24.5.29,25.3.16
- 榎本子爵・外相(武揚)令嬢 25.3.16
- エープハルト,B. 40.6
- エフラー,ペエル 37.1.18

- エーベルハルト・デア・グライナー ヴェルテンベルク領主 17.8.16
- エーベルハルト (ベルツ舎弟ロベルト令息,愛称エボ)  
 39.10~11,40.6,41.8.22,41.8.23,42.9.14,42.9.15,  
 43.4.5,43.6.20,43.7,43.12.6,43.12.26,43.12.31,  
 44.1.1,44.1.8,44.1.12,44.1.15,44.1.16,44.1.18,  
 45.2.16,45.2.19
- エーベルハルト (ベルツ舎弟ロベルト令息,愛称エボ) 夫人 41.8.22
- エボ → ○エーベルハルト
- 江馬賤男助手・博士 22.7.12~18.25.8.28  
 エマヌエル,ガレリア・ヴィットリオ 意大利国建国父 41.1.16
- エミリー (ベルツ舎弟ロベルト令息ラインハルト令室)  
 39.10~11,43.6.20,44.6.6,45.2.19
- エラ 11.2,11.2.23,11.2.26,11.3.17,12.2.2,12.2.22,  
 12.3.3,12.3.9,12.3.30,12.4.3,12.4.18,12.4.28,  
 12.6.25,12.7.3,14.3.12
- エラ令尊 12.4.3,12.6.25,12.7.3,14.3.12
- エラ令兄 12.6.25,12.7.3,14.3.12
- エラ令姉 14.3.12
- エラ令妹 14.3.12
- エリカ (ネッター令嬢) 39.5.15,42.2.7
- エリカ (ホフマン中尉令嬢) 41.2.29
- エリーゼ (ベルツ令妹) 39.9.29,40.6,40.9.9,41.3.26,41.5.17,41.6.15,  
 41.6.19,41.8.17,41.8.23,41.10.1,42.4.13,42.8.20,  
 42.9.14,42.12.1,43.4.19,43.4.27,43.8.13,  
 43.8.30~9.11,44.1.7,44.1.10,44.1.13,44.1.16,  
 44.1.22,44.2.3,44.6~7,44.11.17,45.2.19,45.3.4,  
 45.4.1,45.4.28,1.12.30,2.1.13,2.1.19,2.2.27,2.4.19
- エーリヒ 42.4.5  
 エルヴェ,ギュスターヴ 政治家 40.8.22
- エンゲルハルト 17.8.16

○エルゲルロス博士	17.9.28
○エルゼ（ホフマン中尉令嬢）	41.2.29
○エルゼッサー	40.4.25,43.12.6
○エルゼッサー夫人	40.4.25,43.12.6
○エルドリッジ,ジェームス・スチュアート横浜ゼネラル病院医師	43.3.6
○エルドリッジ,ジェームス・スチュアート横浜ゼネラル病院医師夫人	41.4.22
○エルンスト＝ヘーシュ女史（フォン）,L.博士（在ゴードスベルク）	40.6,43.7.19
○エーレンヴァル神経科医（在アールヴァイラー）	41.8.23
○エーレンライヒ教授	39.5.24,40.5.1,40.6,43.1.14～21,43.7.19,43.10.3
○エーレンライヒ教授夫人	39.5.24,43.10.3
○エロン,F.	41.5.16,41.6.6
○エロン,F.令母	41.6.6
エンクィスト提督	38.6.23
エンヴェル・パシャ（エンヴェル・ベイ）青年トルコ党領袖	2.1.24
○エンゲルハルト	17.8.16
袁世凱	37.11.16,41.11.17,44.8.21,44.11.2,44.11.17
○エンヘルマイアー嬢	39.10.10

## オ

○オイティング（在シュトラースブルク）	40.6,44.5.27～29
○オイネルン（フォン）（在プフリンゲン）	41.8.23
大木文相（喬任）	24.6.2
○大隈伯爵・外相（重信）	14.6.21,21.12.15,22.4.27,22.10.18,22.10.27, 36.12.17,37.3.16,37.4.1,37.4.6,37.4.17.18, 37.10.9,38.2.16,38.3.27
○大隈伯爵・外相（重信）夫人	22.10.18
○大倉（喜八郎）	37.6.16,41.4.18
○大倉（喜八郎）夫人	41.4.19
○大谷法主（光尊）	25.9.1,33.2.17,33.2.20
○大谷法主（光尊）令息	25.9.1



○大谷法主（光尊）令嬢	25.9.1
○大谷伯爵（光瑞）	38.4.26
○大谷伯爵（光瑞）夫人	38.4.26
○大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥（巖）	15.8.25,33.2.8,37.2.5,37.6.25,37.8.8,37.8.13, 37.8.19,37.9.4,37.9.25,37.12.2,38.3.12
○大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥（巖）夫人（澤子）	15.8.25
○大山侯爵・陸軍卿・大将・元帥（巖）夫人（捨松）	33.8.3
○岡玄卿男爵・侍医	12.4.2,14.3.12,33.1.20,33.2.8,33.3.23,33.8.4, 34.10.4,34.10.5,37.2.12,37.12.2,38.2.3,38.3.26, 38.5.28,38.6.3,38.6.6,38.6.9,41.3.6,41.3.9, 41.5.19,41.5.20,42.8.20,2.1.24
岡沢陸軍大将（精）	37.6.7
○小鹿島夫人	22.3.2
○岡田男爵・有栖川宮家執事	41.3.9
○緒方正規教授	34.11.22
○岡部子爵・元岸和田藩主（長職）	37.4.22
○岡部子爵・元岸和田藩主（長職）令母	37.4.22
○岡部子爵・元岸和田藩主（長職）令嬢	37.4.22
岡部曲芸団長（仙吉）	43.4.27
奥陸軍大将（保鞏）	37.6.20,37.7.10,37.9.5
○オコ → ○山口 箱根富士屋ホテル経営者（仙之助）令嬢オコ オステン	12.3.1
○オストヘルダー博士・船医	42.4.24,42.5~6
○オストワルト牧師	38.1.22
○オストワルト牧師夫人	38.1.22
○オズーフ大僧正	36.2.1,37.1.18,38.2.14
○落合駐俄日本国代理公使（謙太郎）	41.7.8
オッテンデルファー夫人	17.10.7
○オッテンハイマー	39.11.15~17
○オッテンハイマー夫人	39.11.15~17

○オットー博士	40.9.19,44.8.21
○オッペンハイマー嬢 (在フランクフルト)	40.6
オトキチ (エラ従兄弟)	14.3.12
○オハツ	41.6.15,41.6.20
○オブライエン駐日美国大使	41.4.12
<sup>オム</sup> 巖女官	36.4.27
○オヤス → ○ハイゼ嬢 (オヤス)	
○オランジェリー	40.8.22
オルガ大公妃	38.2.8
○オルコット神秘仏教使徒	22.3.7
○オルスハウゼン	40.5.25,1.10.14
○オルスハウゼン令息 立法顧問官	40.5.25
○オールト博士	41.3.7,41.4.13,1.10.16
オルロフ,グレゴリー軍人	41.7.9

## カ

カイザー麦酒醸造業者	38.2.26
○カイザー将校夫人	41.2.29
○カイザー地質学教授 (在マールブルク)	41.8.23
カイザー画家	43.8.30~9.11
○カインツル ホテル・ゼー・ヴィラ主人	40.10.4
カウルバース	38.1.20
カウルバッハ (フォン),ヴィルヘルム画家	17.9.15
○香川子爵・皇后大夫 (敬三)	38.6.9
○カークウッド英国公使館員	33.4.20
○笠原光興京都医科大学教授	38.4.13
カーゾン,ナサニエル卿・印度総督	37.10.12,37.10.23
○カタヤマ,オットー	40.6,41.3.19,42.9.15,45.5.25
○カタヤマ,オットー令母	41.3.19,45.5.25
カタリーナ德国女帝	38.1.28

○桂伯爵・首相・将軍（太郎）	28.9.23,34.9.16,35.2.13,35.4.2,36.3.16, 36.9.15,36.12.24,37.1.27,37.2.6,37.9.27, 37.11.20,37.12.15,38.1.5,38.3.12,41.8.17
加藤清正	38.4.26
○加藤前駐英公使（高明）	33.4.20
○加藤時次郎博士・医師・社会運動家	40.6
○加藤時次郎博士・医師・社会運動家夫人	40.6
○加藤総理（弘之）	17.8.16
カトゥルス,ヴァレリウス叙情詩人	42.10.31
金岡（巨勢一）	38.4.26
○金谷 日光ホテル所有者	41.4.29
○金谷 日光ホテル所有者令息	41.4.29
○金子男爵・前法相（堅太郎）	34.9.8,37.2.9
○嘉納柔術師範（治五郎）	36.12.12
○樺山伯爵・海軍大将（資紀）	22.10.27,37.11.19
カピユー農林部長	35.12.18,35.12.30
○カプフ開業医（在シュレットシュタット）	40.8.22
○カプフ開業医令息（在シュレットシュタット）	40.8.22
○カプフ開業医令嬢（在シュレットシュタット）	40.8.22
○カプルタラ印度大王	36.11.13,36.11.26,36.12.27
○カプルタラ印度大王妃	36.11.13,36.11.26
○カーペンター夫人 → ○シーボルト（フォン）,ハインリッヒ・フィリップ夫人（ミセス・カーペンター）	
○カーペンター嬢 → ○シーボルト（フォン）,ハインリッヒ・フィリップ義理令嬢	
○カミキチ → ○高田カミキチ（高田慎蔵婿養子）	
○上村提督（彦之丞）	37.6.27,37.6.30,37.7.3,37.8.14,37.8.15,38.1.5,41.4.14
カラム,アレクサンドル画家	17.9.15
カリアチ公	24.3.7
カリアチ公夫人	24.3.7
○カール美国女流画家	37.8.2

- カール（ベルツ令尊） 9.4.2,22.5.23,22.6.24,42.10.3,43.10.3,45.6.24,  
1.10.3,1.10.4
- カール（ベルツ舎弟） 39.7.17,40.5.20,40.6,40.9.10,40.11.16,41.8.17,  
41.8.22,41.8.23,42.1.23,42.8.20,42.9.14,42.12.1,  
43.1.24,43.3.29,43.4.10,43.5.3~13,43.8.13,  
43.8.30~9.11,44.6.17,1.9.23,1.9.29,2.4.4,2.4.25,2.5.8
- カール（ベルツ舎弟）夫人 → ○テクラ（チュービンゲン大学教授ヘーゲルマイアー  
令嬢・ベルツ舎弟カール夫人）  
カールスルーエ画家 40.8.22
- カロリーネ（ベルツ令母） 9.4.2,12.3.3,22.5.23,29.2.28,29.3.1,29.3.2,33.4.6,  
38.1.23,38.6.9,38.7.22,39,39.4.26,39.5.15,40.5.28,40.6,  
40.9.13,40.9.14,40.11.16,41.1.27,41.2.3,41.3.2,41.7.5,  
41.10.1,42.1.13,42.2.22,42.4.9,42.4.13,42.8.26,42.9.14,  
42.9.15,42.12.1,42.12.31,43.3.6,43.4.5,43.4.10,43.6.3,  
43.8.13,43.8.15,43.9.29,43.12.6,44.3.2,44.6.6,44.6.17,  
44.7.30,44.11.17,44.12.27,45.1.1,45.1.19~20,45.2.16,  
45.2.19,45.2.24,45.3.2,45.3.3,45.3.30,45.4.1,45.7.6,  
45.7.24,45.7.31,45.9.23,1.10.21,2.2.27,2.2.28,2.4.16
- カロリーネ（ベルツ令妹） 39.9.29,39.11.15~17,40.3.23,40.6,40.9.10,41.3.25,  
41.6.15,41.7.4,41.7.5,41.7.12,41.7.20,41.8.4,41.10.1,  
41.12.6,41.12.13,42.2.22,42.3.10,42.6.17,42.6.21,  
42.9.30,42.10.3,42.10.4,42.10.12,42.10.14,42.10.16,  
42.10.25,42.10.29,43.4.27,43.5.3~13,43.8.13,  
43.8.30~9.11,44.6.17,44.6.~7,44.7.30,44.11.17,  
45.2.19,45.5.31,45.6.10,45.6.15,45.6.23,45.7.6,  
1.12.7,2.3.8,2.3.13,2.3.18,2.4.4,2.4.9,2.4.10
- 川上（音二郎） 36.12.17
- 川上貞奴（小熊貞） 36.12.17
- 川上将軍（操六） 37.10.13
- 川口師 仏教僧 37.10.1

○河鍋暁斎	12.10.20,22.4.26
○川端玉章	38.5.27
○川村伯爵・海軍大将・枢密顧問官（純義）	34.9.16,34.9.28,37.2.12,37.6.18,37.8.12, 37.10.9,41.3.30
○川村伯爵・海軍大将・枢密顧問官（純義）夫人	37.2.12,41.3.30
○川村伯爵・海軍大将・枢密顧問官（純義）令息	37.6.18
○川村伯爵・海軍大将・枢密顧問官（純義）令嬢	37.2.12,41.3.30
○閑院宮（載仁）	36.1.2,38.6.5
○閑院宮（載仁）妃	38.6.5
韓国皇帝（光武）	33.6.6,36.2.8,36.4.27,36.5.5,36.6.24,36.7.4, 36.9.18,37.1.6,37.1.8,37.1.19,37.2.9
韓国皇帝（光武）王子	36.4.27
○カンツィー博士・アイゼルスベルク助手	40.2.27,40.3.15
○カーンハイム衛生顧問官	40.9.14,44.8.21
○カーンハイム衛生顧問官夫人	40.9.14,44.8.21
○カーンハイム衛生顧問官令嬢	40.9.14
カンバーランド（フォン）、アウグスト王子	2.1.24
○カンボン法国公使館一等書記官	37.12.19
桓武天皇	38.4.15
○ガイアー	40.9.19
○ガイスラー ハンブルク・アメリカ汽船船長	41.1.21,41.1.27,41.1.30,41.2.29
ガウス教授	44.7.30
○ガウプ,ロベルト・オイゲン精神病学者	43.12.6
○ガガルニ駐長崎俄国領事	36.9.26
○ガビンス,ジョン・ヘリントン駐日英国大使館日本語担当書記官	37.5.24,37.10.16,37.10.31,37.11.5,41.6.9,43.6.20
ガポール司祭	38.1.24
○ガレ外科医令母	42.2.22

キ

菊五郎（尾上 一）	12.3.1
○菊池文相（大麓）	34.11.22,35.4.2,35.7.10,38.3.28
○菊池法学博士・御料地管理部官吏	1.9.29
○菊池法学博士・御料地管理部官吏夫人	1.9.29
○北里柴三郎 細菌学者・伝染病研究所設立者	35.4.2,41.6.9,41.6.12,41.6.14
○北島 北里伝染病研究所初代副所長（多一）	44.8.21
○北白川宮（能久王）	21.12.15,36.2.17
○北白川宮（能久王）令室（伊達家姫君〈富子〉）	21.12.15
○北白川宮（能久王）王子（成久王）	21.12.15,38.6.5
○北畠男爵（治房）	37.4.17.18
○北畠男爵（治房）夫人	37.4.17.18
○北畠男爵（治房）令息夫人	37.4.17.18
○北畠男爵（治房）令孫	37.4.17.18
キタロウ博打	14.3.12
吉永洙	37.3.8
キーデルレン＝ヴェヒター（フォン）外相	42.4.13,44.8.21,44.11.27
木戸侯爵（孝正）	37.10.9
木戸孝允 参議兼文部卿・内閣顧問	38.4.15
キャミル・パシャ オスマン・トルコ帝国宰相	2.1.24
○キューグラール病院長	17.8.16
キューネ中尉	33.6.22
キラルフィー,イムレ大英国・日本展覧会主催者	43.6.20
桐野薩軍総参謀長（利秋）	10.10.4
○キルヒナー	41.12.13
キルヒホーフ提督	34.10.28
○金 通訳	36.6.10
○キーン夫人	41.3.30
○ギャロレット夫人	17.8.16
○ギュンテル経理官	36.11.13

- ギンテル 経理官夫人 36.11.13
- ギールケ 解剖学教師 12.4.2,12.10.26,13.6.22
- ギン (ベルツ家養女) 33.4.17
- ギン (ベルツ家養女) 令母 33.4.17

## ク

- 九鬼男爵・美術行政家 (隆一) 41.4.21
- 九条公爵・東宮妃節子令兄・掌典長 (道実) 33.5.9
- 九条姫・東宮妃 → ○皇太子妃 (大正天皇皇后九条節子)
- クナウス, ルートヴィヒ 画家 17.9.15
- クナウト, パーシヴァル 17.9.6
- クナッペ博士・駐上海德国総領事・公使館付枢密参事官  
36.1.22,39.12.8,40.11.1,40.11.16
- 久邇宮 陸軍大将・元帥 (邦彦王) 41.1.25
- 熊雄 (バイル令孫) 41.3.19
- クラウス 伝染病研究所長 (在ベルリン) 42.4.5
- クラウス 臨床医 (在ベルリン) 44.3.27
- クラウス博士 (在キルヒハイム) 44.4.18
- クラウス, アルフレート (在ハンブルク)  
40.5.24,40.5.30,41.12.1~5,43.10.3,44.11.27,1.10.27,2.1.16
- クラウス, アルフレート夫人 (在ハンブルク) 41.12.1~5
- クラウス, アルフレート (在シュトゥットガルト) 43.4.19,43.4.27,2.2.15,2.4.20
- クラウス, アルフレート夫人 (在シュトゥットガルト) 43.4.19,2.2.15,2.4.20
- クラウス, アルフレート令嬢 (在シュトゥットガルト) 43.4.19
- クラウス, フェルディナント (在ハンブルク) 41.12.1~5,43.12.1,44.3.29,44.4.18
- クラウゼ博士 34.9.20
- クラーク, H. ホテル・ワウォナ元所有者 17.9.13
- クラージュ 解剖学者 (在ブレスラウ) 40.6,41.8.4,43.7.19
- クラブフ 伝道師 43.10.15
- クリーヴランド, グローヴァー ニューヨーク州知事 17.9.20,17.9.28

○クリーク博士・上海医学校教師	40.11.1,41.2.29
○クリーク博士・上海医学校教師夫人	41.2.29
○クリーク（在シュトゥットガルト）	42.11.11,43.12.6
○クリーク夫人（在シュトゥットガルト）	42.11.11,43.12.6
○クリーゲルン（フォン）（在ドレスデン）	42.10.31
○クリーゲルン（フォン）夫人（在ドレスデン）	42.10.31
クリスビー考古学者	41.8.4
栗野前駐俄公使（慎一郎）	37.1.19,37.12.17
クリムト,グスタフ画家	40.8.22
○クリューガーマニラ領事	33.8.4
○クリューガーマニラ領事夫人	33.8.4
クリューゲル トランスヴァール共和国大統領	37.2.20,37.5.12
○クリーン将軍（在ベルリン）	13.6.22,40.6,42.4.4,42.4.13
来島恒喜	22.10.18
○クルーゼン博士・青島判事長	36.7.15~27,37.5.21
クルティウス教授	39.10.10
○クレフェル	41.12.9,41.12.11,42.3.26,42.4.4,43.1.14~21, 43.10.3,1.10.16,1.10.21,1.10.28
○クレフェル夫人	41.12.9,42.3.26,42.4.4,43.1.14~21,1.10.16,1.10.21
○クレーマー教授	43.10.15,44.5.27~29,44.6.2,44.7.30,44.8.21, 1.7.31,2.3.21,2.3.25
○クレーマー教授夫人	44.6.2,44.8.21,1.7.31,2.3.21,2.3.25
○クーレンキャンプ（在ブレーメン）	39.7.23
○黒川将軍・東宮武官長（通軌）	29.2.28
黒木陸軍大将（為楨）	37.5.7,37.5.26,37.6.7,37.6.20,37.7.3,37.7.10, 37.7.24,37.7.29,37.8.4,37.8.30,37.9.5,37.10.13, 38.3.1,38.3.8,38.3.9
○クロス軍法会議法務官	45.4.24
○黒田首相（清隆）	21.12.15,22.2.11,22.10.27
クロッカー	17.8.16



○クロッケ『フランクフルター・ツァイツungk』紙通信員	37.9.29
クロパトキン陸相・総司令官	36.7.4,37.4.6,37.4.28,37.5.7,37.6.2,37.6.4, 37.6.5,37.6.7,37.6.10,37.6.20,37.6.26,37.6.27, 37.7.3,37.7.10,37.7.20,37.7.28,37.8.4,37.8.8, 37.8.26,37.8.30,37.9.1,37.9.2,37.9.3,37.9.4, 37.9.5,37.9.10,37.9.11,37.9.12,37.9.19,37.9.27, 37.9.29,37.10.1,37.10.5,37.10.12,37.10.13, 37.10.16,38.1.5,38.1.6,38.1.20,38.1.25, 38.1.29,38.2.5,38.2.11,38.3.12,38.3.18
○クーン外科医	43.7.19
○グスマン博士・ベルツ家主治医	44.1.27
○グチョウ	40.11.1
グッゲンハイム（億万長者）	45.4.1
グラックス兄弟令母	29.3.2
グラネ,フランソワ画家	17.10.8
○グラハム,ムーア博士	41.3.30
○グランツ ベルリン軍事アカデミー顧問官	41.8.23
グラント将軍	12.7.6,12.7.8,12.7.12,12.8.4
○グリスコング駐日美国公使	37.7.29,38.5.27
○グリスコング駐日美国公使夫人令母	37.11.5
グリッペンベルグ司令官	37.9.28,37.10.1,38.1.20
○グリュンヴェーデル教授	43.10.3,44.2.17
○グリューンシュタイン（フォン）,リッター	1.7.31
○グリューンシュタイン（フォン）,リッター夫人	1.7.31
○グルート,ヘレン（幼名アイコ）	41.4.27
グルリット	37.5.26
グレー,エドワード（ロード・グレー）政治家	44.11.27
○グレーテ（ベルツ舎弟カール令嬢,愛称マルガレーテ）	40.9.6,40.11.16,41.8.17,41.8.23,42.1.23, 42.4.13,42.8.26,45.12.25

グレープナー民族博物館長・フォイ博士助手	43.7.19
○グローヴァー, トーマス・B. 日本在留外国人最古参者	37.1.6, 37.10.29, 37.12.12
○グロース教授 (在フライブルク)	39.7.17
グロースマン神経科医	42.3.26
○グンドラッハ大尉・戦時通信員	37.9.14
○ゲン, ミン前緬甸王	36.1.2
○ゲン, ミン従者	36.5.9, 36.6.3, 36.6.6, 36.6.10, 36.6.23

## ケ

○ケイ夫人	37.8.2
警官 (津田三蔵)	24.5.11
警視総監 (安立綱之)	37.3.2
○ケーゲル	36.5.12
○ケスラー	33.4.8, 37.8.19
○ケスラー夫人	33.4.8, 37.8.19
ケスラー	41.1.16
○ケスラー, ヘルマン ジーメンス・シュッケルト製作所支配人・電気技術者	41.3.6, 41.11.29, 41.12.19, 42.3.26, 43.1.14~21, 1.10.16
○ケスラー, ヘルマン ジーメンス・シュッケルト製作所支配人・電気技術者夫人	40.6, 41.11.29, 43.1.14~21
○ケスラー, マリオン	41.11.29
ケットレル男爵・駐北京德国公使	33.6.18, 33.6.19, 33.7.6, 33.8.1
○ケーニッヒ軍医中佐	36.7.15~27
○ケプナー海軍参事官	1.10.16
○ケーベル哲学教授	38.3.19
○ケーベル (フォン)	41.3.19
○ケーラー ハンブルク・アメリカ汽船監査役・船長	41.1.25, 41.2.11, 41.2.24, 41.2.29, 41.3.4, 42.4.24, 42.5~6
○ケーラー医学博士	41.12.19
ケル, アルフレート演劇評論家	41.11.30

○ケルト下宿屋主	40.11.1
ケルパー提督	41.4.14
ケルレル将軍	37.7.18,37.7.20,37.8.4
ケンプフェル医師	9.6.26
ゲエドケ大佐	38.3.1
○ゲスラー教授	42.3.6,42.11.11,43.12.6,44.2.16,1.11.22
○ゲスラー教授夫人	42.11.11,43.12.6,44.2.16
○ゲッツェ	39.11.28
ゲッツェン伯爵・提督	38.1.31
ゲーテ (フォン),ヨハン・ヴォルフガング詩人	41.6.15,42.10.24,43.3.29
○ゲピンスキー博士	43.9.29
○ゲフキー	41.12.13
○ゲルトナー	41.2.29
○ゲルトルート (ベルツ舎弟ヘルマン令嬢)	40.4.5,40.5.14,40.5.17,40.5.28,40.6,42.3.26, 42.4.9,42.6.16,42.6.21,42.10.16,44.6~7
○ゲルラッハ陸軍大尉	41.7.7
○ゲルラッハ陸軍大尉夫人	41.7.7
○ゲルラント博士・地震観測所長	40.6
○ゲロック シュトゥットガルト市教区牧師	42.3.20
コ	
○コアット伯爵	27.11.30
○高駐日韓国公使 (永喜) 令息 洪将軍	36.9.18 37.1.19
○皇后 (明治天皇皇后美子)	22.2.11,22.4.27,24.5.18,24.6.6,29.2.28,33.3.24, 33.5.10,33.7.14,33.8.15,34.9.16,36.11.13, 37.1.1,38.3.19,38.4.15,38.6.9,41.5.19
○皇子 (迪宮裕仁・昭和天皇)	34.9.16,37.2.12,37.6.18,37.10.9,38.3.26, 38.3.31,41.3.30

○皇子（淳宮雍仁・秩父宮）	37.2.12,37.6.18,37.10.9,38.3.26,38.3.31,41.3.30
○皇子（光宮宣仁・高松宮）	38.3.19,38.3.26,38.3.31,38.6.6,41.3.30
○皇太子（明宮嘉仁・大正天皇） → ○東宮・皇太子（嘉仁）・大正天皇	
○皇太子妃（大正天皇皇后九条節子）	33.2.11,33.5.9,33.5.10,34.9.15,34.9.16,37.1.1, 37.2.12,37.10.9,38.3.19,38.4.26,38.6.6,41.3.30, 41.4.1,41.5.20
皇太后（英照皇太后,九条夙子）	33.1.30
皇太后 → 西太后 咸豊皇帝妃	
幸田女流ヴァイオリニスト（延子）	38.3.19
幸田女流ヴァイオリニスト（幸子）	38.3.19
皇帝（光緒帝）	41.11.17
皇帝 → フリードリヒ・ヴィルヘルム二世	
河野広中進歩党员	36.12.12
弘法大師	38.4.26
○小金井 人類学者・帝国大学医科大学教授（良精）	41.4.20,43.10.3,43.10.15
○国王 → ○ヴィルヘルム二世（ヴェルテンベルク国王）	
ココフツォフ,ウラディミール・ニコライヴッチ大蔵大臣	42.10.29
○コジナ	41.8.4
コーゼリッツ（フォン）	42.10.31
児玉男爵・陸軍大将（源太郎）	37.6.7,37.6.25
○コツェ夫人（ビスマルク姪）	37.3.14
○コッフル（在ヴォルムス）	38.9.1
○コッホ,ロベルト	40.9.17,41.6.12,41.6.14,41.6.16,41.6.19, 41.11.27,42.4.5,43.6.2
コッホ,ロベルト先妻	43.6.2
○コッホ,ロベルト後妻	41.6.12,41.6.14,43.6.2
○コッホ海軍軍医大尉	39.5.17
○コッホ博士・学長（在ベルリン）	44.2.3
○小西 赤十字病院医師	41.6.7
近衛公爵（篤麿）姫・法華寺住職	37.4.17.18

小堀遠州	38.4.26
○小松宮（彰仁）	35.4.2,36.2.17,36.2.18,36.2.25
コマンドン医師（在パリ）	44.8.21
○小村男爵・外相（寿太郎）	37.1.8,37.2.5,37.2.7,37.11.12,37.11.20,38.2.16, 38.3.10,38.4.28,38.6.1,38.6.9
○コルヴィザール男爵・甲騎兵大佐	35.11.15,37.3.26,37.7.3,41.3.26
○コルヴィザール男爵・甲騎兵大佐夫人	37.7.3,38.2.16
○コルシェルト	12.2.22,12.8.4
○コルディング船長	41.1.28
コルネリア	29.3.2
コールブリュッケ	41.10.20
コレッジョ,アントニオ・アレグリ画家	17.9.15,17.10.8
コロンブス,クリストファー探検家	17.9.15
コンウェイ,デイム・ヒュー作家	17.9.6
コンダー	37.5.21
○コンダー夫人	37.6.13
○近藤	23.10.15
○コンドル,ジョサイア建築家	41.4.27
○コンドル嬢ヘレン → ○グルート,ヘレン（幼名アイコ）	
コンノート,アルトゥール・ウイリアム公（ヴィクトリア女王三男）	39.7.17
○ゴットベルク（フォン）,オットー通信員	37.1.31,37.5.23,37.5.24,37.5.27
伍廷芳駐美公使・大臣	41.8.17,44.11.17,44.12.27
後藤 大党派大同団結首領（象二郎）	22.3.19,22.6.25
ゴードン,チャールズ印度総督幕僚	41.1.30
ゴリキー,マクシム作家	38.3.19
ゴルチャコフ,ミカイロビッチ将軍	38.2.8
ゴルツ将軍 ドイツ・アジア協会長	40.11.16
○ゴルトマン帝国最高裁判所書記官（在ライプツィヒ）	40.9.19,1.10.30
○ゴルトマン嬢	42.3.20

サ

- 西園寺侯爵・首相（公望） 37.3.16,38.6.5,41.4.18,41.8.17
- 西郷侯爵・元帥・内相（従道） 24.5.29,24.6.2,35.6.1,35.6.2
- 西郷侯爵・元帥・内相（従道）夫人 33.8.3
- 西郷博士・医師（吉義） 40.5.10,40.5.26
- 西郷陸軍大将（隆盛） 10.2.23,10.10.4
- 斎藤海軍大臣・首相（実） 41.4.14
- 斎藤博士 38.4.26
- 嵯峨天皇 38.4.26
- 坂本竜馬 38.4.15
- サキ（？） 德国公使館通訳 33.7.10
- 桜井助手 10.10.5
- ササナイ元東京大学付属病院助手 43.10.3
- 篠野ベルリン日本大使館一等書記官（乙次郎） 39.5.23,39.11.29
- 左団次（市川 一） 12.3.1
- 佐藤医師（進） 22.10.18
- サトウ,アーネスト・メーソン駐北京・駐日英国公使・枢密院議員  
33.4.20,34.11.22, 37.12.17, 41.6.9,43.6.20
- 実吉男爵・海軍医監（安純） 38.3.4
- サラジン,P. 44.6~7
- サルト → デルサルト,フランソワ演劇家
- 三宮男爵・式部長（義胤） 28.11.18,33.1.8,33.1.30,41.3.26
- 三宮男爵・式部長（義胤）夫人 28.11.18,41.3.26
- 三条公爵・首相（実美） 22.2.11,22.4.27,22.10.18,22.10.27
- 三条子爵（？） 22.8.9,22.8.12
- ザイデル,エマヌエル建築家 43.8.8
- ザイデンシュピナー枢密軍事顧問官 40.11.16
- ザイブルク（フォン）総領事 38.5.27
- ザイブルク（フォン）総領事夫人 38.5.27,38.6.1
- ザイラー,アレクサンダー ホテル・ヴィクトリア所有者 39.7.23

○ザメット歯科医 (在シュトゥットガルト)	41.4.1,41.4.13
ザールブルク,エディト伯爵夫人	42.10.24
シ	
シェークスピア,ウイリアム劇作家	41.11.30
○シェファー駐日奥地利国公使	9.11.30,38.1.22,38.1.31,38.2.26
○シェファー高田商会ロンドン支店支配人	42.4.30,42.8.20
シェフケット・パシャ	42.9.14
○シェレンドルフ (フォン) 陸軍中佐	39.12.8
○シェーンフェルダール エルバーフェルト市建設監督官	42.2.7
○シェーンレーバー,ヘルマン	42.2.3,43.1.24
○シェーンレーバー,ヘルマン夫人	42.2.3,43.1.24
志賀 赤痢菌発見者・京城帝大総長 (潔)	41.6.9
志賀重昂代議士	37.12.17
シーザー,ユリウス インペラトール	40.6,41.8.4
シーシキン,イヴァン・イヴァーノヴィチ画家	41.7.5
シタイヘン主任司祭	37.12.19
シタインベルガー	38.1.22
○シック	42.11.11
シックラー	45.3.10
シッドモーア	33.8.22.23
品川内相 (弥二郎)	24.6.2,25.3.12
柴田嬢 (三浦 環)	38.3.19
渋沢男爵 (栄一)	38.3.11
○シボイ高田商会社員 (ハイゼ,ヴィルヘルム嬢婿)	41.5.17,43.7,45.5.26
○シボイ夫人 → ○ハイゼ嬢 (オヤス)	
シーボルト (フォン),フィリップ・フランツ	9.6.26
○シーボルト (フォン),アレクサンダー・ゲオルク	
	12.3.1,22.4.27,24.3.7,39.5.24,42.3.13,44.1.27
シーボルト (フォン),アレクサンダー・ゲオルク夫人 (フォン・ウルム・エルバッハ	

夫人)	42.3.13
○シーボルト (フォン),ハインリッヒ・フィリップ	40.10.1,40.10.4,41.1.16,41.4.1,41.4.16,41.8.4, 42.2.7,42.3.13,44.1.27
○シーボルト (フォン),ハインリッヒ・フィリップ夫人 (ミセス・カーペンター)	40.10.4,41.1.16,41.8.4,42.3.13
○シーボルト (フォン),ハインリッヒ・フィリップ義理令嬢 (カーペンター嬢)	40.10.4,42.3.13
シーボルト (在シュトゥットガルト)	45.1.8
シーボルト夫人 (在シュトゥットガルト)	45.1.8
島津侯爵 (忠義)	22.2.11
島津三郎 (久光)	10.2.23
○島村速雄海軍中将・江田島海軍兵学校長	41.3.9
シミラドスキー画家	41.7.9
シーモーア提督	33.6.17,33.6.18,33.6.22,33.8.22.23
○下条美術学校教授・貴族院議員 (正雄)	37.5.27,37.10.17,41.3.26
○シモン教授	39.7.23
○シモン教授夫人	39.7.23
○シャイデマンテル	38.9.1
○シャクルトン,アーネスト南極探検家	43.11.21
○シャタック博士 (リー大佐娘婿)	17.9.28
シャファート,マハムード土耳其国首相	2.1.24
○シャープ (フォン) 博士 (在上海)	40.11.1,41.2.29
○シャープ (フォン) 博士夫人 (在上海)	41.2.29
暹羅国皇太子	36.12.27
○シャラー	42.4.30
○シャラー夫人	42.4.30
○シャル	41.8.22
○シャル夫人	41.8.22
○シャル嬢	41.8.22



シャル,セバスチャン画家	42.10.3
シャロン ホテル・グラント所有者	17.8.16
周文	38.4.26
○シュヴァインフルト,ゲオルク植物学者・アフリカ探検家	43.10.3,43.10.15
シュヴァルベ,グスタフ解剖学教授	40.6,41.10.20
○シュヴァンツ博士 (在シュテークリッツ)	41.8.23
シュヴィングハーケル ガルダ湖ホテル経営者	42.10.16
○シュタイネン (フォン・デン) 教授	40.6,41.8.4,41.12.7,41.12.11,41.12.13,41.12.14, 43.1.14~21,43.5.3~13,43.7.19,43.10.3,44.2.17, 44.2.25,44.5.27~29,1.10.14,1.10.16
○シュタイネン (フォン・デン) 教授夫人	41.12.7,41.12.13,41.12.14,43.10.3
○シュタイヘル牧師	36.2.1
シュタイン駐韓俄国代理公使	36.6.24
○シュタウディンガー	40.5.4
シュタウファー=ベルン,カール画家	45.5.31
○シュタウプバッヒャー クンスト&アルパース社支店員	41.6.24
○シュティエーダ (在ケーニヒスベルク)	41.8.23
○シュティルフリート紙幣局雇員	12.4.28,12.4.29
○シュテッカー,ヘレン博士・女権論者	40.11.1
シュテーデル,J・F.銀行家	43.7.19
○シュテルチ ホテル・ユングフラウ経営者	41.8.23
○シュテルチ ホテル・ユングフラウ経営者夫人	41.8.23
○シュテルチ ホテル・ユングフラウ経営者令嬢	41.8.23
○シュテンゲル	41.12.11
○シュトイデル防衛隊最高医官	41.12.13,42.4.5
シュトラウス,イシドール	45.4.1
シュトラウス,イシドール夫人	45.4.1
シュトラウス,リヒャルト作曲家	41.8.23
○シュトラウフ海軍大将	40.5.4
○シュトルーヴェ ワシントン駐在公使	17.9.20

○シュトルーヴェ ワシントン駐在公使夫人	17.9.20
○シュナイダー	13.7.13
○シュナイダー間門ホテル所有者	41.5.11
○シュナイダー間門ホテル所有者夫人	41.5.11
○シュナイダー間門ホテル所有者令嬢	41.5.11
○シュパイザー博士 (在バーゼル)	41.12.14
○シューハルト,カール考古学者・ケストナー博物館長	44.2.17
シューマン,ロベルト・アレクサンダー作曲家	43.11.24
○シュミット博士・医師	40.3.15
○シュミット博士・参謀本部軍医大尉	40.11.1
シュミット (在ナポリ)	41.1.16
○シュミット司法官補 (在ハノーファー)	41.8.23
○シュミット,R・アウグスト枢密顧問官	41.8.23
シュミット,G.神父	41.12.9
○シュミット,W.神父「アントロポス」誌編集者	43.10.3
○シュライヒャー,O.学術書発行人・遺物コレクター (在パリ)	41.8.4
シュライヒャー博士 (在シュトゥットガルト)	44.3.29
○シュリッツ,A.人類学会議支部長	40.4.5,40.4.27,41.10.20,42.3.10,43.7.19,44.7.30
シュリーマン,ハインリヒ考古学者	40.5.30
○シュルツ,カール上院議員・内務長官	17.9.20,17.9.28,17.10,17.10.5
シュルツ,ハインリヒ人類学者	43.12.6
シュルツェ美学者 (在ナウムブルク)	40.8.22
○シュルツェ,エミール・アウグスト・ヴィルヘルム博士・東京医学校教師	9.6.9,9.6.26,9.10.25,12.4.2,12.6.1,12.10.26, 13.2.9,13.6.22,13.11.29,37.7.5,39.7.17, 39.9.29,40.4.4,43.11.24,43.12.1
○シュルツェ,エミール・アウグスト・ヴィルヘルム博士・東京医学校教師夫人	43.11.24
○シュレーダー 一等機関士	41.3.4

○シュレム嬢（在ベルリン）	40.9.19,43.1.14~21,43.7.19,43.10.3
○シュレモン嬢	40.5.29
○シュレーン ナポリ大学病理解剖学教授	41.1.21
○シュロース	17.8.16
ショー,バーナード劇作家	41.12.13
聖徳太子	37.4.17.18
○ショットン医師	43.7.19
○ショルツ横浜德国海軍病院長	41.5.7,41.5.15
シラー,ヨハン・クリストフ・リリードヒテ詩人	45.6.23
○シリング博士・伝染病研究所員	41.11.27,41.12.1~5,42.4.5
○シリングス フラッシュ撮影者	42.4.4
清国皇帝（徳宗）	33.7.22,33.8.22.23
○シンツィンガー,アルベルト德国公使館付武官・日本領事	33.8.4,39.7.17,41.3.6,41.3.7,43.11.24
○シンツィンガー,アルベルト德国公使館付武官・日本領事夫人	33.8.4,43.11.24
○シンツィンゲル	37.8.2,37.9.29,37.10.20,37.11.29,38.1.22,38.2.26
○シンツィンゲル夫人	37.8.2,38.1.22,38.2.26
ジェームス『タイムス』紙通信員	37.7.3
ジーケ神話学会主宰者	43.1.14~21
○ジッヘル大使館付海軍武官・海軍大将	39.5.17
○ジーバー（在ハンブルク）	40.9.18
○ジャーディン海軍大尉	37.1.2
○ジュムーラン画伯	28.11.18
醇親王載灃	34.9.5,41.11.17,44.11.17
ジョージ五世英国王妃	43.5.3~13
ジョレス,ジャン・レオン社会民主主義者	40.8.22
○ジョンストン,ハリー探検家	43.10.15,44.11.2
ジョン・セント・ジョン	17.9.28
ジラード	40.8.22

ジンガー (在ヴィーン,「みかど」店主)	42.3.13
○ジンガー,パウル社会民主主義者	40.8.22
神功皇后	36.2.17
ジンニヒ似非象嵌細工師	17.9.10
神武天皇	33.2.8,35.2.11,37.2.11

ス

○末川夫人	13.7.13
○末川令息	13.7.13
末松男爵・前内相 (謙澄)	37.2.9
○スカルタック夫人	17.9.28
○杉子爵 (孫七郎)	33.5.26
○杉子爵 (孫七郎) 令息	37.5.7
スクリードロフ旅順司令官	37.4.24,37.6.2,37.6.15,37.6.16,37.6.18, 37.6.20,37.7.10
○スクリバ,ユリウス・カール東京帝国大学医科大学外科学教授	17.8.16,24.5.18,26.8.17,37.12.8,37.12.25,38.1.2, 38.1.3,38.1.6,38.1.10,38.2.25,41.3.6,41.4.16,42.2.7
○スクリバ,ユリウス・カール東京帝国大学医科大学外科学教授夫人 (ヤス)	41.3.6,41.6.21
○スクリバ,マツ	41.3.6,41.6.21
○スクリバ,エミール	41.3.6,41.6.21,42.4.5
○スコット,G.	41.3.6,41.3.26,41.6.6
○スコット,G.夫人	41.6.6
スタケルベルク	37.6.20
スタルク提督・旅順司令長官	37.2.19
スティーヴン (フォン)	17.8.16
○ステェヴンス韓国外交顧問	37.9.5,37.10.31
ステッセル中将	37.5.24,37.8.8,37.8.19,37.9.2,37.9.4,37.10.16,

37.11.15,37.12.2,37.12.17,37.12.18,38.1.2,38.1.6,  
38.1.11,38.1.14,38.1.16,38.1.28,38.4.14

ステッセル中将夫人	38.1.14
○ステッテン少佐	37.7.18
ステッド,ウィリアム・トーマス平和運動家	45.4.1
○ストランジ青年	38.5.10
○ストルーベ駐日俄国公使夫人	13.2.9
○ストルーベ駐日俄国公使令息	13.2.9
○ストレート	37.11.22
ストレート令母	37.11.22
○ストーン	37.10.31
スペンサー,ハーバート	15.10.12
○スミス歯科医(在横浜)	41.4.13
スミルノフ	38.4.14
スリコフ,ヴァシーリー画家	41.7.5,41.7.7,41.7.9
スワロフ	41.7.9
ズスドルフ教授	42.6.12
セ	
盛 運輸大臣(宣懐)	44.8.21
西太后 咸豊皇帝妃	33.8.22.23,37.8.2,41.11.17
セガンティーニ,ジョヴァンニ画家	42.10.24
セガンティーニ,ジョヴァンニ画家令嬢	42.10.24
○関	41.3.7
セコイエ チェロキー指導者	17.9.13
セバスティアン	17.9.15
セルギウス大公	38.1.20,38.2.18
○セルマ	17.9.28
宣統皇帝溥儀	41.11.17,44.11.2,44.11.17
○ゼーガー(在ブレスラウ)	43.7.19

○ゼーマン,エーリヒ	42.11.11
○ゼラー 美国学者	39.5.24
○ゼラー 美国学者夫人	39.5.24
○ゼーラー 教授	41.12.11
○ゼーリヒ	41.1.25,41.2.24,41.3.4
○ゼーリヒ夫人	41.2.24,41.3.4

## ソ

ソイル,フリー	17.9.28
○副島内相 (種臣)	14.5.12,25.3.12
○副島内相 (種臣) 令息	14.5.12
○ソット 駐日墨西哥国大使	41.3.26
○蘭田博士・仏教大学総長 (宗恵)	38.4.26,38.5.13
孫文 臨時大統領	44.8.21,44.11.2,44.12.27
蔵相 (曾祢荒助)	37.1.27
○ゾマー嬢	41.2.29
○ゾンターク女史	36.4.27

## タ

○タイラー	36.6.10
○高木画家	36.5.9,36.6.3,36.6.6,36.6.10,36.6.23
○高木兼寛男爵・海軍軍医総監	38.3.4,38.5.27,41.3.9,41.4.21,41.5.18
○高木内務省防疫課長 (友枝)	44.8.21
○高島 (嘉右衛門)	41.4.18,41.4.19
○高島 (嘉右衛門) 夫人	41.4.19
高島 (小金治)	34.9.3
高島 (鞆之助)	22.10.27
○高田カミキチ (高田慎蔵婿養子)	41.6.18,43.7
○高田カミキチ (高田慎蔵婿養子) 夫人	43.7
○高田クニ	41.3.19

○高田畊安教授・南湖院設立者	44.8.21
○高田慎蔵 高田商会開業者	22.4.20~22,36.12.23,37.6.16,38.1.22,41.3.6, 41.3.19,41.3.26,41.5.8,41.5.17,41.6.18,42.8.20, 43.7,45.2.24
○高田慎蔵 高田商会開業者令息	38.1.22
○タカニシチョウジロウ (ベルツ土地購入名義)	41.6.14
○高橋 考古学者	41.4.1,41.4.21
○高橋順太郎教授	34.11.22
○高安六郎博士	39.5.3
○高義 駿式部官	36.5.5
○滝 (ベルツ家車夫)	37.2.6,37.6.20,41.3.6
○滝 (ベルツ家車夫) 夫人	37.6.20
○滝 (ベルツ家車夫) 令息	37.2.6,37.6.5,37.6.20,37.12.12
○田口和美教授	35.4.2,37.2.9
○田口,G.	41.3.6
○田中軍医補	43.10.3
○田中子爵・宮相 (光頭)	33.1.20,33.2.8,33.8.15,37.2.11,37.3.2,37.3.3, 37.3.14,38.1.10,38.1.11,38.6.9,40.3.21, 41.5.19,2.1.24
○田中子爵・宮相 (光頭) 夫人	37.2.11,37.3.14,38.1.11
田中司法相 (不二麿)	24.6.2
○タナギ	17.8.16
○タノスケ	13.3.20
○タノスケ令母	13.3.20
○ターフェル博士	41.12.1~5
○ターフェル博士令母 → ○ロイシュレ嬢 (ターフェル博士令母)	
○ターフェル上級建築監督官	42.2.3,42.4.30,43.1.24
○ターフェル上級建築監督官夫人	42.2.3,42.4.30,43.1.24
タフト,ウイリアム・ハワード 美国大統領	45.4.1
○タフト将軍・前菲律宾国総督	37.1.4,38.6.23

○タマサキ	17.8.16
○田村参謀次長（怡与造）	34.9.16,36.9.30,37.9.5,37.10.13
田村参謀次長（怡与造）令息	37.9.5
ダーウィン	34.11.22
ダヴィドフ	17.8.16
ダウム（フォン）	41.1.25
蛇足（曾我一）唐絵画家	38.4.26
○ダッテン クンスト&アルバース社支配人	41.6.24
○伊達家姫君（富子）	21.12.15
○伊達侯（慶邦）令息	12.4.2
○ダヌタン,アルベール駐日比利时国公使	33.8.4,37.2.5,37.3.14,37.11.28,41.4.19,41.5.8
○ダヌタン,アルベール駐日比利时国公使夫人（ダヌタン,エリアノーラ・メアリー）	33.8.4,37.3.14,41.5.8
ドライラマ（トゥブテン・ギャツォ）	37.10.1
ダンヴィユ,G.	41.12.7
○ダンカン『ホンコン・テレグラフ』紙元主筆次席	38.6.23
○ダンクヴェルツ（マルィシュ伯父）	41.1.21
○団十郎（市川一）	12.3.1,36.9.20,41.4.18
団十郎（市川一）令尊	36.9.20
○団蔵（市川一）	41.4.18
ダンテ	42.10.16
○ダンフィ嬢	17.8.16
○ダンブロ駐日奥地利国大使	41.3.26
チ	
○チーヴァー博士	17.9.28
○チェンバレン,バジル・ホール	22.10.18,41.1.31,41.8.1,1.8.15
チェンバレン,ヒュートン・スチュアート	35.1.1,35.1.2
○チートハム	33.4.20



○千葉 報知新聞編集委員	41.6.10
駐韓俄国公使 (A.パウロフ)	37.2.9
駐清俄国公使 (P.レッサル)	37.8.1
駐日奥地利国公使 (アンブロー, アデルバート)	37.2.7
○駐日荷蘭国公使 (シュヴェールツ男爵)	37.11.28
○駐日清国公使 (裕庚)	28.11.18
○駐日清国公使 (裕庚) 夫人	28.11.18
○駐日清国公使 (裕庚) 令嬢	28.11.18
○駐日清国公使 (楊枢)	38.2.7
○駐日西班牙国公使 (ドン・ルイス・デ・ラ・バレラ・エ・リエラー)	37.11.28
○駐日德国公使 (グートシュミット男爵)	27.3.22
兆殿司	38.4.26
○珍田男爵・駐徳日本国大使 (捨巳)	37.3.14, 41.12.7, 41.12.13
○珍田男爵・駐徳日本国大使 (捨巳) 夫人	37.3.14, 41.12.7, 41.12.13

## ツ

○ツァイアー (フォン)	43.4.19, 2.3.6, 2.3.25, 2.4.5
○ツァイアー (フォン) 夫人	43.4.19, 2.3.6, 2.3.25, 2.4.5, 2.4.20
ツァイス, カール光学ガラス製造工場主	1.7.31
○ツァイバー (フォン) 大蔵大臣	40.10.4
○ツァイバー (フォン) 大蔵大臣夫人	40.10.4
○ツァッペ元横浜総領事夫人	42.6.15
○ツァリンスキー博士	41.6.24
○ツィリヒ (在マニラ)	41.2.11, 41.2.24, 41.3.4
ツィリング枢密顧問官	44.5.27~29
○ツィントグラフ博士	44.3.8
○ツェッペリン, フェルディナント伯爵・飛行船製造者	41.8.4, 41.8.17, 43.4.15, 44.3.15, 44.3.29
○ツェトキン, クララ共産主義者	40.8.22
○ツェトマイアー (在ロンドン)	40.3.22

○ツェルヴェク夫人	41.10.1,41.10.11
ツェルニビー大佐	36.12.27
○ツカ	43.6.20
○辻宮内省雅楽課伶人（則承）	43.5.3～13
○都築博士・軍医（甚之助）	45.5.26
○都築（井上馨娘婿馨六）	34.9.8,41.3.26,41.4.12,41.5.5
○坪井教授・人類学者（正五郎）	37.6.5, 41.5.18
○ツラダ博士・呉病院長	41.3.9

## テ

○ティーゲル生理学教師	12.4.2,12.10.26
ティツィアン,ヴェッチェリ画家	41.7.9,43.7.19
○ティーツェ帝国地質学研究所長	42.3.12,42.3.13
○ティール公使館付武官	33.8.4,36.11.13,37.7.18,38.1.22,38.6.7,41.3.4, 41.4.1,41.12.11
○ティール公使館付武官夫人	33.8.4,36.11.13,41.4.1
ティルピッツ提督	37.2.19
○ティルマンス	38.9.1,39.5.19
○ティレニウス	41.8.4,43.7.19
ティントレット画家	17.9.15
テオドール（フォン）バイエルン,カール眼科医	44.3.15,45.5.26
○テオドール（フォン）バイエルン,カール眼科医令嬢	44.3.15,45.5.26
○テクラ（テュービンゲン大学教授ヘーゲルマイアー令嬢・ベルツ舎弟カール夫人）	40.6,40.9.10,41.8.17,41.8.23,42.1.23,42.8.20, 43.5.3～13,43.8.30～9.11,2.4.25
○テグナー	43.3.6
○テグナー夫人（エルドリッジ,ジェームス・スチュアート医師令嬢）	43.3.6
○テグナー令尊	43.3.6
テス	17.9.20
テラー モルモン教首長	17.9.15

○寺内陸相・首相（正毅）	37.4.9,37.6.7,37.9.5,37.10.20,37.12.8, 38.3.4,38.3.9,38.3.23,41.3.7,41.3.29
寺内陸相・首相（正毅）令息	37.9.5
○寺島伯爵（誠一郎）	38.5.28
○寺島伯爵（誠一郎）夫人	38.5.28
○寺田文部参事官	37.4.22
テレジア, マリア	42.3.6
○テレマン博士	45.6.23
○天皇（明治天皇）	9.11.3,10.2.23,12.5.6,12.7.10,21.12.15,22.1.12, 22.2.11,22.4.15,22.6.25,23.11.29,24.3.7,24.5.18, 24.6.6,26.11.28,33.1.17,33.1.20,33.3.23,33.3.24, 33.5.9,33.5.10,33.7.14,33.7.22,33.8.15,34.9.16, 35.4.2,35.7.11,35.11.15,36.9.25,37.1.1,37.2.11, 37.2.12,37.3.2,37.4.12,37.4.24,37.6.20,37.8.13, 37.8.19,37.10.12,37.11.3,37.11.5,37.11.29, 37.12.2,38.1.2,38.1.5,38.1.6,38.1.11,38.1.24, 38.2.7,38.2.16,38.3.19,38.3.29,38.4.3,38.6.3, 38.6.9,40.11.15,41.3.26,41.4.12,41.4.23, 41.5.19,41.5.20,42.10.29,45.7.26,45.7.28, 45.7.30,1.7.31,1.8.15
○天皇（大正天皇） → ○皇太子（明宮嘉仁・大正天皇）	
ディアス, ポルフィリオ墨西哥国大統領	44.3.27
○ディースト（フォン）将軍	43.8.7~14
○ディースバッハ伯爵・法国公使館員	12.6.29
ディーズレーリ, ベンジャミン英国首相	41.1.28
ディッパー博士	41.3.19
ディートリヒ画家	17.9.15
ディーヒトル オルテンシュタイン・ホテル所有者	42.10.7
○ディーフェンバッハ上級参事官	2.1.15
○デーヴィス医学博士	41.4.22,41.5.19

○デーヴィス地質学者	41.8.23
○デーヴィス地質学者夫人	41.8.23
○デ・ヴェッキ博士	17.8.16
○デ・サンチス大佐夫人	38.1.11
○デシュワル (ドゥ・ピュイ義理令息)	43.8.7~14
デッテルライン深海研究者	37.11.29
デートリンク税関監督官	27.11.30
○デニカー (在パリ)	41.8.23
○デニスン,ヘンリー・ウィラード	37.5.8,37.9.1,37.9.12,37.10.31,38.2.1,38.3.9, 41.4.1,41.4.19
○デニスン,ヘンリー・ウィラード夫人	13.7.13
○デーニッツ,フリードリヒ・カール・ヴィルヘルム帝国公衆衛生局長	40.11.1
デフレガー,フランツ・フォン画家	17.9.15
○出淵書記官	41.12.7
○出淵書記官夫人	41.12.7
○デーモン宣教師	17.8.16
○デュアランド (在横浜)	17.8.16
○デュアランド夫人 (在横浜)	17.8.16
○デュバイユ駐日法国公使	35.7.4
デュムティエール教育部長	35.12.18,36.1.2
デルサルト,フランソワ演劇家	40.9.18,42.4.30
○出羽海軍提督 (重遠)	41.4.14
○デルンブルク植民地総督	39.11.28,45.2.14

ト

東京市長 (尾崎行雄)	38.3.18
東京帝国大学総長 (渡辺洪基)	22.10.18
(山川健次郎)	34.9.7,34.11.22,35.7.3,35.7.11,38.1.6
○東宮・皇太子 (嘉仁)・大正天皇	28.8.11,28.8.12,28.8.21,28.9.23,29.2.28,33.1.2, 33.1.5,33.2.8,33.2.11,33.3.23,33.5.9,33.

5.10,33.5.11,33.5.12,33.8.4,34.9.15,34.9.16,34.9.28,  
34.10.4,34.10.5,34.10.28,35.3.6,35.11.15,37.1.1,  
37.2.12,37.4.20,37.4.24,37.5.6,37.6.18,37.10.9,  
37.11.3,37.12.2,38.1.22,38.2.3,38.3.19,38.3.25,  
38.3.26,38.3.31,38.4.26,38.5.13,38.6.6,40.11.15,  
41.2.18,41.3.26,41.3.30,41.4.1,41.5.19,41.5.20,  
42.8.20,2.1.24,2.5.23

○東郷提督・海軍大将（平八郎） 37.2.11,37.4.9,37.4.24,37.5.5,37.5.12,37.6.7,  
37.6.27,37.6.29,37.7.3,37.7.10,37.8.14,37.12.25,  
37.12.30,38.1.5,38.6.3,41.4.14

○トク,エルヴィン（ベルツ令息） 25.8.27,25.9.10,26.8.17,26.8.21,26.12.24,27.7.25,  
27.9.8,28.8.23,29.2.28,29.3.1,29.3.2,33.4.6,  
33.4.7,33.4.8,33.4.17,34.11.2,36.5.23,37.5.5,  
37.9.11,37.10.11,38.6.9,38.7.19,38.7.22,39.4.26,  
39.7.18,39.7.23,39.8.6,39.8.9,40.2.12,40.3.23,  
40.5.20,40.6,40.8.22,40.9.6,40.9.14,40.11.15,  
40.11.16,41,41.1.27,41.2.3,41.3.26,41.4.1,41.4.14,  
41.4.24,41.5.17,41.6.14,41.6.15,41.7.4,41.7.5,  
41.7.20,41.8.1,41.8.4,41.8.17,41.8.23,41.10.1,  
41.10.3,41.10.11,41.10.20,41.12.1~5,41.12.27,  
42.2.1,42.2.7,42.4.5,42.4.9,42.4.13,42.4.24,  
42.6.12,42.8.20,42.8.26,42.9.14,42.9.15,42.9.30,  
42.10.3,42.10.4,42.10.7,42.10.12,42.10.16,42.11.11,  
42.12.1,43.1.12,43.1.24,43.2.5,43.2.21,43.2.22,  
43.2.24,43.3.6,43.3.23,43.4.5,43.4.27,43.7.19,  
43.8.7~14,43.8.8,43.8.13,43.8.30~9.11,43.10.3,  
43.10.15,43.11.24,43.12.6,44.1.11,44.7.30,45.2.19,  
45.5.26,1.7.31,1.10.3,1.10.21,1.11.22,2.3.8,  
2.3.13,2.3.18,2.3.30,2.4.4,2.5.8,2.5.23

○トーク大尉 37.11.5

徳川龜之助	22.2.11
○徳大寺侯爵・内大臣（実則）	33.1.2,34.9.16,37.4.24
土佐侯（山内豊範）	12.7.12
トーデ,H.詩人	43.2.16,43.3.29
○土肥慶蔵教授	38.1.6,43.10.3
○トプラー教授（在チューリヒ）	40.5.12,41.1.23,41.1.27
トーマ,ルートヴィヒ劇作家	42.3.13
戸水教授（寛人）	37.8.26
○富田柔術師範（常次郎）	36.12.12
○戸山教授（正一）	34.9.7
○トラウム技師	41.3.25
トル伯爵	36.2.1
○トルッベル膠州総督・海軍大将	36.7.15~27,36.11.13,37.5.21,39.5.17
○トルト教授（在ヴィーン）	38.9.1,42.3.6
○トルト教授甥（在ヴィーン）	42.3.6
○トレーガー	44.2.17,1.10.14
トレチャコフ兄弟	41.7.5
○トレール	17.8.16
トロウブリッジ大尉・公使館付海軍武官	37.3.26
○トロムラー公使館付武官	36.11.13
○ド・アッダ侯爵夫人	37.11.16
ドゥエス=デッカー,エドワルド → ムルタトゥーリ（ドゥエス・デッカー,エドワルド）作家	
○ドゥ・ピュイ弁護士・考古学者（在リューティヒ）	43.8.7~14
○ドフライン博士	37.11.29
○ドラ	17.9.28
ドライヴァー	37.6.18
ドラゴミロフ総司令官	37.10.1,37.10.16
○ドンドルフ彫刻家	42.3.16

ナ

○ナイ,A.	41.8.23
○ナウニン	40.2.12
○ナウニン夫人	40.2.12
ナウマン教授	43.7.19
○ナウマン,エドムント日本地質調査部長官	9.6.26,9.11.30,12.6.1,12.7.6,12.8.4,39.5.15,41.10.20
長井長義	35.4.2
○長崎式部官(省吾)	37.3.2,37.3.3
長崎知事(荒川義太郎)	38.1.16
長崎特派員	38.1.28
○長島医師	37.9.16,37.9.22,37.11.2
○中西亀太郎京都医科大学教授	38.4.11,38.4.13,41.6.21
○中村小田原郡長	22.8.12
中村将軍(覚)	37.12.24
長森某(藤吉郎)	37.7.26
○中山侯爵・東宮大夫(孝鷹)	38.2.3,38.6.6,41.5.19,41.5.20
○長与又郎博士	38.3.16
○長与又郎博士令妹	38.3.16
ナジム・パシャ	2.3.8
○ナート ハンブルク・アメリカ汽船取締役	41.1.27,41.3.4
○ナート ハンブルク・アメリカ汽船取締役夫人	41.3.4
○ナノルネ海軍大佐	41.3.9
○ナピーア英国公使館員	22.10.18
○ナピーア英国公使館員夫人	22.10.18
○ナープホルツ	45.4.28
○鍋島侯爵(直大)	12.7.9,34.11.25
○鍋島侯爵(直大)夫人	12.7.9,33.8.3,37.11.16
○鍋島侯爵(直大)令息	12.7.9,13.7.13
○鍋島侯爵(直大)令嬢	33.6.12

○鍋島侯爵（直大）令弟	12.7.9
○鍋島侯爵（直大）令弟夫人	12.7.9
鍋島外務省職員	38.3.8
○ナホート博士	39.5.19
ナポレオン一世	37.4.22,37.6.20,38.4.26,38.5.12,41.1.16,41.7.9
○南波医師	41.3.9,41.6.7

## ニ

○二位局（明治天皇令母中山慶子）	26.11.28,33.1.17,33.1.20,33.5.9,35.11.15
○ニーヴェンフェイス（在ライデン）	40.9.18
ニコライ大公・総司令官	37.10.3
ニコラス僧正	37.3.6
ニコラス二世俄国皇太子・皇帝	24.5.11,24.5.18,36.12.23,37.1.19,37.2.13, 37.9.28,37.10.7,37.10.16,37.11.15,38.1.6, 38.1.14,38.1.25,38.2.4,38.2.5, 38.2.7,38.2.26,38.3.8,38.3.29
ニコラス二世俄国皇后	36.12.23
ニコラス二世俄国皇太子	37.8.26
○ニコルソン将軍	37.5.24,37.7.23,37.9.29,37.11.5
西陸軍大将（寛二郎）	37.6.7
西野（文太郎）	22.2.16,22.3.19
○ニッケル	42.2.3,44.3.20
○ニッケル夫人	42.2.3,44.3.20

## ネ

○ネッター,クルト	9.6.26,12.2.2,12.3.9,12.6.1,12.7.6,12.8.4,13.3.20, 13.6.22,17.9.12,37.12.25,38.8.29,38.9.1,39.5.15, 39.11.15~17,40.4.4,40.4.5,40.10.4,41.8.4,41.10.20, 42.2.7,42.12.31,44.1.27
○ネッター,クルト夫人	38.9.1,41.8.4,42.2.7



○ネッター,イルゼ	39.5.15,42.2.7
○ネッター,エリカ	39.5.15,42.2.7
○ネッター,ヴィリバルト	42.2.7
○ネッター,クルト愛人	12.2.2,12.2.22,12.3.9
○ネッター,クルト兄弟	42.2.7
○ネッター,クルト姉妹	42.2.7
○ネフ博士(在チューリヒ)	45.4.24
○ネフ博士夫人(在チューリヒ)	45.4.24
○ネフ博士令嬢(在チューリヒ)	45.4.24
ネボガトフ提督	38.6.23
○根本 正代議士	33.6.5
ネルソン提督	37.2.19

ノ

○ノイサー教授	42.3.12
乃木将軍・陸軍大将(希典)	37.6.2,37.6.4,37.6.7,37.9.4,37.12.18,38.1.2,38.1.5, 38.1.6,38.1.11,38.1.16,38.2.28,38.3.11,38.6.3
乃木将軍・陸軍大将(希典)令息	37.6.2,37.6.4,38.1.6
○野津将軍・元帥(道貫)	13.6.22,13.6.23,37.6.2,37.6.7,37.9.4,37.9.5
○ノブ(バイル令孫)	41.3.19,41.5.17
○ノホト船舶・熱帯衛生研究所長	41.12.1~5,41.12.13,43.6.2
○野村子爵(靖)	33.5.26
○ノールデン(フォン)教授	42.3.6,42.3.12
○ノールデン(フォン)教授夫人	42.3.12
○ノールデン(フォン)教授令息	42.3.12
○ノールデン(フォン)教授令嬢	42.3.12
○ノールデン(フォン)ハンス博士	2.1.16
ノルマン法国新聞報道員	21.12.19

ハ

ハイコマー画家	40.8.22
ハイゼ造船技師	9.11.30
○ハイゼ, ヴィルヘルム ローデ商会技師	41.5.8, 41.6.21, 43.7, 45.5.26
○ハイゼ嬢 (オヤス)	41.5.8, 41.5.17, 43.7, 45.5.26
ハイゼ (フォン), パウル・ヨハン作家	43.2.16, 43.3.29
ハイデブラント (フォン)	44.11.27
ハイネ, ハインリヒ	44.3.27
○ハイムベルガー博士・公証人	40.11.16, 42.9.15
○ハイラー	39.7.17, 43.12.1
○ハインリッヒ親王	12.6.1, 12.6.6, 12.11.16~23, 33.8.22.23
ハインリヒ大公	42.10.16
○ハウザー考古学者 (在バーゼル)	41.8.4
○ハウス, デイジー	41.8.23
○ハウフ (在ホイマーデン)	44.4.18
ハウプトマン, ゲルハルト劇作家	41.11.30
白礼雲	37.3.8
○ハゲ	43.10.3
○ハーケ (在ブラウンシュヴァイク)	41.8.4
○ハーゲン (在ハンブルク)	43.7.19
○ハーゲン, B. フランクフルト民族学博物館長・宮廷顧問官	39.11.15~17, 40.6, 41.8.4, 41.10.20, 44.5.27~29
○ハーゲン, B. フランクフルト民族学博物館長・宮廷顧問官夫人	40.6, 41.8.4, 41.10.20
○ハーゲンベック, カール動物学者	41.12.1~5
○橋本男爵・子爵・軍医総監・宮中顧問官	13.6.22, 13.6.23, 22.10.18, 25.8.28, 26.11.28, 33.2.8, 33.3.23, 33.8.4, 34.10.4, 34.10.5, 35.4.2, 37.3.2, 37.3.6, 37.5.26, 37.11.12, 37.12.2, 37.12.12, 38.1.22, 38.3.4, 38.3.26, 38.5.19, 38.6.9, 41.3.6, 41.3.19, 41.5.19, 41.5.20, 41.6.17, 42.3.14, 42.12.31

ハース	40.5.1
○ハース牧師	38.1.22,38.6.3,41.4.22
○ハース牧師夫人	38.1.22
長谷川陸軍大将 (好道)	37.6.7
○ハッチンソン海軍大佐	37.11.5
○ハッツフェルト伯爵	36.11.13,37.11.12,37.11.20,37.12.4,37.12.15, 37.12.19,38.1.6,38.1.22,38.2.16,39.11.29
○ハッツフェルト伯爵夫人 (青木ハナ)	38.2.16,39.11.29
ハッツフェルト伯爵令尊	39.11.29
○八田書記官	41.12.7
○八田書記官夫人	41.12.7
○ハーディー	17.9.28
○ハートレー牧師	17.9.15
○ハナ (ベルツ令室荒井花子)	17.8.16,17.9.12,22.5.23,22.6.24,25.8.27,25.9.10, 26.8.17,26.8.21,26.12.24,27.7.25,27.9.8,28.8.23, 29.2.28,29.3.1,29.3.2,33.4.6,33.4.7,33.4.17,33.8.15, 34.9.3,34.11.2,34.11.29,36.12.27,37.4.20,37.5.5, 37.5.21,37.8.19,37.10.17,37.10.23,37.10.28,38.1.1, 38.1.5,38.1.22,38.2.3,38.4.12,38.4.15,38.5.27,38.6.1, 38.6.3,38.6.5,38.6.6,38.6.9,38.7.19,38.7.22,39,39.4.26, 39.5.22,39.7.17,39.7.18,39.7.23,39.8.5,39.8.6,39.8.9, 39.10.10,39.10~11,39.11.15~17,39.11.29,39.12.8, 40.3.23,40.4.5,40.5.22,40.5.24,40.5.25,40.5.26, 40.5.27,40.5.28,40.5.30,40.6,40.9.14,40.10.4,40.11.1, 40.11.16,41,41.1.25,41.1.27,41.2.3,41.2.11,41.2.19, 41.2.24,41.3.22,41.3.26,41.4.1,41.4.14,41.4.20, 41.4.24,41.6.14,41.6.15,41.6.19,41.6.23,41.6.24, 41.8.1,41.8.17,41.8.23,41.10.2,41.11.29,41.12.7, 41.12.13,42.1.23,42.2.1,42.2.20,42.2.22,42.4.9, 42.5~6,42.6.17,42.6.21,42.9.30,42.10.3,42.10.4,

42.10.7,42.10.16,42.10.25,42.10.29,42.12.1,  
 43.1.24,43.3.29,43.4.27,43.5.3~13,43.6.2,  
 43.6.3,43.6.20,43.7,43.8.13,43.8.30~9.11,  
 43.10.3,43.12.6,44.1.7,44.1.10,44.1.13,44.2.9,  
 44.2.11,44.2.16,44.3.17,44.3.19,44.5.27~29,  
 44.6.17,44.6~7,44.7.30,44.8.21,44.11.17,  
 45.3.4,45.4.1,45.4.28,45.5.26,1.8.16,1.9.29,  
 1.10.11,1.10.14,1.10.16,1.10.27,1.10.28,1.11.2,  
 1.11.13,2.1.13,2.1.19,2.1.24,2.2.15,2.2.22,2.4.10

- 花房男爵（義質） 41.5.19
- ハビヒ 42.3.16
- ハーベラー博士・カメルーン政府顧問医師  
 38.9.1,39.7.17,40.6,41.10.20,42.3.26,42.4.4,42.4.5
- ハーベレル教授 37.7.18,37.11.29
- 浜尾 新帝国大学総長 41.4.16
- ハマル 43.8.7~14
- ハミルトン将軍 37.3.26,37.10.17
- 林韓国駐在公使（権助） 33.6.6,37.7.26
- 林伯爵・駐日德国大使館付参事官 41.3.26
- 林伯爵・駐英国公使・外務大臣（董） 33.4.20,36.4.27,37.10.20,37.11.15,37.11.29
- 林伯爵・駐英国公使・外務大臣（董）夫人 41.4.27
- 原田男爵（一道）未亡人（バイル令嬢） 37.12.25
- 原田熊雄 41.3.19
- 原田テル（原田豊吉東大地質学科教授未亡人） 41.3.19,41.5.17
- 原田ノブ 41.3.19,41.5.17
- 原田夫人 17.8.16
- ハリス,タウンSEND初代駐日美国総領事 37.1.18
- ハリス,ラザフォード博士・元医師 37.8.22,37.11.25
- ハリス,ラザフォード博士・元医師令息 37.8.22
- ハルス,フランツ肖像画家 43.7.19

ハルデン,マクシミリアン評論家	39.11.27,41.10.20
○ハルトマン博士・人類学者	43.9.29
○ハルトマン,アルトゥール耳鼻科教授(在ベルリン)	39.7.23,44.7.30
○ハルトランフト フロイデンシュタット市長	40.6
ハルトレーベン,オットー・エーリヒ作家	43.3.29
○ハワード	37.10.31
○ハーン	40.5.4
○ハーン間門ホテル主人	37.10.5,37.11.12
ハンチュ博士	43.12.6
○ハント,レイ	36.5.4
ハンニバル カルタゴ闘将	41.1.16
バイエルン,カール・テオドール侯・眼科医	45.5.26
バイス	17.8.16
○バイル	9.6.26,11.2.23,11.3.17,12.3.1,12.6.1,12.6.6, 12.7.6,12.7.12,12.7.27,12.8.4,12.10.20, 13.3.20,13.7.13,13.11.18,14.3.12,37.12.25, 41.3.19,42.2.7,44.1.27
バウアー薬剤師	17.8.16
バウエル	33.8.4,36.5.12
○バウディッチ,H.博士・生理学教授	17.9.28
○バウディッチ,H.博士・生理学教授夫人	17.9.28,17.10.6
○バウディッチ,エセル	17.9.28
○バウディッチ,セルマ	17.9.28
○バウディッチ,ドラ	17.9.28
○バウディッチ,ハーディー	17.9.28
○バウディッチ,ファニー	17.9.28
○バウディッチ,リリー	17.9.28
バウディッチ老(バウディッチ,H.令尊)	17.9.28
○バウマン	36.5.9,36.5.19
○バウマン,P.	42.8.26

○バウマン,P.夫人	42.8.26
○バウマン,P.令息	42.8.26
バウマン,P.令母	42.8.26
○バクメテフ駐日俄国大使	41.3.26,41.4.15
○バクメテフ駐日俄国大使夫人	41.3.26,41.4.15
○パークレー英国公使館一等書記官	37.12.4,37.7.20,37.8.2,38.2.1
○パークレー英国公使館一等書記官夫人	37.12.4
○バシュヴィッツ嬢	41.2.24,41.2.29
バスティアン,アドルフ民族学者・民族博物館長(在ベルリン)	39.11.27
バット少佐・タフト大統領側近	45.4.1
バトラー将軍	17.9.20,17.9.28
○バートン	41.6.21
○バナーマン卿	37.1.2
○バーネット将軍	38.4.11
バプロザボフ	37.1.19
○バルストウ大尉	36.6.6,36.6.8
○バルツァー植民地局参事官兼技官	40.5.26,42.3.26
バルツァー植民地局参事官兼技官令嬢	40.5.26
○バルト シュヴェーリン教区監督	44.2.3
バルパロッサ → フリードリヒー世(バルパロッサ)	
○バーレー従軍記者	37.1.8,37.7.3
○パウリ	41.2.29
○パウリーネ(ベルツ叔母)	40.9.9
○パウル	36.5.12
○パウルス德国商人	35.12.31
パウルセン教授	38.1.11
○パウ・ルン博士	40.11.1,41.1.16,41.1.21
○パウ・ルン博士夫人	41.1.16,41.1.21
パウロ	37.9.16
パウロフ駐韓俄国弁理公使	37.1.3,37.2.9

パーカー, グルベルト (ジョージ) 作家	41.1.30
パークス, ハリー・スミス 駐日英国公使	1.11.18
○パジェ	27.11.30
○パストール, W. 考古学者	43.5.3~13
パストール	34.11.22
○パツァウレク 産業博物館長 (在シュトゥットガルト)	42.3.16, 42.3.20, 43.8.30~9.11
○パペリール博士	41.4.1
パペリール博士令嬢	41.4.1
○パラヴィチーニ	41.4.28
パルゼヴァル (フォン), アウグスト 飛行船設計者 (在ベルリン)	41.8.17
パワーズ, ハイラム 彫刻家	17.10.8
ヒ	
土方伯爵 (久元)	33.2.8
ヒッデマン 画家	17.9.15
ヒデ	29.2.28
秀吉 (豊臣一)	36.10.12, 37.6.7, 38.4.15, 38.4.26, 43.6.20
秀吉 (豊臣一) 夫人	38.4.15
秀頼 (豊臣一)	38.4.26
ヒポクラテス	34.11.22
ヒューバー	35.12.12
○ヒューブナー伯爵・元帥	38.5.28
ヒューブナー, カール・ヴィルヘルム 風俗画家	17.9.15
○ヒューム大佐・公使館付武官	37.1.2
ヒューム大尉	37.11.16
○ヒューム大尉夫人	37.11.16
○平井軍医正	37.10.20
○平井毓太郎 京都医科大学教授	25.8.28, 38.4.13, 41.6.7, 41.6.21
ヒル 画家	17.9.15

- ヒルガー教授・彫刻家 45.6.23
- ヒルゲンドルフ,フリードリッヒ博士 9.6.26,9.11.25
- ヒルス嬢 17.8.16
- ヒルデ (ベルツ舎弟ロベルト令嬢,マイアー・マックス令室)  
39.7.17,39.10~11,40.2.12,40.3.23,40.4.5,40.6,  
40.10.4,40.11.16,41.3.22,41.6.12,41.7.12,  
42.2.21,42.3.20,42.4.13,43.6.20,43.12.6,  
44.3.16,44.6.6,45.3.4,1.12.25
- ヒルデ (ベルツ舎弟ロベルト令息ラインハルト令嬢) 39.10~11,43.6.20
- ヒルデブラント医学部教授 (在マールブルク) 41.8.23
- ヒルデブラント医学部教授夫人 (在マールブルク) 41.8.23
- ヒルデルスハイマー 44.2.11
- 広沢若伯爵 (金次郎カ) 37.12.18,38.1.16
- 広沢若伯爵 (金次郎カ) 岳父 38.1.16
- 広重 (安藤一) 37.8.22
- 広瀬中佐 (武夫) 37.4.12
- ヒンツマン校長 42.2.7
- ビゲロウ博士 17.9.28
- ビゲロウ博士令息 主任執刀医 17.9.28
- ビスマルク,オットー德国初代宰相 12.9.12,17.9.28,37.1.6,37.3.14,38.2.8,39.10.10,  
40.5.22,41.1.28,41.12.11
- ビスマルク,ハインリヒ・フェルディナント・ヘルベルト 39.10.10
- ビーティ艦長 33.8.22.23
- ビュロー (フォン),ベルンハルト・ハインリヒ德国宰相  
37.6.22,37.12.1,37.12.13,38.1.11,38.1.18,38.1.31,  
38.3.19,38.3.21,39.7.17,39.11.27,41.10.20
- ビュロー (フォン),W.地方裁判所判事 39.11.15~17
- ビリング美術館建設者 40.8.22
- ビルミー 41.6.14
- 関泳煥將軍 36.5.5



関泳翊	36.4.30
○関丙爽將軍	36.5.5
関妃	36.4.27,36.5.9,36.6.24
○ビング (バイル義弟)	13.7.13
○ピアリー,ロバート・エドウィン探検家	43.5.3~13,43.11.21
○ピシエル教授	40.5.25
ピースベルゲン博士	2.2.25
ピタゴラス	34.11.22
ピートリー,ウイリアム・マシュー・フリンダーズ考古学者	43.7
ピョートル俄国大帝	41.7.8

## フ

○ファイエル帝国最高裁判所顧問官 (在カンシュタット)	40.4.25,41.1.27,42.2.6,42.11.11,43.4.10,44.3.17
○ファイエル帝国最高裁判所顧問官夫人 (在カンシュタット)	40.4.25,41.1.27,42.2.6,42.11.11,43.4.10,44.3.17,45.5.31
○ファイエル未亡人	42.2.6
○ファーガソン美国公使館書記官	37.3.24,37.10.16
○ファニー → ○バウディッチ,ファニー	
ファニャーニ,I.画家	17.10.8
ファラデー	34.11.22
ファル,レオ オペレッタ作曲家	43.6.20
ファン・ダイク, アントニウス画家	40.5.27,43.7.19,43.8.8
○フィッケ フライブルク市役員	43.12.2
○フィッシャー (在キール)	41.12.19
フィッシャー (在美国)	17.9.28
○フィッシャー,オイゲン (在フライブルク)	39.7.17,40.6,43.11.24,43.12.1,44.5.27~29
フィッシャー,テオドール建築家	42.3.6
フィービッヒ	38.2.5

- フィリンガー, A. 嬢作家 40.6, 42.3.10
- フィルヒョー, ハンス 38.9.1, 39.5.19, 39.5.24, 41.8.4, 43.7.19, 43.10.3,  
44.2.17, 1.10.14, 1.10.16
- フィルヒョー, ハンス夫人 39.5.24, 41.8.4, 43.7.19, 43.10.3, 1.10.14  
フィルヒョー, ルドルフ 12.9.21, 34.11.22, 39.11.27
- フィントレーザー 17.9.28
- フェ伯爵・駐日意大利国公使 9.11.15  
フェスカ, マックス前東大教授 34.11.22
- フェッツァー 40.4.25, 45.1.8
- フェッツァー夫人 40.4.25, 45.1.8
- フェノロサ 22.3.7
- フェノロサ夫人 13.7.13
- フェーリング (在シュトゥットガルト) 2.3.25, 2.4.2, 2.4.10, 2.4.13
- フェーリング夫人 (在シュトゥットガルト) 2.3.25, 2.4.2, 2.4.10, 2.4.13
- フェーリング (在シュトラースブルク)  
41.10.20, 42.3.6, 42.9.15, 43.12.3, 45.3.30, 45.4.1, 45.4.24
- フェーリング夫人 (在シュトラースブルク)  
41.10.20, 42.9.15, 43.12.3, 45.4.1, 45.4.24
- フェーリング義理子息 (在シュトラースブルク) 41.10.20
- フェルヴォルン 43.7.19
- フェルスター中佐 37.4.28, 37.6.2, 37.7.18
- フェルスター (フォン) 陸軍大佐 39.12.8
- フェルター 44.2.14
- フェルター夫人 44.2.14  
フェルディナント王子 (ザクセン・コーブルク・ゴータ公国王子) 41.10.5
- フォアヴェルク 43.3.6, 43.3.23
- フォアヴェルク令嬢 43.3.23
- フォイ博士・民族博物館長 41.8.23, 43.7.19, 43.10.3, 43.10.15
- フォイクト 37.7.18
- フォスベルク = レスコー博士 40.11.16

フォック大佐	37.11.15,37.12.17
○フォッサリェール駐神戸法国領事	38.4.14
○フォラー考古学者・美術研究家	40.6,41.10.20
フォルマー (フォン)	38.1.18,40.8.22
○福島将軍 (安正)	37.2.24,37.9.5,41.3.7
福島将軍 (安正) 令息	37.9.5
○福原 (丑之助)	37.6.20,41.3.6
伏見宮 (貞愛)	37.11.26
○船越二等書記官 (光之丞)	39.11.29,40.5.28,43.7.5
○フュレボルン	40.9.17
フライク,カール帝国ホテル支配人	40.5.24
○フライク,エミール帝国ホテル支配人	38.2.26,38.2.28,38.3.10,39.5.1
○フライシュハウアー文部大臣	44.5.27~29
○フラス教授	41.1.23,41.1.27,43.1.24,43.5.3~13,43.7.19, 43.11.24,44.2.13,44.2.14,44.7.30
○フラス教授夫人	43.1.24,43.7.19,44.2.14
○フラーツ夫人	41.2.29
○フランク	43.7.19
○フランク,J.博士・軍医大尉	40.10.4
○フランケ博士	40.5.25
○フランケ,O.教授	44.11.27
フランチェスコ	43.7.19
○フランツ四川総領事	41.6.26
○フリッケ クンスト&アルバース社支店員	41.6.24,41.7.5,41.7.6
○フリデリチ (在シュトラースブルク)	40.6
○フリードリクセン教授・地理学会長	41.12.1~5
フリードリヒ一世 (バルバロッサ)	17.8.16,41.1.16
フリードリヒ・ヴィルヘルム一世 (在位1861-88)	37.1.27,43.10.3
フリードリヒ・ヴィルヘルム二世 (在位1888-1918)	33.6.18,33.7.10,33.7.14,33.8.1,33.8.20,33.9.5,

34.9.5,36.1.27,37.1.19,37.1.27,37.2.20,37.5.12,  
 37.5.26,37.6.2,37.7.15,37.7.17,37.7.20,37.9.11,  
 37.9.29,37.11.15,37.12.11,38.1.11,38.1.24,  
 38.1.27,38.2.11,38.2.16,38.2.26,38.3.25,  
 38.3.27,38.3.29,38.5.12,38.7.19,39.5.18,  
 39.5.24,39.7.17,39.7.18,39.8.9,39.10.10,  
 39.11.27,41.1.27,41.2.2,41.4.1,41.10.11,  
 41.10.20,42.1.13,42.9.14,42.9.15,43.1.24,  
 43.6.2,43.8.15,43.10.3,44.1.27,44.4.18,  
 44.8.21,2.1.24

フリードリヒ・ヴィルヘルム二世（在位1888－1918）皇后	44.4.18
フリードリヒ・ヴィルヘルム二世（在位1888－1918）皇太子	38.3.25,38.6.5,39.7.17
フリードリヒ・ヴィルヘルム二世（在位1888－1918）皇女	2.1.24
フリードリヒ・ヴィルヘルム三世（在位1797－1840）	40.5.27,43.2.16,45.5.25
フリードリヒ・ヴィルヘルム三世（在位1797－1840）皇后	40.5.27
フリードリヒ・ヴィルヘルム三世（在位1797－1840）皇子	45.5.25
フリードリヒ・ヴィルヘルム四世（在位1840－61）	40.5.27
フリードリヒ・ヴィルヘルム四世（在位1840－61）皇后	40.5.27
フリードリヒ大王（在位1740－86）	38.1.11,40.5.27
フリードリヒ・アイテル	39.5.24
フリードリヒ・カール	39.5.24
フリードリヒ・レオポルド王子	43.10.3
○フル博士	41.3.7
○古河（市兵衛）令息（陸奥伯爵舎弟）	37.9.10
○フルジヒハウアー参事官	39.5.19
○フルスカ博士・歯科医	44.1.5.6
○フレイタス駐日葡萄牙国公使	37.3.2,37.5.8,37.8.2,37.11.28,38.3.10
○フレーザー元駐日英国公使令息	37.10.14
○フレモン（在ローザンヌ）	39.7.23
○フレロース	40.8.22

○フレンケル,A.教授	1.10.21
○フロイデンベルク領事	41.2.11
○フロベニウス,レオ民族学者	1.10.14
○フロレンツ,カール教授	35.3.26,35.11.15,35.12.31,38.1.22
○フロレンツ,カール教授夫人	38.1.22
○フーン (フォン) ケルン新聞ベルリン支局長	41.5.6
○フーン (フォン) ケルン新聞ベルリン支局長夫人	41.5.6
○フンケ海軍大佐	36.7.15~27
○ブーガン → ○ブーゲン	
○ブーゲン,ヴォシェ退役陸軍大尉	38.5.10,38.5.13,41.1.31
○ブーゲン,ヴォシェ退役陸軍大尉夫人	38.5.10,38.5.13,41.1.31
○武吉料理人	41.3.6,41.5.11,41.6.21
ブトルフィ (在ミラノ)	42.10.24
ブーフハイスター	33.8.4
ブーム医師	41.10.13
ブライト,ジョン	15.10.12
ブライヤー,メルトン英国漫画家	37.3.14
○ブラウン,マック・リービー韓国総税務司	36.4.27
ブラバッキー女史	22.3.7
○ブランケンブルク (フォン) 中将	40.6,40.10.4,41.4.16,42.9.15,42.10.4,42.10.5, 42.10.12,42.10.16,43.2.5,43.2.13,45.5.25
○ブランケンブルク (フォン),オッター → ○カタヤマ・オッター	
ブラント清国駐在徳国公使	37.11.26
○ブリゲル博士・外科医	40.3.15,40.5.14,40.6,42.6.16,42.6.21,42.9.14, 42.9.15,42.12.1
○プリン,F. (在サンフランシスコ)	17.8.16
○プリンクリー,フランシス『ジャパン・メール』紙発行者	33.1.12,34.9.3,37.1.31,37.10.31,40.6,41.3.21,41.6.19,1.11.18
○プリンクリー,イネ	40.6
○プリンクリー,ジョン	40.9.14

○ブリンクリー,ヒデ	40.6
ブルグスドルフ地方長官	37.10.23
○ブルクハルト 医師	39.9.29,39.11.15~17,40.2.12,40.2.18,40.2.27, 40.3.1,40.3.15,40.3.22,40.3.23,40.3.29,40.4.2, 40.4.4,40.10.4,42.3.6,43.4.2,1.10.4
○ブルクハルト 医師夫人 (ラウラ)	40.2.12,40.3.29,40.5.24,40.11.16,41.1.27, 41.7.24,41.10.13,41.10.17,41.10.20,41.12.19, 42.2.7,42.4.23,42.5~6,42.6.12,42.10.7, 42.10.12,43.7,43.7.19,45.5.19,1.10.6
○ブルクハルト,ハンス	40.2.12,40.3.29,41.7.5,41.7.8,41.7.9,41.7.24, 41.10.17,42.4.23,45.5.19,1.10.6,1.10.27
○ブルクハルト=ツァーン (在バーゼル)	45.4.24
○ブルクハルト=ツァーン夫人 (在バーゼル)	45.4.24
ブレス公	37.5.27
ブレスチャーニ博士	42.10.24
ブレン 共和党候補	17.9.20,17.9.28,17.10.6
○ブロック	42.2.3
○ブロック夫人	42.2.3
ブロックハウス	38.2.8
○ブロンザルツ 陸軍中佐	39.12.8
○プザターレ (フォン) 陸軍大尉・「ターク」紙記者	39.12.8
○プッシュェルベルガー (在オルデンブルク)	39.7.23
プッチーニ,ジャコモ	40.9.17
プファイファー 衛生学研究所員	41.7.9
○プフェッテン (フォン) 嬢	39.11.15~17
○プラーテ,ルードヴィヒ 動物学者	1.7.31
プラトン	1.10.14
○プールタレー伯爵・海軍提督	28.11.18
○プールタレー伯爵・海軍提督夫人	28.11.18
○プールタレー伯爵・海軍提督令嬢	28.11.18

ブルマン, ジョージ 発明家・企業家	17.9.15
プレーメ 俄国内相	37.8.1
○プレーン博士	41.11.27, 41.12.13, 43.1.14~21
○プレーン博士夫人	41.11.27, 43.1.14~21
○プレック	40.5.4
プロフェーター (在カールスルーエ)	40.8.22
プロブス, マルクス・アウレリウス ローマ皇帝	42.10.31
へ	
○ヘーガー, フランツ 教授・民族学博物館顧問	42.3.6, 42.3.10, 42.3.13
○ヘーゲル	35.12.31
○ヘーゲルマイアー テュービンゲン大学教授 (ベルツ舎弟カール義父)	39.7.17, 43.4.10
○ヘーゲルマイアー テュービンゲン大学教授 (ベルツ舎弟カール義父) 夫人	43.4.10
○ヘーゲルマイアー (ベルツ舎弟カール義兄弟)	43.4.10
○ヘーシュ (フォン), L. → ○エルンスト=ヘーシュ (フォン), L. 博士 (在ゴータスベルク)	
○ヘスマン博士	1.10.21
○ヘッセ (在ロンドン)	40.4.28, 45.4.28
ヘディングガー	40.3.23
ヘーネル	12.9.12
○ヘルヴィヒ	41.12.14
ヘルネス, モーリッツ 考古学者	40.11.1
○ヘルフェリヒ (ブルクハルト義兄弟)	40.2.12, 40.4.4, 40.5.26, 41.7.24, 41.12.11, 41.12.19, 43.7.19
○ヘルフェリヒ (ブルクハルト義兄弟) 夫人	41.12.19, 43.7.19
○ヘルフェリヒ, ハンス	41.12.19
○ヘルフェリヒ, ブルクハルト	41.12.19
○ヘルフェリヒ, マリー	41.12.19
○ヘルベルト (ベルツ舎弟ロベルト令息)	40.9.6, 41, 42.2.7, 42.3.6, 42.4.24, 42.10.7, 43.8.30~9.11, 45.1.8, 45.1.10, 45.1.13,

	45.1.18,45.1.19~20,2.4.25
○ヘルマン,V.技師	39.10.10
○ヘルマン (ベルツ舎弟)	29.3.2,38.2.26,39.5.12,39.7.17,39.7.18,39.7.23, 39.8.5,39.8.6,39.9.29,39.10~11,40.2.12,40.4.4, 40.6,40.9.10,40.9.13,40.11.16,41.4.16,41.6.12, 41.8.17,41.8.23,41.10.5,41.12.27,42.3.6,42.3.14, 42.3.26,42.6.21,42.9.14,42.10.16,42.10.31,42.12.1, 43.2.5,43.2.13,43.4.27,43.5.3~13,43.8.13, 43.8.30~9.11,43.9.29,43.12.3,43.12.26,44.6~7, 44.6.17,44.7.30,45.4.28,45.9.20,45.9.23,1.11.18, 1.12.30,2.1.24,2.2.14,2.2.15,2.5.8
ヘルムホルツ	34.11.22
ヘルモルト	44.1.27
ヘンケル	40.8.22
ヘンネッケン	37.9.14
○ベイリー	17.9.10
ベーヴァー「ターク」紙記者	39.8.9
○ベーゼ軍医	36.11.13
ベックリン,アーノルト画家	43.2.16,44.6~7
別府 (晋介)	10.10.4
○ベデカ	41.1.28
ベートマン・ホルヴェーク (フォン),テオバルト德国首相	43.6.2
ベーベル,フェルディナント・アウグスト德国社会民主党首	37.5.12,37.6.22,40.8.22
ベルギー国王 (アルベール一世)	45.5.26
ベルギー国王 (アルベール一世) 妃	45.5.26
○ベルギール男爵	41.3.4
○ベルギール男爵夫人	41.3.4
ベルシュマン考古学者	44.2.17
○ベルボラニ伯爵・駐日意大利国公使夫人	11.3.26
○ベルンシュトルフ伯爵・駐英德国大使	45.2.16



ベーレン	40.8.22
○ベーン	40.9.18
○ベンガー,カール	2.3.30,2.4.4
弁慶	12.3.1,12.11.16-23
○ベサモスカ	41.1.16
○ページェット,ラルフ駐バイエルン兼ヴェルテンベルク英国公使	42.6.14,42.6.15,42.11.11,43.8.29
○ペーターゼン近衛少尉	41.3.25,42.3.10
○ペチャック アウシッヒ炭鉱所有者	39.7.17
ペリー,カルブレス	37.4.1,38.2.8
○波斯国前宰相 (アタバケ・アザム)	36.12.27,37.1.4
波斯国前宰相 (アタバケ・アザム) 令息	37.1.4
ペルタン前海相	38.3.28
○ベルニッツ船長	38.6.23
ペロフ,ヴァシーリー画家	41.7.5,41.7.7
○ペנק,アルブレヒト地質学者	43.10.3
○ペנק,アルブレヒト地質学者夫人	43.10.3
ホ	
○ホイットニー	12.9.22
○ホイットニー博士	17.9.28
○ホーエンツォレルン (フォン),アントン王子 → ○アントン,カルル親王	
ホーエンローエ,アレクサンダー	39.10.10
ホーエンローエ,クロードヴィッヒ 德国前宰相	39.10.10
ホーエンローエ,フィリップ	39.10.10
星野 精進湖ホテル所有者	41.1.25
細川家	41.5.18
○細川侯 (護久) 令息	22.4.27
○細川中央衛生局長 (潤次郎)	13.6.22
○細原ハナ	41.1.16,41.4.1

○ホッジス博士	17.9.28
○ホップ オリエント絨毯商人	43.8.30~9.11
○ホッホベルク伯爵 (プレス公令息)	37.5.27
ホドラー,フェルディナント画家	45.5.31,45.7.31
ホーファー,アンドレアス	42.10.3
ホフマン軍医少尉	9.6.26
○ホフマン艦長	36.7.29
○ホフマン中尉	41.1.27,41.2.29
○ホフマン中尉夫人	41.2.29
○ホフマン,エリカ	41.2.29
○ホフマン,エルゼ	41.2.29
ホベレフ	37.10.15
○ホーラー	36.12.12,37.3.26
○堀越 → ○団十郎 (市川ー)	
○ホルヌング博士	40.4.5
ホルレーベン駐日德国公使	22.3.7
ホワイト,アンドリュー,D.コーネル大学長	17.10
○ホワイトヘッド英国公使館員	33.4.20,33.6.6,37.5.26
○ボアス通信員	37.3.14
○ボウヒャル博士	42.3.6,42.3.13
○ボッセルト将軍	44.2.14,45.4.28
○ボッセルト将軍夫人	44.2.14
ボッセルト	45.4.28
○ボナール駐神戸英国領事	41.2.26
ボナール駐神戸英国領事夫人	41.2.26
ボニファチウス	37.4.17~18
ボニフェース	17.9.20
○ボラール博士	43.3.6,43.3.23,43.12.31,44.1.12,44.2.3,45.1.8
○ボラール博士夫人	43.3.6,43.3.23,43.12.31,44.1.12,44.2.3,44.3.2, 2.2.27,2.2.28,2.3.6

ボリス大公	37.5.10
ポッシュェール (在サイゴン)	35.12.12
○ポッチュ (在シュテッティン)	39.7.23
○ポッツ,ハットン	41.3.30
ポータン中尉	37.7.18
○ポルツェリウス大佐	41.2.19

## マ

○マイアー,マックス市教区牧師	40.6,40.10.4,41,41.6.12,42.2.21,42.3.20,42.12.1, 43.12.6,44.3.20,44.6.6,45.2.19
マイアー (フォン)	40.9.17
○マイアー,パウル クンスト&アルバース社員	41.6.21,41.6.23
○マイアー,ルドルフ博士	40.11.16,42.2.7,42.5~6,42.6.21,42.12.1, 44.3.20,1.11.20,2.2.25
○マイアー,ルドルフ博士夫人	42.2.7,44.3.20
○マイエット,パウル東京医学校教師・大蔵農商務両省顧問	9.6.26,12.2.22,13.2.25,37.7.5,39.5.19,39.5.23,40.11.1
○マイエット,パウル東京医学校教師・大蔵農商務両省顧問夫人	39.5.23,40.11.1
マイニンゲン公 ヴィラ・カルロッタ所有者	45.4.24
○マイネッケ (在ハンブルク)	17.8.16
○マウレンブレッヒャー社会主義者	44.3.30
○前田 (香雪)	37.10.17
○前田侯 (利嗣)	33.6.12,33.6.14
○前田侯 (利嗣) 夫人	33.6.12
マーカルト,ハンス画家・美術学校教授	17.10.8
○マカロフ旅順司令長官	37.2.19,37.3.16,37.3.30,37.4.12,37.4.24,37.5.12
マクシミリアン二世 (バイエルン王)	42.10.3
○マクドナルド,クロード駐日英国公使・大使	33.8.22.23,36.9.30,36.10.4,36.12.17,37.2.5,

	37.3.26,37.4.18,37.5.26,37.7.23,37.7.29, 37.8.2,37.8.12,38.3.29,38.6.2,41.3.7,41.4.29, 41.6.9
○マクドナルド,クロード駐日英国公使・大使夫人	36.11.13,37.8.2
マクドナルド医師	38.2.25
○マーシャル軍医	42.4.5
○マース博士	39.5.19
○益田(孝)	37.5.27
松方伯爵・首相(正義)	24.6.2,37.2.5,37.2.13,37.10.29
○松方伯爵・首相(正義)令息	37.10.29
マッキンレー美国大統領	34.9.9
○マッケイ	17.8.16
○松田東京府知事(道之)	15.7.6
○松田東京府知事(道之)夫人	15.7.6
○松平	22.4.27
○松平	38.1.14
○松平夫人 某陸軍少佐令嬢	40.6
松本 順博士	38.3.4
○マティニヨン博士	38.1.11
○マテオリウス博士・横浜德国海軍病院長	36.11.13,38.5.19,41.3.24,41.4.29,41.5.7,41.5.15
マハン提督	37.10.16
○マリー(ヘルフェリヒ令嬢)	41.12.19
○マリー(ベルツ舎弟ヘルマン令室)	39.7.17,39.9.29,40.5.28,44.3.29,45.3.30
○マリア(ベルツ舎弟ロベルト令室)	39.7.17,39.10~11,40.6,40.10.4,41.7.12,41.8.23, 42.2.7,42.3.14,42.4.13,42.5~6,42.6.12,42.6.15, 42.6.17,42.6.21,42.11.11,42.12.1,43.2.5,43.2.13, 43.3.29,43.4.15,43.4.27,43.6.3,43.6.20,43.7, 43.8.30~9.11,43.10.15,43.12.6,43.12.26, 43.12.31,44.1.8,44.1.15,44.1.16,44.2.3,44.3.29,

	44.4.18,44.11.17,45.1.8,45.1.10,45.1.13, 45.1.18,45.1.19~20,45.2.16,45.3.4,2.1.13, 2.1.19,2.1.24,2.2.14,2.4.4,2.4.9,2.4.10,2.4.25	
マリア聖母		43.7.19
マール,Ch.画家		17.9.15
○マルィシュ		41.1.21
○マルガレーテ → ○グレーテ (ベルツ舎弟カール令嬢,愛称マルガレーテ)		
マルクーゼ博士		41.11.30
○マルタ (ベルツ舎弟ヘルマン令嬢)	39.5.18,39.11.28,40.5.24,40.5.30,40.9.6,40.9.9, 40.9.10,40.11.1,40.11.16,41.1.16,41.8.23,41.11.29, 41.12.6,41.12.13,41.12.19,42.3.6,42.3.14,42.4.9, 42.4.13,42.9.14,43.1.14~21,43.5.3~13,43.7, 43.10.3,43.10.15,44.2.25,44.4.18,44.6~7, 44.7.30,44.12.27,45.3.2,1.9.20	
○マルタン嬢		41.3.4
○マルタン,ジェルメーヌ		41.3.4
○マルチーノ,レナート駐日意大利国公使		22.1.12,22.2.28,22.7.24
マルチン博士・植物学教師		9.11.30
○マルティン (在チューリヒ)		40.6
マルト,ズルツァー男爵		44.1.15
○マルハント教授 (在ライプツィヒ)		2.4.16
○マルハント教授夫人 (在ライプツィヒ)		2.4.16
○マレガリ駐日意大利国公使		37.3.24
○マレガリ駐日意大利国公使夫人		37.3.24
○マンズフィールド駐広東英国領事		41.6.26
○マンロー,ネール・ゴードン博士・横浜ゼネラル病院医師・考古学者		
	37.3.24,37.5.8,41.2.3,41.4.1,41.4.12,41.4.20, 41.4.22,41.5.12,41.5.13,41.8.1	
マンロー,ネール・ゴードン博士・横浜ゼネラル病院医師・考古学者令母		41.4.1

ミ

○三浦教授（謹之助）	34.9.7,37.7.2,38.2.7,39.9.29,41.4.18,43.10.3
○三沢	41.3.7
○三井男爵（八郎右衛門）	34.9.3,37.4.9,38.5.27,38.6.4
○三井八郎次郎	43.7
○三井八郎次郎夫人	43.7
○迪宮（昭和天皇裕仁） → ○皇子（迪宮裕仁・昭和天皇）	
○水上考古学者	41.4.1
ミッドフォード	9.11.7
○ミーネ（ベルツ叔母）	40.9.9
○宮島北里伝染病研究所部長（幹之助）	44.8.21
○ミュガブール僧正	35.6.22,36.2.1,37.1.18,37.6.30
○ミュテール僧正	36.4.27,36.4.28,36.5.1
ミューラ軍医少佐	9.6.26
○ミュラー従軍司祭	43.10.3
○ミュラー（在シュトゥットガルト）	43.1.24
○ミュラー夫人（在シュトゥットガルト）	43.1.24
○ミュラー博士（在ルードヴィヒスハーフェン）	45.4.24
○ミュラー ハンブルク・アメリカ汽船監査役	41.1.16
○ミュラー,U.ベルリン民族学博物館教授	39.5.19,39.11.27,39.11.28,40.5.1,40.5.25,41.12.18
○ミュラー＝ベック（在フランクフルト）	41.10.20
○ミュラーンス軍医大尉	40.9.17
ミュルジェ	40.9.17
○ミュンスター	45.4.28
○ミュンスターベルク博士	41.12.19
ミラー美国大使館員	41.6.14
○ミラー駐牛荘美国総領事	37.11.16
ミル,ジョン・スチュアート哲学者	15.10.12
ミルス	17.9.15

- ミントー加拿大国総督夫人 36.10.4
- ミントー加拿大国総督令嬢 36.10.4

ム

- ムコニシ陸軍中尉 42.12.1
- ムスクルス 44.2.14
- ムスクルス夫人 44.2.14
- ムッセ博士（在カッセル） 44.6.6
- 陸奥伯爵・外相（宗光） 28.9.23
- 陸奥伯爵（広吉） 37.9.10,38.5.27
- 村井博士 41.4.20
- 村木大将 41.5.20
- 村地（在ヴィーン） 43.10.3
- 村松考古学者 37.3.24,37.5.8,38.2.10
- ムム（フォン）・シュヴァルツェンシュタイン駐日德国大使  
40.5.14,41.3.7,41.3.25,41.3.26,41.4.14,41.5.5,41.5.6
- ムルタトゥーリ（ドゥエス・デッカー,エドワルド）作家 41.1.24,41.1.25
- ムンカーチ,ミヒャエル画家 17.10.8

メ

- メイシュ中佐・美国公使館付武官 37.8.15
- 目賀田（種太郎） 37.9.5
- メキャンベン博士 41.6.21
- メクレンブルク 37.7.18
- メーズウェ北鎮雲山鉾山支配人 36.6.8,36.6.10
- メーズウェ北鎮雲山鉾山支配人夫人 36.6.8
- メッケ 41.12.13
- メッケル,クレメンス・ヴィルヘルム・ヤコブ陸軍大学校教官 39.7.17
- メッケル未亡人 40.3.29
- メッツ 43.8.13

○メッツゲル鉦山技師	12.3.1
○メッテルニッヒ伯爵	37.7.18,38.1.6
○メール大尉	35.12.12,35.12.31,36.1.2
メルウィシュ (在シンガポール)	41.2.18
○メルウィシュ嬢	41.2.19,41.2.24
○メルク博士・医師 (在ダルムシュタット)	42.2.7
○メルケル陸軍少佐	40.5.4
○メルケル	2.4.2
○メルケル夫人	41.12.19,2.4.2
○メルテンス夫人 (前横浜総領事ツァッペ令嬢)	42.6.15
○メルヒオール,アルベルト (ベルツ従兄弟) 上院議員	41.11.27,2.1.15,2.3.13
○メルヒオール,アルベルト (ベルツ従兄弟) 上院議員夫人	41.8.17,41.11.27
○メルヒャース博士	43.7.19
○メンケ嬢	40.6
○メンゼ博士・熱帯医学事務局長	41.12.13,42.4.5,43.7.19
○メンゼンディーク医学博士	42.4.30

## モ

○モイ伯爵・バイエルン公使	1.11.14
○モイ伯爵・バイエルン公使夫人	1.11.14
○毛利公 (元昭)	33.5.26,38.6.4
○毛利公 (元昭) 夫人	33.5.26,33.8.3
○毛利公 (元昭) 令嬢	33.5.26
○毛利先公 (敬親) 未亡人	33.5.26
○モーザー帝国ホテル支配人	41.6.7
○モーザー	42.11.11
○モーザー夫人 (旧姓フォン・ズルツァー・マルト)	44.1.15,44.2.3
モスレー (在ライプツィヒ)	42.4.9
モーズレ	38.2.28
○望月京都府立病院長 (淳一)	41.6.21,2.4.24



○モッセ枢密顧問官	41.4.1
○モラヴァツ (フォン) 夫人 (在ヴィーン)	43.12.6
森文相 (有礼)	22.2.11,22.2.16,22.3.19
モリソン『タイムス』通信員	37.7.3
守田勘弥築地島原大劇場主	12.3.1
○森永医師	41.3.6
○モール夫人式部官	22.2.11
○モール博士 (在アメリカ)	17.10.7
○モール (フォン) (在カイロ)	39.5.22
モルティエ,ガブリエル考古学者	41.8.4
○モルティエ,G.・ドゥ考古学者	41.8.4
モルトケ (フォン),ヘルムート参謀総長	40.5.22
モロゾワ夫人	41.7.7
○モンゲラス伯爵・大使館付参事官	41.3.7,41.3.25,41.3.26,41.5.5
○モンテリウス,G.・オスカー考古学者	43.10.3,43.10.15
○モントブッケン準男爵夫人	17.8.16

## ヤ

○ヤウス,C. (在ミュンヘン)	44.6.6
○ヤコビ医師	17.9.26,17.10,17.10.5,17.10.7,17.10.8
○ヤコビ医師夫人 (ペーターセン=ヤコビ,メアリー医師)	17.9.26,17.10.5
ヤコービ教授 (在チュービンゲン)	44.11.17,1.10.14
ヤコブ	39.5.24
○矢島	41.6.21
○ヤナシュ (在ベルリン)	44.5.27~29
○山県伯爵・首相・元帥 (有朋)	22.10.18,22.10.27,24.3.7,33.4.20,37.2.5,37.2.13, 37.2.24,37.6.25
○山口 箱根富士屋ホテル経営者 (仙之助)	27.7.25,41.4.29
○山口 箱根富士屋ホテル経営者 (仙之助) 令息	41.4.29
○山口 箱根富士屋ホテル経営者 (仙之助) 令嬢オコ	41.4.29

○山口 箱根富士屋ホテル経営者（仙之助）令尊	41.4.29
○山階宮（菊麿王）	33.7.14,38.6.5,38.6.9
○山田伯爵・司法相（顕義）	24.6.2,25.3.25
山田旅団長（保永）	37.10.18
○大和（山尾カ）子爵（山尾庸三カ）	37.12.13,37.12.18
○山本海相・首相（権兵衛）	34.10.28,35.4.18,37.2.24,37.3.30,37.6.7, 37.6.20,41.3.9
ヤング,ブリガム モルモン教首長	17.9.15
ヤンセン教授・彫刻家	45.2.24
○ヤンソン,ヨハネス・ルードヴィヒ獣医	35.7.3,35.7.10,35.7.11,37.5.26,42.5~6
○ヤンソン,ヨハネス・ルードヴィヒ獣医夫人	37.5.26,42.5~6
○ヤンソン兄弟	42.5~6

## ユ

○雄大佐・雲山郡長	36.6.10
○雄大佐・雲山郡長令息	36.6.10
○ユリウス（ベルツ叔父）	40.11.16,41.7.24,42.4.9,42.4.13,43.8.15,43.12.6, 43.12.26,44.3.16,45.2.24
ユンケル指揮者	38.3.19

## ヨ

○吉井宮内次官（友実）	22.8.9
芳川文相（顕正）	22.3.19,24.6.2
○吉田博士	38.4.26
義経（源一）	12.3.1,12.11.16~23
ヨース令息（在シュトゥットガルト）	17.9.20
淀君	38.4.26
ヨハネ	43.7.19,45.4.28
頼朝（源一）	12.3.1,13.11.8
○ヨルダン枢密顧問官夫人	41.8.23

○ヨルダン枢密顧問官令息	41.8.23
ラ	
○ライデン伯爵・駐日德国公使	33.5.24
ライト兄弟	41.8.17
○ライト博士（在アメリカ）	17.10.8
○ライトハール	41.4.28
ライニガー部隊長	41.10.11
○ライプツィー嬢	40.6
○ライプリン,ルイス	41.8.23
○ライヘナウ（フォン）智利国公使	39.5.22
ライン ボン大学教授	34.11.22
○ラインハルト（ベルツ舎弟ロベルト令息）	39.10~11,43.6.3,43.6.20,43.12.26,44.6.6, 45.2.16,45.2.19
○ラインバーベン（フォン）	44.2.3
○ラインバーベン（フォン）夫人	44.2.3
ラウテラー	37.4.22
○ラウト医師	39.7.17
○ラウト医師令息	39.7.17
○ラウラ,ブルクハルト	41.12.19
○ラーゲマン砂糖商人	40.6
○ラーゲマン砂糖商人夫人	40.6
○ラーゲマン砂糖商人令嬢アンナ	40.6
ラッツェル,フリードリヒ地理学者	43.12.6,43.12.26,44.11.27,1.11.1
ラッフルズ,トーマス・スタムフォード	41.2.17,41.2.18
ラート博士・弁護士	40.6
○ラートゲン,カール前東大教授・法学者	34.11.22,41.12.1~5
○ラートゲン,カール前東大教授・法学者夫人	41.12.1~5
○ラドロフ ペテルブルク人類学博物館長	41.7.9
ラファエロ画家	42.2.7

○ラベ探検家	35.1.30
○ラーラント,ゲオルク建築家	41.4.26
ラルト考古学者	41.8.4
○ランガールト,アレキサンドル薬物教師	12.4.2,12.10.26
○ラング (在シュトゥットガルト)	45.4.24
○ラング嬢 (在シュトゥットガルト)	45.4.24
○ランケ,J.人類学会事務局長	41.8.4
○ランゲ海軍中佐	41.5.15,41.6.21
ランズダウン,チャールス卿 政治家	37.9.28
○ランツ艦長	33.6.22,33.7.14
○ランペルト市上級参事官	44.2.14,44.5.27~29,44.7.30,44.8.21
○ランペルト市上級参事官夫人	44.2.14,44.8.21
○ランペルト市上級参事官令嬢	44.8.21

リ

○リー大佐・共和党员	17.9.28
○李駐日清国公使・李鴻章養子 (徑方)	24.3.8,33.4.18
李駐日清国公使 (盛鐸)	33.4.18
○李 通訳	36.5.9,36.6.3,36.6.6,36.6.10
李鴻章	24.3.8,27.11.30
李址鎔	37.3.8
李相沢	37.1.8
○李容翊	36.2.8,36.6.24,37.3.8
リヴァ伯爵	45.4.1
利休 (千一)	38.4.26
利休 (千一) 令嬢	38.4.26
○リサウァ人類学会副会長 (在ベルリン)	39.5.15,39.5.19,39.12.2~3,40.5.24,40.5.29,40.6,41.8.4
リース	37.9.14
○リース博士 (在シュトゥットガルト)	1.11.20

○リース,ルートヴィヒ帝国大学文科大学史学科教師	35.7.3,35.7.10,35.7.11,39.5.19,39.5.22,39.11.28,39.12.8,40.5.10,40.5.24,40.5.30,41.5.17,41.12.11,42.4.9,1.10.16
○リース,ルートヴィヒ帝国大学文科大学史学科教師令嬢	41.5.17
○リスター卿	37.8.2
リーゼンアイファー	42.9.14
リック モルモン教長老	17.9.15
○リッター男爵・德国公使館付武官	35.1.30,35.11.15
○リニユール教父	38.2.14
リーネウィッチ総司令官	38.1.20,38.3.18
○リヒター博士	39.5.19
○リヒター外科医 (在サンフランシスコ)	17.8.16,17.10.8
リヒター外科医夫人<先妻> (在サンフランシスコ)	17.8.16
○リヒター外科医夫人<後妻> (在サンフランシスコ)	17.8.16
リヒター雄弁家	12.9.12
リヒター,アンドリアン・ルートヴィヒ画家	43.7.19
リ・フン・シン香港中国系新聞編集者	41.10.3
○リーベルト博士 (在ウルム)	1.10.14
○リーベンマン教授 (在パーゼル)	2.4.16
○リュッテン ノイエナール保養所長	41.8.23
○リュッテン ノイエナール保養所長夫人	41.8.23
リュミエール,オーギュスト 映画撮影機発明者	40.9.17
リュミエール,ルイ・ジャン 映画撮影機発明者	40.9.17
○リユーメリン夫人	43.12.6
○林学教授 (本多静六)	34.9.7
○リングナー枢密顧問官・薬剤師	44.8.21
○リンデン (フォン),カール交易地理協会長	39.4.26,40.2.27,43.5.3~13,44.5.27~29

ル

- ルイーゼ 43.7.19
- ルクセンブルク, ローザ社会民主主義者 40.8.22
- ルコック (フォン), アルベルト東洋学者 40.5.1, 40.5.24, 40.5.25, 41.12.18, 43.10.3
- ルシー → ○フォッサリェール駐神戸法国領事
- ルシャン (フォン), フェリックス人類学者 39.11.27, 39.12.2.3, 40.5.1, 40.5.25, 40.6,  
41.11.27, 43.7.19, 43.10.3, 43.10.15
- ルシャン (フォン), フェリックス人類学者夫人 39.11.27, 41.11.27, 43.10.3, 43.10.15
- ルーズヴェルト, テオドール美国大統領 37.5.12, 37.11.15, 37.11.26, 37.12.10,  
38.1.29, 38.6.23, 38.8.27, 43.5.3~13
- ルーディガー薬剤師 39.11.15~17
- ルト人類学者 (在ブリュッセル) 43.8.7~14, 43.8.8
- ルドルフ上級参事官 44.6.6
- ルドルフ (ベルツ舎弟カール令息) 42.9.14, 43.4.10, 1.10.27
- ルーベンス, ペーテル・パウル画家 40.5.27, 43.8.8
- ルムシュッテル 1.10.16

レ

- レオ十三世 ローマ法皇 11.2.25
- レセップス (ドゥ), フェルディナン・ヴィコン スエズ運河開発者  
41.1.25, 41.1.28
- レッゲ, W. 画家 17.9.15
- レーデル 40.9.19, 1.11.1
- レーデル夫人 40.9.19, 1.11.1
- レーニ, ギイド画家 17.9.15
- レーピン, イリヤ画家 41.7.5, 41.7.7, 41.7.9
- レープマン 43.10.15
- レープリング, ジョーン 17.9.20
- レープリング, ジョーン令息 17.9.20
- レーマン教授 41.1.21

○レーマン	38.1.6,38.6.7
○レーマン,ニッツェ教授 (在ブエノスアイレス)	41.12.14
○レムケ	41.4.29
○レムヘルト博士	42.11.11,43.2.5
○レーレン (在ニュルンベルク)	41.8.4,1.11.13
レンガー	40.8.22
○レンツ,エルヴィン (ベルツ令妹エリーゼ令息)	42.8.20,42.9.14,44.3.29,44.7.30,44.12.27,45.3.2,1.9.20
○レンツェ	42.4.4
レントゲン,ウィルヘルム・コンラット	34.11.22
○レンナー	40.4.25,42.3.6,1.11.10
○レンナー夫人	40.4.25,1.11.10
○レンネル	42.2.6
○レンネル夫人	42.2.6
レンバッハ (フォン),フランツ画家	40.8.22
○レンハルト医師	41.12.1~5
レンブラント,ハルメンス・ファン・リン画家	17.9.15,41.7.9,43.7.19
○レンホルム,ルートヴィヒ・H.東京帝国大学法科大学講師・司法省顧問	33.4.20,35.3.1,37.3.2,38.1.27,38.6.1,39.11.26, 39.11.28,39.12.2.3

□

○ロイシュレ嬢 (ターフェル博士令母)	41.12.1~5
○ロイベ教授 (在ヴェルツブルク)	44.11.17,45.1.8
○ロイベ教授夫人 (在ヴェルツブルク)	44.11.17,45.1.8
ローガン	17.10.6
俄国皇后 → ニコラス二世俄国皇后	
俄国皇太后 → アレクサンドル三世俄国皇后 (マリア・フョードロブナ)	
俄国皇太子 → ニコラス二世俄国皇太子	
俄国内相 (スピャトボルク,ミルスキー)	37.10.9

- ロジャース 41.1.25,41.3.4
- ロストック横浜德国海軍病院事務長 17.8.16  
 ロゼストウェンスキー中将・バルチック艦隊司令長官  
 37.10.30,38.1.6,38.1.25,38.5.5,38.5.19,38.5.29,38.6.23
- ローゼン男爵・駐ニューヨーク・駐日俄国公使  
 17.9.20,33.6.6,33.7.14,36.9.30,36.10.6,36.12.14,  
 36.12.27,37.2.7,37.2.10,37.2.11,37.3.6
- ローゼン男爵・駐ニューヨーク・駐日俄国公使夫人（ミュンヘン出身）  
 33.6.6,37.2.7,37.2.10
- ローゼン男爵・駐ニューヨーク・駐日俄国公使夫人（ペテルブルク出身） 17.9.20
- ローゼンベルク 39.7.23  
 ロダ・ロダ, アレクサンダー作家 44.2.25
- 六角医師（謙吉） 41.3.6  
 ロッキヤー, ジョセフ・ノーマン天文学者 43.5.3~13
- ロッチ, D. 17.9.28  
 ロード, E. 作家 41.6.26  
 ロナン製材所経営者 41.5.8  
 ロバーツ, フレデリック・スレイ元帥 33.2.17
- ロベルト（ベルツ舎弟） 17.10.7, 17.10.8, 37.5.26, 37.6.18, 37.11.15, 39.7.17,  
 39.8.9, 39.10~11, 39.11.30, 40.2.12, 40.6, 40.9.10,  
 40.11.16, 41.2.3, 41.7.12, 41.8.23, 41.10.20, 41.12.1~5,  
 42.1.13, 42.5~6, 42.6.12, 42.6.15, 42.6.17, 42.6.21,  
 42.9.14, 42.11.11, 42.12.1, 43.1.13, 43.1.24, 43.2.5,  
 43.2.13, 43.2.16, 43.2.21, 43.3.6, 43.3.29, 43.4.5,  
 43.4.10, 43.4.15, 43.4.27, 43.5.2, 43.6.3, 43.6.20,  
 43.7, 43.7.19, 43.8.15, 43.8.30~9.11, 43.10.15,  
 43.12.6, 43.12.26, 44.1.15, 44.1.16, 44.1.22, 44.2.3,  
 44.3.2, 44.3.16, 44.3.29, 44.4.18, 44.6.17, 44.11.17,  
 45.1.8, 45.1.10, 45.1.13, 45.1.18, 45.1.19~20,  
 45.1.25, 45.2.1, 45.2.14, 45.2.16, 45.2.19, 45.3.2,



- ロベルト（ベルツ舎弟）令室 → ○マリア（ベルツ舎弟ロベルト令室）
- ローマ法王（ピウス十世） 37.6.30
- ロミンガー商工業顧問官 45.2.1
- ロムベルク教授（在チュービンゲン） 42.6.21,45.3.4
- ロラン,クロード画家 41.8.23
- ロンドン美国作家 37.5.24,37.7.3

## ワ

- ウィペルト駐京城德国領事 36.5.5
- ワイルド,オスカー 41.8.23
- ワーグナー,リヒャルト作曲家 38.3.19,40.9.18,41.4.1,41.8.1
- ワグネル 12.8.4
- ワーグホーン少尉 41.1.28
- ワシントン 17.9.10
- 和田（維四郎） 33.1.2
- 和田 37.10.29
- 和田 41.3.26
- 和田 41.5.5
- 和田博士・海軍軍医 36.6.24
- 渡部（小使） 35.11.15
- 渡辺宮相（千秋） 2.1.24,2.2.28
- ワルトハイム 41.3.4,41.4.1,41.5.13
- ワルトハイム夫人 41.3.4,41.4.1,41.5.13
- ワルトハウゼン 24.3.7

〔備考〕 岩波文庫本『ベルツの日記』（トク・ベルツ編，菅沼 竜太郎氏訳，上・下二冊）に登載する人名の索引については、平成10年3月1日発行の本誌第15号に掲載された拙文『『ベルツの日記』について—その内容と性格』の末尾に付載しておいた。その後、同12年9月20日に東海大学出版会から『ベルツ日本再訪』（若林操子氏監修，池上弘子氏翻訳）が上梓され、同書の内容は、明治38年より大正2年までの記事を主として、これに加えて明治11年より同14年までの足掛け4年間にわたって記主たるベルツが関係をもった女性エラについて綴った記事「エラ」、さらには「アメリカ日記」と題する明治17年の記事、等から成っており、そしてその掉尾に、それら諸記事に所見される人名についての精細にして周到なる索引が添えられている。仍って同書（『ベルツ日本再訪』）収載の人名索引を基本に据えて、この体裁に倣いつつ、これに、上記の拙文末尾付載のそれに修正を加えたものを統合して一体化させるとともに、ベルツの親族のそれをも新たに付加して作成したのが、ここに掲記した人名索引なのである。この新規に作成した人名索引に、思い掛けぬ過誤や不備・不充分なところのあるやを惧れるのであるが、この点については、大方のご叱正・ご示教を得て、後日、修訂・補足に努めて参る所存である。なお、ここに掲げた人名中、頭部に○印付加のそれは、ベルツ本人が直接に面謁・面談した者、もしくはそう考えられる者であることを表わし、年・月・日条の1ないし2の年次は、大正のそれであり、他余の年次は、すべて明治のそれであることを各々示す。